837
13
79

雅言集覧 下

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

837
13
79

雅言

外記 下

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用　挟み込み物

837-79

雅言集覧巻之五十下

○加の部下

石川雅望集
関豊脩補

曽山文庫
根岸信輔氏寄贈

かなたくみ 神代紀下 天目一箇神為作金者(カナダクミ)

かなつち 大本廿五 信実「かつへすくさとをくちにあへひつそこらかまへてくみかる」 和名十五 鐵槌 廣雅云鐽 和名加奈都知 鐵槌也

かなづ 夫八 拾遺太百一 俊頼「ひろまへのにはびのまへにあまたかなつ彼とそろそうれしさ 和六 一和琴「庭火さくたつりもとまふらちそすへるまつさもれ絶の宮にあまりあけくかなつ 夫十八 大本三十二 さきへはえそそのこすのうちにそのりなる 学内着裳 十四 かしこにかくはつがすくそのそのくしりめそびかるでとりめつさう おうあし 古事記下 拳手打縢 訶那傳 字治拾 二四 わしく着ものありてくすくめりをくさすめぐうしからん かなでとみでや 狭衣三 その後にはかなでとくと吐してつくめれぞ

かなつくり 夫 廿二 信実「かつへすくさとをくちにあへひつへんあり名かなつくり 大本 卅六 加奈多久美加不ナリ。○金鉄(タタミ)ノエヲノイフ

かなづゑ 和名十四 行旅具 鐵杖 加奈都恵 字治拾 十二 ノ十五 巣の大ふとの上に名つのふけりかなる杖の大なるかなを ちてをふつきたてて

かなぶぐ 此 字治 五 えそびにかなぶぐをかりすごさへいとくことや 狭四 ノ廿九 いりますれ先 ご后ふたるてんとえてしのかくと 今昔 十五下 元ふはへかなぶぐとこのめさろ名人の 夫 十七 小笠原 玄宮にすりてかなぶ

「かなとかるあかくその門の川ゑを曉でふかなぶぐでする 源氏上 八十八 此も今へのとびあしと流に大ぞゝかなぶさ

多くも作くれを 薬花山六巻どてう枕冊八今ハとありをもかくそ必の左右世も安める死ごと女九のうとこそいと
ぐれめとをふの多そをれど 院於 雑上 奇題 世といふ公ハさてさをぬべしうるさ公のおくうをを。

かるうをく 必々 樓ノ上下 さてのうるに男公安うふのつべき

かるうを 鉄臼 河海 香細二掲者和ノ供二入鉄臼掲一五百枚き〳〵
掲久 あぐふそうちのくてかるうをのきる
落ボ 乃サ一ラキ茅力と ヲヒタル形ヨ

かるうる 弁下 古 ねむうふをんくをおさるに一て服公つくるのつぐをんとさがかるとうてかぶぐうとさんさぐ
死とかき出くこらのあ木井人ふんせく郷分かんせんと後ぐうち石
何ともあうぐそえうていとあることぐ〳〵うとうちしてそひうる
ぶひておそ一キ一てかく〳〵をしうど内のことをも底ふのことを
薬 六ひうろうふ安ろく却るるぐるどろ又ろるくびくさ多
めうく〳〵くハえ川ノ又ろくべくそそもし一ろそれか 扇 四ろをも
つル〳〵 七ろ六限 ゐあひのそとととをを一ろるぐうちして

かるうぐ 守屋三品 ゆさ行福一ノ今今ぐんとめて又ん公ぐ
和名抄 十二 鉄落加奈久曽 蘇敬曰是鍛家焼鉄赤沸砧上鍛之皮甲落也
かるそ ○テニヲハ哉ヨ心 俣葛名抄 序のそれうろかぶや仏ろの同のキようもぬうること
口九月十三夜於花山院御遊和歌 うれをふかぶやくろ
かるそ へのまぐふうぐろ大ほんとうそうろこぐ一きろるやとろ
がるそ ○顔つん 哉ヨノん 加十六木 サ七ろりかへそ越みぐ

かるうる 用金椀二空也 竹より ろろくれのかるすりとり
らけのうらとろ花すり 附 **さへのすり** 玉ノ鋭 神代紀下十三 一一

かるふ 万二十 家田立 「にさうろみのうもんと月すてそ仮ろ
のぐふ年 ろうすろうろ多く称のろう木 帚 九 かふかる
かるろんと仮称とにふく称仏 ます 口世 男ひのとさうそ多そ
かるひろうと男公 うそくも 中に男の多死ホ一ぐこ行しおど
たさ世ふこそとおボ一つけて 枕遊 雑上 体景四 こび入ふう
さうつボ 十八それてるくく枝てかそうんとちさうそのひしみろる
かるうー 俵ひめ二ワがふみぐろもかるそぐろちぐろうと 山氛 下 ろろ
ちん 保木 表三 白表 「ワそれるんとちふさこそれりんとうるろ

かるひく 和名抄 十五 鏡 加奈布久之 鍛鉄又土具也
平家 五十三 ろうふみナせえ仏辺のれら公るひんとこえるうろ八同のいとまりて会仏もけぐいそる安りみ

かるそ 假名文。 ゐ章 「ワカナ上 十九 ん道のことこ かるぐこうんの
のんボ
ゆくうてるんれうそそもまうねと

かるで カなグ ノ不二出ス
かるめ ○ろの本 成尊記 里二廿三 あんぎの紙ふ目公かー えんぐ
かるー ○ろふの公表歌の名 神代紀 上三 流滓 カシミヲ 山氛 下 「ろれさキー私そうとくりてくるーこそうる社の

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

なにもつくられむ【栄花山】六などてか林邊は今はとありともかくとも世の定めなき世のならひなりけるとこそいへ
ぐれぬと見えたのみえまれば【院於】雑上 香隆「世といはゞかはさてすさまじめべしうかるゝをのみぞおもはるゝ

かならず〳〵 必々 【拾遺上】下ノ五十三 こそかゝるかならず〳〵と笑まひてゐたりつひぬ【円】十四甲 かならず〳〵見ゆるのがみと
さてのゝちは思ひ出づるにあつべき

かなうす 鉄臼 【河海】香細搗者和名供ニ入鉄臼搗ニ五百杵云々 【拾遺】すぐにすゑのうへてかな臼のまゝ耳かしかましき比なり

かなぐる 【蜻蛉】乃廿一ア手をかなぐりて ひきひかへて見もしらでかく 手ヲカナグル 【竹取】十四 ちゐらくにこそ人へはおそきこゝろしてかなぐりおとさんとす
死とかき出でくるなるを見れば人見えてやせん ことのあかなぐりてかなぐりおとさんとするがゆゑに【枳角】大 カホルノ フナリサライフ本ニ云 すゝめるのらいにて
ゆとむめるにゆそいとあへるほどにかなぐりたるにゝちなしておひかなぐりおとしのをむ【鏡】中五六かなぐの名のかなぐれば
あひておえしまうしてかくしまりしかど内のうへもこなたのうへもかなぐりはつく あくまでさまざまなる ひさをのひて
【薬】十八ひくのつかさをくかなぐりたどりてすべてびくさえがかなぐり【夕ぎり】さこそとゝりてそささかみどもあを
めくらしくはえりかなぐりてくれとこしなそれ【帚】四ノ十 ゐるくの人てかなでかなりかぎりてそあらくかなをひきかなぐりあ

かなくつれ 【つれ〳〵】上三十五段 なかなかひのもとをとしるかなぐりちらして
【字治】二ノ四 内にさげ落しかゝりかなくづれとりて見えそなさことの今の世なりてありける

かなくそ 【和名抄】十一 鉄落 加奈久曽 蘇敬曰是鍛家焼鉄赤沸砧上鍛之皮甲落也

かなや ○テニヲハ哉ヨ心 【後拾遺集序】序 あそれてかかなや此みの国の才すぐうるやぬつるると【着】三ノ五 去年の丸のしきつくる
【八九月十三夜於左衛門府来右衛門府】 うれしきかなや久への世とおのみく

がなや 願ワん ガナ 哉ヨノ心 【かげろふ本】廿九 ちうかへてむすがなやと思ひすぎさまひて【河海抄】「とりて人も物かな
へいまがちらぐるにそ大臣へとまそなうとそすかしさうなめやとある

がなや 世なかありしがらのワガ身とおもへれ

かなまり 【和名抄】十六ノ二 金椀 日本霊異記云其器皆鋺 俗云賀奈万利 鋺字所出未詳 古語謂椀為磨利 宜用金椀二字也 【竹取】ありつゝねのかなまりとのちてあらとをあり、【枕】十三 さゝしと見ゆるおかえ
らけわらしたるかなまり 【附】**さかなのまり** 玉ノ鋺 【神代紀】下ノ廿三 ー

かなふ 【万】二十 紀田王「にきたつにふなのりせんと月まてはしほもかなひぬ今はこきいでな 【未木】廿四 家会「思ひのまゝ大方
かなふ身ならうえてうねのかなふやはるかにとてよしと【帚】九 かなふまじうとえうそのつゝ人の【後拾】十八 思ふ人
かなへんとは程とは人く外れにまさり【同】卅八 思ひのまゝさうそのかなへてそれはいワガ思ひのかなふにはあらぬ かの【帚】十四 のぞむる
かなふのまりと思ふを【うきくも】中にはわかのなれなしびとはとめりしれどかなえしづくかなひなまり【まつむ】十六 やよりかなふひが
たきを世にもそとおおしつづけて【松返】雑上 偽果心三「ひとりへかへる世中にいけるかしとやうかのさへかなふそぞりなん
【きりつぼ】十八 えねとかなく枝とかへさんとちさかなきのひしふかるえざりなる今のれどぞつきなきをうらめしくれ
【楼ひめ】三 ワガ心みぐらもかなえざりなりちぎりと【山家】上 やよそのみあれの夜もかなふひく路のかなけすへとあるらしきぞ
あん【後於】夜三 見玉「ワすれなんとやへさへこそおもりてかなえぬわが身ながらなるかなへさうなれ

かなふくし 【和名抄】十五ノ九 鐃 加奈布久之 犂鐵 又土具也

かなひく 【平家】五ノ廿三 かなふ中せぞ辺の物なるかなふひくんとて中しとやむささゝはらんその手でいはず

かなぶみ 假名文 ○古今之 【ワカナ上】十三ノ九 へ邊のかなぶみのうらへへかなぶみこつのうる人目ののひとまりりて念仏もけぐいさるあうつし
中くぞうしてあるまひるつそさもあれかぬと

かなで カナヅノ不ニ出ス

かなめ ○扇の本 【盛衰記】四十ノ廿三 あふぎの紙はいへ見ぬかしこれでたれそれよかなめの程とところして ひせうとえみつ

かな〳〵 ○きのふの数のなき 【神代紀】上ノ十二 流漾 カナシミテ 【山家】下「われさびしき秋もうちなくわれて くるしさうつる秋の

まとろな 〔万〕一之七百「その大宮人は人のかるしも」〔さごろも〕七「かぎりとてわかくなるのかるしきにいひわきては今なりけり」
〔同〕九 勅使きてその宣命よむなんかるしきなりける 〔同〕八 かくろこそれのかるしきろぬへるれてざこると 〔万〕六廿七「ぬへ
かのふきりの なくおわくし、てれなつくしへまれいかるしき 〔浮拾〕秋中 よみ人しらず「大宮ふまかむところあるるのくふ
かるしくきやわきておくらん

かるし。 大事ニ思ヒ大事ニスルニ カハラキノ意也

〔文貞〕十二 わがかるしと思ふ娘とつかうまつるべきやと 抜ぐひ 〔竹とり〕主 ふと夫の羽
衣おきモにりつれば意といとおしくなるとおぼしつつるもう世ぬばさぬ
きつる人へおもひろくなりふれれども 〔アカシ〕四 かれしきめこの君をもえでおぬへきてのをるげく 〔帚〕廿七 これへ
故左衛門のまの子なくいとかるしく作りたると 〔イセモ〕ひとつ子ふさえありけれどへとうなしうしのひなり 〔イセ集〕大
こせをふと皆宮のの局ユ大和が歌あつ人さるふひなり 歎いとかるしうして男などもあそせざりけるなる 〔後カゲ〕上 子なき女
子ひとり生せつかむしうきろるの唱ちしきなし 〔同〕父おとく唱りなくかるしううしのひて行時も此目さらちのすねるもなき
〔同〕中 かくいところまされども歌の〔く〕にかなべきうすハセにば歌へかるしき おもなりと思ひありくらり 〔まつかぜ〕廿 姫君へとのいと
かるしうしのなうひる 〔万〕十四九「にかきるのかつしうはせそにへきとまそのかるしきとまさてめやも 〔同〕三十「つくれね
ふなるもゆくらいろゑぞ、なにきてろうねほなうし

かるし。 イツクシム 愛ル也 〔万〕七十四「えきふうの枕のちしくなしきうてをしまつてハ花ハちるとも
〔万〕七千「神さなるいかねてしきよしのくさなうかとまれどるなしも 〔宗祇〕〔古今〕并今ニ其モヲキテホメテアソブ事之面白シトイフサマノ心ナリトイヘリ
なれささく あまの小舟のつなてなしも 〔六帖〕三「冬かしあくいれもかるし 胡なくなでおかしくうるひこうそう
〔古今〕大歌所「みちのくハいづくハあれど塩がまのうらこぐ舟のつなでなしも 〔宗祇ノヒケル〕「いつくふかねかりく て
たそれふさんと思ふまかるし 乃堂の斎 〔今物語〕三 されふさち なる女房の堂中へまいれるびてとおうあそうろろふ
次なる人ふくとはぞさむ尻つへそらくつる人なくと見世ふひとりごちさうとうぐふ世さしくもおかしろくてし男

何となくふまるる人もやいなくてねざめさにとし出うちんからこれなる女房ののおそろしや堂にもさ文のありけるなるよ
とそうやくこれうろろしきるく世なげきりうろろあまりみ夏なくかるしく覚えてそろふきく

から 殻

〔古今墨滅〕 〔拾遺〕「かくろてもまるさなうきのきてもまんうろへ木のかとうりふしもののと 〔古今〕哀傷「うつせみ
からをえつもなぐさめつふろ葉の山煙だにたてよ 〔文貞〕卅八 今のからをえてハ又いつの世ふうあひかるち
ともつらん 〔夕ぎり〕卅八 からとどうあをしえまうらん 〔かげろふ〕上九 おもへしまふけん方と身もねでからとどうなろぐへくとさやへと
ののくど 〔同〕ろ なくうりのつる人とてもからをおさてあつうそそうつるなき 〔六帖〕五「そろふきちどぶ夫の羽衣えてしも我
うれ世ふふからものとさど 〔大和物語〕三「なきひへからしきうなるもなりろうそうづの我へからをきぞありける
鬼にまれかへなきとうろれかろともえよまふらんとおひづくつぎて 〔同〕五 あが君やりつ方ふうお覚えしきまわるかぐ月を身へおぼし
きらくとどうふえまろうねがかひなくなるしくもあろうる 〔さごろも〕九 むなのきまかうとうつろへ我くおそそるねとうふめが
いとくひあるれぞ 〔古今〕〔哀傷〕よみ人しらず「哀しきわがひをしてましひまぶひるむびむなしきうろの名ふやのこふらん 〔かげろふ〕下七 いと
ようげなうろの世うなうなましてなきこうひ又かうろひをく 〔ワカナ下〕十二 のねけ うろ虫のかろきとの世うつやまごりとで
よそうげみおかれ 〔アゲマキ〕八十六 かくあづら虫のからの世うみてもえるわざなるまししうぞと思ひすぐさる 〔和泉式部続集〕
末のびて人ふめのあとは人は 〔「身ハあけどからをハえふそひせれハ手てにぞくあらん名ぞ」〕 〔新拾〕哀傷「うつせみの世はかしかなりの
うとかの人くさくさ
素殊ふかくくふふふあね人の上ぞうえ 〔中務集〕「これうかくうろ尚あてハしのひそんこく一つてふなとや このえ

から。 俗ノ見テカラ 喫テカラノ カラト同シ ヨリト同シ

〔同〕廿「えうもなきあとてえうくなうれしきさいハくらばなうの湊ひずらん 〔六帖〕二 〔秋通〕「出てからワシくをきけそふの井のふうう
しょうりもワびしかりるり 〔土佐日記〕ふわとなにあけぬからあとりつくのがんどす 〔続後記〕十九十二 少世の國とくつくつひ
て七日へしろう 〔六帖〕五下 琴「浦のきのんさうろことふ吹かるへまのあとくべやあろくふねらるらん 〔カゲロフ日記〕三 さそ
うるみぞりしそれなるなり 殺ぞちなりまどりのひしうべ 〔同〕三 これぞこれらへべき人かうらくあるまずやなもあり

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

男女一ノ松女生ヲ云テ装ヒ一ノ
からろ 夫主家ノ主ヲ云「ヲ敬テ云ヒソウナ事ヲ云ヒ
ミノヒヲ夫ノ夕風カラコロモヒククソノ松風
云テカラコロヲソヘ
からふくさ カラ錦 松女一ヲ云カラ物カラ
国ノコトヲ云ヒ 狂言記「ヲ云テハヲリヲヘ
ヒトヲ云ヒ
あらふかう 物ヲ云ヒヲルノ
からり。 山伏ノ云ヒヲノ伝授ノ 大蔵ニ云男ヲ云ヒ人ノ左衛門督ヲ云ヒノ
カラク書ヲ書ノ巻ノ名ノ四扉風カラ
からとさ 神末 韓神ノ名ヲ云ヒ又ヲ云ヒ
伴ト云ヒヲ云ヒ多ノ主ノ関伽奉ルヲ云ヒ花ヲラスヽギテカサヲテカラ
からく 宣長云 関伽奉ルヲ云ヒ
さくル 花ヲ云ヒ
からかへ 盛衰記 山ヲコヒヲ松ヘノカヲヲクヲ云ヒ
ヲクミノヒヲ云ヒ
くりくへ 狂言記 ヲ云ヒ
ヲ 大蔵 とくくヲヲヲヒテヲヲヲヲ云ヒ
からかみ 二月上亥日十月壬日ヲ云ヒ
大国御魂神次ニ韓神 公事根元 園ノ韓神ノ名ヲ云ヒ
ヲヲ云ヒ
からくれ 和名抄 廿六 択摸 和名加良太知 玉箒ヲ択ヒ
からくもち 和名抄 廿四 草麻 和名加良可之波一云加良衣
からくまま 夫 世 猫ヲ俗ニ云ヒ
からくり 夫 廿六 狂言記 三ノ巻
からねこ カラ 猫 ワカナ上 百一カラ猫ノ
からころも カラ著 狂言記 三ヲ云ヒ

多ゴロソヲヲヒ
ヲヲ云ヒ
からかみ 公事根元 ヲノ山トノヲヲヲヒ
大国御魂神次ニ韓神 園ノ韓神ノ名ヲ云ヒ
からくれ 和名抄 廿六 択摸 和名加良太知 玉箒ヲ択ヒ
からくもち 和名抄 廿四 草麻 和名加良可之波一云加良衣
からくまま 夫 世 猫ヲ俗ニ云ヒ
からくり 夫 廿六 狂言記 三ノ巻
からねこ カラ 猫 ワカナ上 百一カラ猫ノ
からころも カラ著 狂言記 三ヲ云ヒ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

ほどにあはれからずまづみへくさたるうかゝ

からゐでしき 【新年祭】大臣ならむ世にありしの井ぎ上来からき上来 【千載】五 和泉式部「ちる花をこの世の外にあだなりへんてしこの花にそまりなる 【落窪】一 曲そへのさけるが六十ばかりなるなど人のわかきをさしておもひたらん 【円】

からむ 搦 みくさりのからむりおもに被なとく 【イセモ】十二段 ぬすと人なりければ國のかみにからめられにけり

【江次第】五ノ廿三 恐有犯人可搦進 【平家】五廿一 よりてからめうとや 若一人もゆるへずりしけれ

からり 。 からりノ不ニ出ス

からうじて 。 エイヤツトシ之別ニ一ツノ詞ニナリタル故コヽニ出ス 【イセモ】六段 からうじてぬすみ出て 【円】四段 ぞうりに六えへりて又の日の戌の時ばかりにからうじていき出たりける 【竹トリ】六 火鼠のかはからうじて人を出して求めてたてまつるの世にもあの世にもこの皮ハたやすくなき物なりけり

からうじて買ひとりてたてまつる 【円】十 中納言の病ひおもき いとうろたへ給ふかしこの所にけて人に疏とりさせて 【アテ宮】五 病の大殿の御へんまゐりて見ての殿もなさへのまかでからうじて泊ぬ 【国ユヅリ】上五 年比ましくかなしくのこまへまつるとからうじて對面のとりくれぞ夜の人ぞしてなど倍へ見ぞ 【吹上】卅九 ぞうどもあまろえり侍からうてからうじて立まひぬ さまくの祭なとありて 【円】四十三 のぞし人物へ見へつゝて見まつりのかり ごぞりつゝからうじてむかんよべ参りのかりこし 【帚】廿三 からうじて今ハ日の夕さるもなかれり 【ウツセミ】土 からうじて出のふ 【夕ガホ】廿一 からうじて今のまゑる夕に 【夕月ウラ】三 之事分もおまされども見ひ給ふかられて とこにおもそぬるく からうじてきて 【ほ枕】三 からうじてあくりなる女のおつくむねのありて又えあれど行きかれむ ところから からうじて見しもひつぎてや出ぬらんいうさゞよそにせんと思へかどもある人は出來ある

【附】からくして 【大和物】三 からくして思ひけるをつたへ聞くどうしてなきうる事のあは 【円】三 【伝明】廿三 からくじて 【大和物】六 くちなしてよみかろ

とししてはからぬ今よりてありつを、さゝへおかんよやまろ 【順】廿三 「まことのもやとなんかりてあれよりかゝりてまたにいまだうぞえぬ

からむし 苧 【和名抄】十五 麻 和名卆一云阿佐 周礼注云苧 和名加良無之 麻屬白而細者也

からうと カラ 哥 【土佐日記】あうじのしりてからうとなかけてのひろり 【円】 王雅が仲丸ヲオタルかしこの事なに作るどころ 【古今】序 そもくうたのさま六つなりからのうたにもかくぞあるべき 詩ノコトイフ不ニ 【土佐日記】けむのかくぐわふろのひとゑ からうのぞとも時に似つくれしきりん 【もぐし】十一 そのうのおどもからのもやまとのもんなくふうう面白くのさろん 【推古本】七 からのもんまとのもあどもおぼくれどうろさくて尋ぬるもさうぬるり

からうす 【万】十六廿一 セキ家 辛碓 カラウス 辛碓 春 庭立碓子 カラウス 辛碓 春 【和名抄】十六四 碓 祝尚五曰 都隊 反 和名加良宇須 踏春具也

からゐあき 【夕ガホ】十九 これくとろ祢うるもなとろくしくるとぞゐるそからうそのかれとも

【十訓抄】三十五 太刀を持て申つの内のかうのあきさにおもうろり 【円】六ノ四 背もまなかへで人のうの立ゐ姿 にたしくせるひとり

からのかん 【ワカナ】上五十 あさんの人ひとうろひもからのおどもそくの御しのかるどのれて

からのかき 【延出】子カキ ムラ不ニ からの紙へあろくておやふゐ手あら一ゐもゐうざとそかんやの人とめしてことに作のひて かことふさうろくみそろせあくつや 【スマ】廿九 白きからのあをえ枝 【葵】廿五 そくらのをしきろかうのかさま

からのこがみ 【ゐろくろ】廿五 からの紙のいとかうおしえとう出て 【ことん】十二 からのあをぎの紙のあるふうろう白へると

からのあやし カラ 都 【万代集】旅上 戒覚上人「今こそうれしからもあるきにくろうの般なゐへしくつれぞ 【みをつくし】十 からのあやしし

からのかりの 【林の衣】廿一 からのあどもとりりやさえまうでぬらんじてろうづふ

からく からくノ不ニ出ス からくして からうじてノ不ニ出ス

からくに 唐國 【狭衣】四中卅 から國までも尋ねまはしげに見くさらぐめつさいのうのあうしまやとみく 【はま松】五 「来ぬ夜の白へする暮へからく國にあの帝も言りじとぞなる 五條本 【万】十九卅五 「大みふまうるちく

ゐこと此あごとから國々ありくへ神さま 万代 紙四ノ表ノ六 ちひさき人 ちひさきものゝ
せんと八

かくく 。姑ク かくげノ条ニ出ス

かくるま カラ車 夫 廿三 仲云ふ第二「ふみと云ふ手紙をかくるまとそかくる
かくしげ カラ櫛笥 夫 廿一 養在深窓人未識 る遠 かくしげあけてーそれが
かくそみ 和名抄 十五 絳 加良久美 織絲為帯也 古今 春二 ちくさ
かくれゐる カラ紅 男ひもろ〳〵 古今 秋下 イセモ 葉末 ちくさ
神代もきゝずくゝ川くゝゐかゝるくゝとハ

かくもり 纊 万 廿三 石のべのうちのうんみまほしのかくもり
かくげ 為ノ条ニ 車のとのこでおりとうくとうつくとうつみてうくこれとかくげくとそのゆひろ
えふともかくげと 院古今後ニ むくろみくく旅とつくとうつみてうくこれとかくげくとそのゆひろ
古今 六 又くびうみどりのおとそけらまてゆひくけらまてうくこれとかくげくとそのゆひろ

かくげつけて 古活 八三 大風ノ条 きゐのかうのくそしもおきてかくげつけて
又おとがひの縄をてかくげつけて

かくころも 韓衣 万 十五 韓ノ名 おくみの我身にまとひぬうらめぬくくころも
きるくの里のきるまつみやこしつけむくころも 古今 旅 伊勢物語 かくころも
ほ摺 かり女 かくころもうち回とうそおもふくくへかへとかくころもうち回とうそおもふくくへかへとかくころも
ぞりのおどろも我くくさ 古今 旅 ふるとかくころも 行幸 かくころも
きつくるゝ一つまくゝのゝそるくくさのつゝ蔡そくぞろへ
ぞりのおどろも我くくさ
きつくるゝ一つまくゝのゝそるくくさのつゝ蔡そくぞろへ

かくあるも カラ藍 夫 廿八 ゑつ花染 いくくほもろのゝそゝ
万 十五 杖さゝべかげふもせんと云ゝ死ーかくあるのゝ我とくゝゝくゝ。おゝとくゝ

かくさと 和名抄 十五ノ八 連枷和名加良佐平 打穀具也釋名云枷加也加於柄頭所以擲穂出穀也
かくるさと 馬医抄 内大臣侍関人かくるさとゝいひくゝくゝ
かくるさと 。からーノ条ニ

かくるさと 唐衣 和名抄 十三 背子 和名賀良岐形如半臂無腰襴之袷衣也漢語抄云甘子婦人表衣以錦為之
枕 七八 とのきぬのそろゝゝかくるさとゝいひくゝくゝ

かくあく スマ 四五 をゝひゝくゝかくあくきたり 枕 三四 をぐくゝとろのゝ木かくあくきて
りくゝさかのおゝとゝ 口 七九 家毛のゝふるゝくゝんくゝとろのゝふるゝくゝんくゝとろのかくあくきたり

かくあめ 瑚 かくむノ条

かくあふひ 童蒙抄 向日葵ゝそ日の数ゝくゝくゝ 文選 七 陸士衡園葵詩朝榮東北傾夕顔西南晞
枕 三九 くゝあくひいくりひてかくくゝんそるへてのそ木ゝ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

…ともかりて打つき

からこき 枕迷 やえ 「あーこれいさうりくまでぞ人きろひろやくそやくそ
その あまのかづくて人生のうくまのくえぐの世 散木 あのうえの
おもそひ物くうれとひろと咲てれめてくそをろろかくまとりくえ
んこれがにーうれだからうりるまうざうめや

からこ 和名抄十六 辛菜 和名賀良之俗用芥子根細而甚辛薫好通ニ鼻之氣
。辛 又喊 ヲヨメリ 哥三八 多久八 次ノ カラシニ兼テヨメリ 別ニ抄セズ 万 十ノ廿七 えろのあまのくろ
とさてくーはのかく役ともわれいろうも

からし 。難波ナムライフ 雲葉集 下 「おのろうろうろくそのかのからしそ
セツナキ こ かそうふおうる年暮のかしそくふあそねいへ ヨトメ 十三 産のまとかくーとおがとぞ
いとことろうるや 永久 四 出ると友代原大いとかしとありひう

附 **からく** 文今 雑上 文治 三 「うてる史雑波の浦ふあく塩のかくくもかいまふりひうろる
あそのろうつむりーかのかくくもかふりひうろる 松迷 九 長寿かひもうぐさまろうれの世丸
かくくてそこのくのえく うのやこ いとあそるーうからくそあぐかの 続古 廿二 新古 そみの浦ふ
かくえかくくらひてもかくーつふ 続拾 五九 わんとをけそう人の救ふもりんぐれど 右帳 五上 りれ級のさーてそこつれど
かくぐーさかんおっあくいさんぬうそれそうといそううくぐりふへ 玉林依藻 上 そろ年そうこえ文つのくうに
そうつーかのくうくて世ふもろそつふ

附 **からさ** 惨刻 五十五 そろのあその一旨もからを年く塩のかくえをそもんいもろかも カケ日記 二 「くぐが九
ろくとかえをろくーばそありひそさんかくさりざろる 新通 下ノ廿五 「云へ男のかくさおそう
久人かりもねとふもねとん菊の白夢 サカキ 平六 かくさうのこのんを世中そーさくあぐさんて 夕負 廿七 かごと

ありひぬくさぐいとろくそうり 続千 五十 かくさうくそうり年ふ作ろ 「めし」 四 おろろさおびうてろる
家のいとかくさふもんがそさそさろろる 「つれく」 上 古今 書写 のえへえそ豆ぐろ一るのつぐく
ろうとふのひろれいうとろーぬおのれにそうろめーく家とへふそうくろうろ

からえん 唐繪 花 八九 着衣へてろうろうろ初かく画の衣風のおそそこと

からひも 唐人 雑上 天 廿五 衣装考 「うれーさといろふきれろうかくへの
初六 一 えを着角衣 「かくへ人の川甘ふろうを盃の学ふふさそろみとろ久へてあそへてろうへごをれすさえろくそー

からひつ 食器具 二 盥器韓櫃 仕衣物韓櫃 「そうつ不」 廿六 「んーさろくのかろひつとも 「夫」 廿二
とへいく現へうろのかろひつふとさあて秋へいふやあくへんー
そごりがえーさ中とり月へのひへて 「やどりき」 上 ちろさうごーこがーひつろ
おうーげろろふぐろひつとろ野くろく九ろぶ石や着のへのかさをさ
とーろのしごもとろかさろうーろう 「蜻蛉日記」 中上 かくろうろうかくろ
カラウトとろへひろひ

からひさ 。斗名ナリ 「雑下 後拾遺」 唐庇ノ安ヲ蓋ノ物ノ出ル年北白川そさ
たてくーさーのべ物もありさろ客候もさ 「帰」 九 かくひつとも 「夫」 廿二
ふ年のべひろ完ありさ完縁ふうろさ乱て法冷ちの年る服おかくけて今のの。これと我本つさ
ろう年とろくく安ふ院の西冊北白川女院の再延之とろ人依往ハりの
ふ 「千七集」 かろうりぐろ尋れてびてろる男 「ハそ
のへとれれ花 「拾上」 「かくりぐありがれとそ乱ろへ人ろ五
。乾物カ 「後拾遺」 とさめとのありてうれくさりめかろ
かろのありそぐを 「りかう上」 百三 ろくぐろ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

からもの　唐物
［ワカナ上］廿三　…［新千載］餞別　朱雀院の御時…［古今］別…［新千載］別…

からさけ　乾鮭
［宇治拾遺］十三　からさけを…

からもも　杏子
［和名抄］十七八　和名加良毛々　［新六］六…

からす　鳥
［和名抄］十八四　烏孝鳥也一名鵶爾雅云純黒而反哺者謂之烏　［万］十四廿八…
［六帖］…

附　むら—　山—　月夜—　あさ—　うかれ—　［夫木］廿七　［新撰六帖］六　むら—　友—　こ山—　夜—

やたがらす　八咫烏
［古今著聞］十　加茂　遠祖———奉導宸駕
［神武紀］六　朕今遣——宜以為郷導者

からすうり
［和名抄］廿十　栝楼一名瓠瓤　和名加良須宇里

からすあふぎ
［和名抄］廿十　射干一名烏扇　和名加良須安布木。今ヒアフギト云フ　［古今六帖］下…［夫木］…

からすむぎ
［和名抄］十七四　穬麦　和名加良須牟岐　以作麨者也

からすばもじ
［敏達紀］二　高麗上表疏書于烏羽字随羽黒既無識者辰爾乃蒸羽於飯気以帛印羽悉写其字
［後拾遺］…

からさき　今枯
［好忠］十二月…

からすき　犂
［和名抄］十五七　犂　加良須岐　字鏡鋘加良須岐
［夫木］廿七…

かむ　噛
［神代紀］上廿三　齧然咀嚼
［拾遺］…

かむ。鼻ニ
［まや］六十四　…

かん　感
感ズの和名…［夫木］廿…

かんろほふやく　甘露法薬
［夜］四十廿…

かんにち　坎日
［花鳥］九　坎日不可出行云く凡諸事憚之日也
［タギリ］廿二　かん日…

かむ。
［新撰字鏡］廿　醸　酒也造酒也治酒也　佐介加无
［古事記］…［万］四廿五…［万］十六…

かんどり。
楫トリの和名已見…

かんどの
神殿
［和名抄］十三六　室倉漢語抄云——保久良一云神殿
［袖衣］四ノ十六…

かんわざ 神事 〔神祇式〕一 觸死葬之人雖非神事月不得參著諸司云々 〔夫木〕廿五 下人のなまひしろさに…… えきあへでなくなりにけるとぞかんわざなるにはいとふびんなるわざなりとて…… 〔栄花〕五 比の帝も……僕もみなこの…… かんわざなれどいみじうのくしろ

かんぬし 神主 〔神祇式〕一ノ十二 神主二人 〔神功紀〕一 皇后選吉日入齋宮親爲神主 〔宇治拾遺〕十三ノ一 人の神主の神つかさてゐたり 〔うつほ〕廿三 さてくえうのかんぬしの人にかんがへさせ…… 〔宇津保〕十ノ 宮咲にとかんがへさせ

かんがふ 勘文ノ勘ニテ考ト意同ジ 〔うつほ〕廿二 ふるくのかんがへみどもそれぞれいふ 〔くもの 六 〕……

附 かんがへかた

附 かうがく 音便ニテ意同じ めでたく人 〔三宝絵〕八 いとさき日ありくちらうと又さき日をしと考へかなふ 〔サカノ花〕百三 かやうの人の例とそせてかう……をかうへてかうがへさせたらんなる例

かんがう 勘當ノ勘ニテ 上ノト異ナリ 二様トモニ カンガフルト動ク 〔秋ノ夜長〕絆…大師ら様々の老法師ふ作りたる時郡のつかさかしらの申さ義の作り…… 〔拾〕三ノ廿一 いみじう殺ぢちありてかんがへて衆に与へいつかう 〔宇治拾遺〕三ノ八 「年」とてかゝらの者かゝうのみなあたらしくかんがへ…… 〔门ち〕一 ひどくならいえたあのたびにかんがへ…… 八十四 かんがへられつゝあるるにとおもしてそのかみかく心あるされつゝさるなど

附 かうがく 〔後カゲ〕中 大変なかんがくるみなおとこのおもしろきこと…… 〔アゲマキ〕九十一 月伝の罪へさも…… 〔浮み〕廿 かうがへなまくさとすの人へくぞさいかなしくれぞ ふくうらぬさなまてそうかゞへありあまり

かんだち 神館。神すわるく所なり。賀茂の社の…神殿の跡のことなり 今カウタチとよべり 〔源氏〕〔拾〕ノ書キヘセ

〔源氏〕文言くみやうのかへさの日かんだちにつかえしろつおきく 〔门〕ノ みやうの使してかんだちに作りなる 使の典侍

かんだち 〔新古〕〔新〕上 祭使にてかんだちにとまりて作りたる 暁女方の女房の中より 保ニカウヂトイフ 〔和名〕十六ノ十三 𦉮 和名加無太知 朽也 鬱之使生衣朽敗也

かんだちめ 。公卿ヲイフ。上達部とかく 殿上人の伴のところにて三枝の枝をとの… 〔きりつぼ〕三 かんだちめうへ人なども 〔帚木〕六 又ある人のかんだちめなどまでのたりくる

かんだから 神宝 〔文徳実録〕三ノ八 御馬並神財并九月亦潔備矣 〔古今著聞集〕十二 神物 カンダカラ 〔三とつく〕廿三 使者に… まうでゐゑいのてしさかんだからとめてつけたり 〔夫〕廿四 神使 … 宮の神たからを移まつくさなまゐる白居

かんだう 勘當 〔続日本紀〕八ノ廿二 如有不遵教者随加勘當 〔続紀〕十三ノ十七 勘当陵守長百済春継 〔大鏡〕宮下 十二 若致闕怠者尋情勘当セヨ 〔浮舟〕六十三 びんなきことをもあるべからずかんだう せしめらふべきよしうん仰せど作りつれぞ 〔落窪〕二 これよりかんだうおりとつぶつるぶくらじさふくべきやそ えざらにおげてきつるに 〔竹とり〕八 人く翁の返りかどらしらくと申りの… かんだうあらじとてまかりつる やとて 〔後カゲ〕ちるおはるそのの どのこどもへつくよふつくえし ごくおぼさるゝハやんとかんだうせられ 〔秋秋〕下九十三 天の下これより… あらじ 〔カゲロ日記〕二 おれこうちも法かんだうふあへらうまへ… 〔门〕三 太のふね一日の此かへりいらでありけん又かんだうありけんとのそまかりたりとえぞ 〔アゲマキ〕廿五 あのあるさかんだうや 〔栄花〕十六 いとつまりなるさかんだう 〔门カミヤク宴〕十五 そうるなとあるぞかんだうありぬべきなれけしれふうてそ 〔宇治拾〕一ノ廿八 … わりとハかんだうかうぶりなんとおぼさすがせのなひつれぞ

附 かんき 勘氣 〔明月記〕寛喜二年六月廿六日 親族やえ秋感去今月勤公事籠居云 依半物之愼泪也

かんさんをとぐく 肝膽ヲダク [盛衰]十於慕 過去今生の不修の功徳ゐ回向して持採を碎て精誠を凝し祈りさまれ近もね

かんづくさ 神司 [サカキ]四 かんづくさのの心どもてかしこにまちさぶさて

かんろ 仮字 [拾がん]十二 まゐのこと皆ゐへたとりまうおさく我か白くうのまろれとかんろのまろん今の世へいとなへゐくろりう

[門]十三 まんろのまくさうろれどふかんろへ志をけゐれのしさうきうめれ

かんろ生のつぶ [拾芥抄中] 未廿六 韻芳含雷鳴壷凝花含比 [公の拒法] 六月の香ふ入をし

かんろらう [かさね]四 秋ゐらの家「百とせのみ月といのうかとへ秋ゐらうろゐりきせうれん

かんろつき カミ子月ノ系ニ出ス

かんろさ [和名]二十 巫 和名加牟奈岐 祝女也 覡 平乃古加牟奈岐 男祝也 [新猿楽記] 巫遊之氣装貌ガホ

[いせも] 六十五段 法場所かんろぎさらびてきくえらへ入ろまうふ [えいひめ] 廿 かんろぎ去うのかのへとえでぐうりまろ去うふ

[附] **かうろぎ** [栄花海の大段]六 かうろぎことぞ仏車のくちのみるふのせてりろく此かうろぎてうでまさふ涙らく

かんのとの [ちや]九 媒ふ依をさして まことふ北方のは致ふおしゐんとかんのとのくは婚かへおえせぞ

[附] **かうのとの** [字治拾]七 かうの殿ぶふさことすそめも

かんのねし ○四分ノ内ノ何ニテモ 加ミヲ サシテイフ カウトモ 通メイヘリ 以下同シ

[ちや] 八御身かね常陸をさしてつうぶれいハかんのねしの人からもおくしくおとましき人ゐれむ

[竹川] 三かんの君のはちうきゐるり

かんのさう ○是ハ附ちのかくろり

[附] **かうのさう** これハ附ゐとさしてりんと

[次本] 五十二 伐明 此かうの君の仏御安方ふちりすかとりくむ

かんのう 堪能 [八雲御抄]一千六 判者以堪能重代為其仁 [著聞]五十九 待賢の名れとうちておのくかんのうの人とのせられろふ [ツレく] 百四十段 不堪の藝ゐかちて堪能の座ふつろろり [著聞]十九九 堪能の遊ア

かんのくぞり ○上條之 ○上件之 [大和物]六十 ありつるふしをかんのくぞりふいせさせろり

かんやかく [宇津保]十三 もうりハしきかんや紙もちのくふ紙ゐどの

かんやうひ [記] 神夜良比尓夜良比賜也

[夫]卅一 格侍あ絃「わ主衣義さて家ふりうゐへ祈せうひようのむとふんこ

かんざし ○ま劉ゐ オモザシ メザシノ類也 髪ツキヲイフ

うつくしき絵びゐんさゐゐりしき人ゐとも [つろむさふ元]九いうけゐくかい母りくろ家つきかんざしいとじう

[サカキ]廿三 かんざしうちつきはくしのかうりくろさる

[拾がん]廿三 かんざしおさ去うの色ゐゐう人のかをうけふふとおぼへてめでさうれむ [盛衰]四十 ろ金の座ふもおられ么も

のひね先帝も法ふおへりのひてはゐけきうちつぎれらくはゐろけきむひとのかんざしふ付ても今へ何ふうへ

せさせのうべさゐれむはさまをかくさせゐへり

かんざし 器 [古語拾遺]金釵 [和名抄]十二六 簪 和名加無左之 挿冠釵也 著頭篇云 簪笄也 釋名云 笄係也 所以拘冠使不墜也

[さうぶ]十 もかのかぐうおは寛ぜさとりさて人のさうみう尋ね出さうりくんあろしのかんざく

うつくまるしうぞとおかれそもいとかひゐるし [字治拾]十三十二 白きさいでしてかしうをつくりて髪ふおのかんざしーゐろひと

さしてさうり

かんさび 神サビノ系ヘ出ス

かんそのまつり 神衣祭 [令義解]二 孟夏 神衣祭 謂伊勢神宮祭也 此神服部等斉潔清以参河赤引神調糸織作神衣 又麻績連等績麻以織敷ニウツタ和衣以供神明 故曰神衣

かんじ 勘事 并 多ク音使ノ カウジトイヘレバ カウジノ傍ニ出ス

かんじ 柑子

かんしん 甘心 [和名抄]十七六 馬琬食経云ーー 和名加無之

[つれく] 八十三段 洞院左大臣殿此ろと甘心しゐてはを食とはふ甘さゐろぞくゐへふ満足さろく

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

かんびやう 看病 続古事談三 按ずるに看病のかうみあるひはそがさうそくをうこがひてそのかざしかたりをくとそ
かんず 感 文徳実録九 ヲオ 是、薄徳乏能、令感致群起物瑞非須 梅の上 千世いたし きおのこまはまこと
かんじて 按 二 生昌詞 一次のつゐてに申給ふかうに侍しうぢのそうかんじ申さむ 二 ツレ〳〵 哭 仮 かもく感ぜさせ給ひ
附 **かんのあまり** 令抄法 二 感のあまりふるふるどこびうろうろ
感ぜ〳〵めさ〳〵めをとろぎうろ〳〵
かんがく 閑寂 方丈記 一 一 お着もろもろ馬鴈よりけうどしくう
かんしつ 閑所 著聞十三 きおぬ宮仕えて宮あつめてうろ香のうぎもいおのいかうもきくうれて
かう 香 按 ぢ 名 物 たきお合せる人おのをまひう香どもおぬ宮むぬ
〳〵めつ 自 ろ おまこのたかうひつようづめ且てうろ
〳〵ふきく 香りき 九五 お物かうぞ 一 ゆいこび仏かうのくうそをのうろ
里舎の宮ふまるかうのくうりやきとうろうん 夫 九 著 寂
成世うろん 新古 一 歩後 一 うえつぐくかうのくうりの叶うろうりひつ
かう 講 ほ 抜 二 お物語とからにかうにまりけうふうろ ふるうろ 十かうのきにかうだ きかうふおの
按 抜 下 舎利講のつでよ教命仏のみを そ 宮 自余大政大臣 ほお 報 の歌表 山階寺の但
繋縁ふまうでくきく 二月 六日 後拾 夏 宇治お大政大臣教命ふ 千 縁の捧物ふうく
かうぞ 講ズ未ニ出ス 弘ふ 尺 意按余関白お 千 縁の捧物ふうく

かう 。為ノ ナキ声 按 五八 めさまうきさねぶさうんとやくへと待のにて暗方にさういさうわとのて孫のくろうようくとろ
かう 。斯ノ音便 カクノホ 二 義 哭 哭もぐろうろうへかうはのうろんや さうろホ 五 いとろうーもうへとおぶし
しづかれど
かうい 更衣 。称 二 延喜式 貞観十六年、参議、太宰権帥、従三位在原朝臣行平女為清和天皇更衣 按 ほ 抜 下 為更衣 是ニトアレド今本 続ほ紀 五三八 為更衣ノ
三字ハナクテ柏原天皇女御也トアリ
かうろ 香爐 和名抄十二 小品経云、以白銀一黒沈水供養般若
かうじ ヤドリキ 九五 あのおうむーや うろせミ ヒ かくろえのいとかうむーく寺自ム 九 ほ ひめ 廿二 あやく
かうじを かうぞーく句ム風のいてうと 字統 六 いまとうろ お物かうぞーくちろ花ふひろいおまも 尺 後拾 夏 宇治
かとうろむーくちろ花ふひろいおまも 尺 後拾 夏 宇治 「女の国とかくろ風のかうぞーくろ他のころ
白ひろろん
かうべ 和名抄 二 経名曰首始也 和名加字倍
かうべとめぐうそろく 。旋頭哥之名 新撰 十六 八
かうちやう 。コレハ綱丁ノ文字 ナリトイフ人アリ 実録 六九 年中輸貢調庸雑物色数非少而民幣入済未進狼積実
是綱丁盗犯使者斟綾之所致也 降 阿弥 弐 九 按 木 十二百四十四 廿 讃岐國
十月以前差綱丁進納 主計式 十 九 鋳銭司所進年料銭随所進数且附綱丁収収文 又曰 九諸国貢
調并雑物綱丁等若失諸司収文有申官者官先令訖司勘之 朝野群載 五 應進上鴨頭艸移上紙墨
等支 丹後国 但馬国 播ノ国 備中国 伊与国 讃岐国 甲非文国 信乃国 上総国 件鴨頭草移
等為充東對御簾用途料二町仰如件 国宜知状差副綱丁於使者早速交易依数進上 口 廿 太宰
府検納率分給玖伯参拾参疋二丈参尺 六百疋 見色 三百廿三疋二丈 綿貳万屯代右永久二年料綱丁

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

権算師小野篤弘所進検納如件 ナド見エタリ 貢物ノ運送スル使ハ長ヲイフナルベシ
神祇式ニ讃岐国綱丁トアリ引テ綱ノ字ヲ地名ト見ラレシハ真渕翁ノ誤リ也 三代実録 二十五 進官米八十斛載於一船
綱丁進上而遭海賊悉被侵奪 宇治拾遺 一ノ廿 丁継のかうちやうとあるもこれにや

かうぢやう 定考 令義解 四 選叙令凡應叙者本司八月三十日以前校定式部起十月一日尽十二月三十日
太政官起正月一日尽三月三十日皆於限内處分畢其應叙人本司量程申送集省云々
凡應選者皆審状迹銓擬之日先尽徳行徳行同取才用高者才用同取労効多者 江次第 下九 定考
六位以上の加階とる人ハかの長上續切跡擬勤とよみひて定考の考へ定まれるを式部の長者より諸司の筆の
三日と號ることと列見といふそれと書あつめて奏せることと擬階の奏とりて佐人にとよみひ出してさだめ
定考とハかくて定考と文字にかきて作るをさかさまにかうぢやうとよみて作るを

かうかん 合歓 新六 六 夫 廿九 衣笠 「山ふかきいつよりねぶと名をとりてかうかの木のしたに人まどふらん」
六帖 六「ひるハ咲よるハこひぬるかうかの木の君のみみんやこけさへあへて わけの君 万八

かうがい 和名抄 十二ノ十六 擽髪賀 文選注勁叡理髪賀 釈名云毒縣道導也所以導擽髪賀髪也或曰擽髪賀 和名加美賀岐

かうがい 祭使 四ノ六 白き花の枝にかうがいのさしてかくれつけてまつる 十三段 廿一 枝のひきれ
ゑずあふかうがいのさしてなまめかしのとりれて 栄花 五十五 沈の櫛白かねのかうがいとりれて 敬本 中ノ卅六
いるりふかきなかくうつ人のまくしとて紙にかうがいのさしてつるにむ書つけてつかはしける

かうがく 。カンガヘノ條ニ已ニ出ス

かうく 。斷 カウ くく イセモ 十三段 かうくいまハとてまかるを 宇津保 八ノ三 かうくいたうおぼしまどひて人
とりえむ 落窪 四 かうくのまるえかの大臣のまかるとて ミとつくし 卅六 かうくのまるを
るんとうのまへ煩へふかく 栄花 村菊 七 かうくのまるとするそれわかれつるを

がうく 嗷々 吉記 治承四年十一月廿八日云々 世間事人口嗷々之外忘餘念了 盛衰 十二ノ廿 ののさておそそれを

万葉ハこのみ出てこそあるに天の下に緒までこそ有けるゆるされて歌くの体とえざる不尽刹拆と惜ひおど
ゆかしめをハいりぐてへ何うつぞ人の中どう

かうぐし サカキ 四 柴木の名たどもハさまざまにかうぐしくみえはべれて 亥のうち 頭ノサマライフ也かの大極殿の
ぬこ しるやうろ木のかうぐしときに 夕ぎり 一 此鬼にそ今ハおそろしくもあるぞまりけされかうぐしき
けくとそへたやとたえりとふりひろしのりぞ 松 九ノ八 カモ祭行幸ノ行幸にまゐどふかりかハ何とあるんはこしにまうえ
あるハイあるセミうハ明くの哉とはあるまうるひつるがまうるるも見えざかうくしうりつくしう。神ころしきも

かうぢやう 草堂 今昔物語 五

がうだう 強盗 和名抄 二ノ十 群盗 一云強盗見唐律 松 八ノ二 名かせろしたおがうだう

かうぞめ 香染 さごろも 一 四 おかくとはひさしぬくしてかうごろもおるはかきつけのまう
栄花根合 十二 ふ宮の女房ことにハふひのろかうぞめなどとぞきたりける

がうな 寄居虫 和名 十九ノ十 寄居子 和名加美奈 借借用蟹蝥二字貌似蜘蛛者也 松 十三ノ八 さとるくゆる木の女けはり
みしうぞはたハがうなの家に人の家のふ亀とさしりまてうれさうみ 方丈記 廿 がうなハちひ
さき貝をとなむるくあのれとしむるりまき 字治拾遺 下「あま人のいそなくるひしきうのはにしえるべうかうなあるてみ

かうなぎ カンナギノ系ニ附ス

かうらん 。 句欄 高欄 飯国沙州記 吐谷渾於河上作橋句欄甚嚴飾句欄之名始此 玉篇 階際ノ木
高欄トカクハ誤 句欄サレド式ニモ 高欄ノ字ヲ用テアリ 帚 四十四 ミなの人のかうらんにおえおしおうかめの人
葵 卅 ゐのつまのかうらんにおしかりて 末ツム 廿一 いとことさへかうらんのしとおもろかしうさく 松 五ノ二 ある手めう しき絹 友れ
のうのあざやかなるものかの欄のいとうらいとあらしげるう猫の赤き首縄に良きうて殿の綱ひつきさて引ありくも
るまめいろう 廿 六ノ七 妙法治 の事のつみおりハいとあそうく傍まうてかの欄におきえてゆくおと法師ハ板殿なの台うに
そひてゐるをかうしく

かうのからうひつ 河海 納諸香唐櫃也 源氏

かうのとの 幷 かんの君ノ傳ニ附ス

かうのとり 香鳥 和名抄 十卷本 喪礼圖ニ一一 俗ニ香乃古之

かうやう 「ウ」ハ「ヨ」ノ誤 きうかう十卷本 みだりがはしきこと 俗ニ香乃古之

かうやく 膏藥 和名ニ毛教禄ト名出セリ 於迭 別 みちのくのかうやくのかうこんともかうやくともいふ

○立家家ニテ勢ヒアル家ヲイフニアタルベシ ○倍語ノ雄ニ借テイフニアタルベシ

がうけ ○轉ノ何ニテモ他ノ物ノ威ヲ借ルコトイフ

かうこ 蚕 和名抄 十三 夾纈 加字介 和結帛為文縑也 神代式 五 物忌一人料 夾纈 帛三丈五尺

かうこうぢ 着ル 和名抄 十三 冠 黄帝造也弁色立成ニ幞頭 加宇布利 松 七八 舞人 不加

かうこうり 冠ライフ

かうこうり ○加冠ニテ 於迭 かうこうりのもけ 時 註宣 元服ニモ ロ 雑上 若狭の大伴かうこうり作りくる 「もひそ

かうこうり ○爵 玉ハル 得ル 舒明紀 十四 因 給冠位一級 古今 雑上 叙爵ナリ

かうこうり 冠 落永 三 そのんのをうへかうこうりえて三のの

かうこうり 蒙 古語拾 かうこうりをうへて

かうこ 香ゴ ワカ十上 卅 かうごこそうのおそく 葵 四大 かうごのねをひとうさ

かうこ ○カウテノ音便ニ 若ノ裏六 かうでをうへんとハうとうもがさせじ

ふるけぬひきうくひごとかうでとをもかうでぬ

かうこ 高巾子 河海 高巾子ハ巾子ヲ高クシ白キキヌニテハル六位ノ舞人ヨリ上ノ者ノカブルモノナリ

ろどあそう人のいとこざうつまとるのつもりまくらやとうへそう。雅望案ズルニ浮雲逢蒙見王莽殺其子乃解冠掛東門浮海而去 ワカナ下 十二 かうこうどの君ノ後ニ

かうこうり ○加冠ニテ 於迭 かうこうりのもけ 時 註宣 元服ニモ ロ 雑上 若狭の大伴かうこうり作りくる 「もひそ

かうこうり ○爵 玉ハル 得ル 舒明紀 十四 因 給冠位一級 古今 雑上 叙爵ナリ

かうこうり 冠 落永 三 そのんのをうへかうこうりえて三のの

かうこうり 蒙 古語拾 かうこうりをうへて

かうこ 香ゴ ワカ十上 卅 かうごこそうのおそく 葵 四大 かうごのねをひとうさ

かうこ ○カウテノ音便ニ 若ノ裏六 かうでをうへんとハうとうもがさせじ

ふるけぬひきうくひごとかうでとをもかうでぬ

かうこ 高巾子 河海 高巾子ハ巾子ヲ高クシ白キキヌニテハル六位ノ舞人ヨリ上ノ者ノカブルモノナリ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

かうざ 高座 【江次第】五ノ四八 次ニ講師下高座 猶多シ 【枕】三七 説経師はとくかうざのもと近き程のもとにぞゐるべくぞおぼゆる

講師もなく 【同】二九 朝座のかうじ清範かうざの上も光みちたる心地していみじくぞあるや

【千載】ハイカイ 六波羅蜜寺の講の導師にてかうざにのぼりけるがもの[illegible]

かうざく。又オリ出タル詞ニテ秀逸ナイフホドノ詞 【陸機文賦】立片言以居要乃一篇之警策 注 馬因策而行喩文資片語而理明以一言入衆辞中若策之驚馬也 【文粋】三ノ五 運命論朝綱 詞無警策何思文章之立騎前 【同】八ノ四 菅贈大相国春首一年之警策四時之光彩也 【白文】七ノ十九 五言七言詩警策之篇多在人口 【後拾】下 かうざくかの御あそびの[illegible]かうざくなりけれど

【吹上】上五四 かうざくなる人のあれむかしことに人のそこのよの人これなどの事へ 【神林】上四八 せんかうの[illegible]ありければ者はとかうざくにいひ出されたり 【同】下九三 年頃は[illegible]かうざくなるうつの[illegible]人只今まぜたるありけれどものぞきて人の事へいとかうざくに[illegible]まさる人なり 【おや】十三 [illegible]

へこそうかうざくにおもしくきこえかはしたまひめり

かうさく 視告朔 【三代格】十七 是八百官の行ひの上日と云ひて月毎に天子の御覧ぜらるゝ告朔の文と云ふ事をとやむる事なく視告朔とうちて是をかうさくと二文字なるむげ[illegible]て作らくてこそさく云

よみさうとく

かうざゐ。カクサマ 此ヤウニ 【源補】十四 源中納言かうざゐにこのきしうは[illegible]白はそ 【こてふ】十六 かうざまのすりは[illegible]とてかうり[illegible]けれと

【宇治拾遺】四ノ十二 かくと[illegible]ろ人はそのおわれどもおもろげのお人の[illegible]とにてありつりのともかうさまの[illegible]りは [illegible]

【東級日記】

かうまう 高名 【ツレ〳〵】[illegible]のきのわり 【枕】五十三 [illegible]宮にまぬ[illegible]ひて[illegible]

[illegible]これや[illegible]のまぬ[illegible]とのひろうかくのどやきく 【狭衣】一下先 [illegible]

そく[illegible]かくざうつ[illegible]えけ[illegible]きるありと思ひつゝ[illegible]ることてそのえや[illegible] 【後漢書】廿五 韋彪傳

かうし 格子 【和名抄】十ノ九 篇陽子 通俗文云ーー 音陽字亦作䈱 俗用格子二字 竹障名也 【帚】卅五 かうしとあげ[illegible] 【夕顔】十一 中[illegible]かうし一つあげて

かうじ 講師。奇合ナド講師 同し 【花の宴】四十五 [illegible]かうざを[illegible]よ[illegible]講師もえよみやらず句ごとにぞのゝしる 【さくむし】三 [illegible]講師まうのぼり 【土佐日記】廿四日講師[illegible]

かうじ 講師。僧官

かうじ。勘事 今ノ勘當 【後撰】雑三 父母侍りける人の娘にしのびてかよひ侍りけるを聞きつけてかうじ侍りければ 【落窪】十二 [illegible]かうじ[illegible] 【かげろふ日記】二 男君 [illegible]かうじは程[illegible]かくべれば[illegible] 【同】三 [illegible]年月の[illegible]そうじ[illegible] 【さくむし】廿九 [illegible]のかうじ[illegible] 【枕】一 [illegible]

かくうつてわるとこ 【三為記】十七 [illegible]

さしてはかしこくかうじあるされてれの[illegible]

【附】**かんじ**。 【拾遺】雑哀 延喜の御時桜ぢの[illegible]かんじ[illegible]つかうさるうてひさしかりけれ 【続後紀】八ノ十一 犯状乃随尓勘料勘賜弁止定太利 【サガ衣】十三 宮にかうろうかうわうむりくづう[illegible] 【宇治拾遺】二ノ十九 [illegible]

かんじあうさせて云く [illegible]

せんとりふると[illegible]

かうじ 柑子 【和名抄】十七ノ六 柑子 和名加無之 [illegible]。梁説ニ今ノ九年母ヲトイヘリ 【落窪】十六 [illegible] 【宇治拾】二ノ十三 [illegible] 【イセモ】八十七段 [illegible]大柑子の[illegible]

のかうつべぢて[illegible]。コレハ常ノ蜜柑ライフカ

栗の大きさなるこぼれかう 【散木】下四十 [illegible]かうじ「よ[illegible]

久ろろ 江後拾三 ろる名る名ます大茸子小茸子とめり

附

かんが 枕冊 世七かりのこのいとあやうきうとにはなんどをかむじ 枕遊 おろ花かむじ

。合子。次ニ出ス

かうぶり 詩書カ 久ヅノ村ち 十九年有 史記 いろさのかうぶりをもう今年ぞつくろうろうれびかづ

かのかうじ〳〵このうそてくろえん

かうまん 庚申 枕草紙 庚申ハ人腹中ニ有二三尸一為二人大害一常庚申之夜不寝則不得上天一庚申經 あや 四種とれろうあくあ

染花山 六月ようのくさろ出来てこれをえくわうさ人ハ、 源氏 枕草紙 七月七日庚申あうて大江匡衡 作りそうまいろ

のひてえくあかどあ教尓して女房ふあのようをもの人を 染花山 年の秋の庚申ろりせさをあへとかせさとそれにろくはるせうせ

「いとぐ〳〵くあけろろんセタの秋ぬよふおくうえのおろ 枕 年中行事哥合 み邦 いて申ぐで狩そ安そ〳〵ふのえ

さろあ〳〵こけとみこさ尋ぬろん 庚申の夜ハこち夫ふあげりて人の若魚とつぐとやされバ欲とろりて

祇侍ろぬとろれいふうさうチふ及ぞど

かうせち 講説 そうむ〳〵 四 かうぜちのおいふろのろとしづめそのどうふおのふもさてわくぐさうろるとを

かうぜ 講ズ。詩あ食ル 初ニイフ ぜーのくろ 千載 発 こてふおきうしくろろ時ろくかのれ方ふて何退年あとりてふと

後ぜ〳〵ろふ〳〵さをのひろる法花経巻 四 「法の後ハ 粉文 みさ文集 上冊九 「かのろふさをこそ〳〵そ時をろさきうと今

かの 人のろろんふの内とりろんとんぐしくあぐーる 四 ウツセミ 「かのねざをべ〳〵うとをととりく

かのひん 四 土かの人のふとつまそ〳〵さとーつくさみあふ 四 「かの人もいふそろんん 四 「土かのうとさあんろうちざの

いとうつろた人ぐふーめろ公 四 「かのれをうひろうをうさくかのもあけとろふりやとのあなの植ろんで、

ろどろろさぐうぐいとろづふさぐれろ 夕良 土まとあかの恨老があづろのかいまろハ 四 土されてそかの人のさぐあ

めろづしまをものふろうめ 万 九廿 「あろふのとーのとうぐくあひさそ〳〵かのろろひさうとさ〳〵れんやも 土とろく〳〵 六 澤相

中孔指中納言ふろの給かの四老のほさろの銀六十ろうの公内ふまろ〳〵ちんとかーつさあよ

かのにけりさ 和名抄廿四 人参一名神草和名加乃仁介久佐一名久求乃伊

かのろろの つんく 和名抄 十八九 鹿茸 鹿乃和名加乃豆乃 廣雅 角初生也

かのこまだら 。赤の 源氏 ぬもこの人 夫木 十 上ろの冬ふ系 「わーふてかのこまだらふ 枕 いとあ狩 「付ろくぬかーの狩のつとてかのこまだらふ

ふのろれるんだそ白まるのかのこまだらふ俊てふろん 宝月集 「ろろさぐの舞ろく牡のあしろハかのこまだらふ信ぞ

ろろ 重之集 「えーふろろの男へとハそげでま舞ふまだらふろぞえろ

かのこさー 大経上末 六 佛法藏経毘尼律経名為彼岸。 仏のらまを 国 とり

散木 「かのこ ふりつろんのハめもろ川 さりの剋 ろろうのてそかのふなふりろうまだらふりのふのろえてうん 新後 六 くん 土 「かのこふりろうさめろのまふふりのふのろえてうん 新後 六 くん 土 「かのこ

うきてハいろくいとをろく祇ん 夫木 世 成尋法師母 「かのこ 枕 狩ろくこ 源氏 「かのこ

世如浮海舟 「かのこーとれろんふろろんろ且ーくくまろのりれふろ 枕 改集 下

かく 書 宝集 里 かくぐとのえも例ろくれむまうちあきうくそさひろう 夕良 土期良のまふとうて 宝ふろ手ーげろう 宝氏集 五 りで宝もかいふとあれむまぐろうハ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

かくぞとて【たちばな】いづみ殿へまゐらく【帚木】みなとけとおほとのまかでえりとし【円】五ノ六まつりしくやしくひとりかさ
などもちぎりにかきたてずくときくまどろさうらむふかきことにはなくてなくまことのさちとてなからふかきさぶらひ
【風雅】雑下 従權大納言女官「わかのうらの波のうちにはおもふかくかひもなきよりわまかる【国】花くへりとと
やめてうくせなる【浮舟】廿一 おいさなどかくせて付きり

○書りで　かきつくを　かきつつこへ　かきたわや　かきわらば　かきなきと　かきそぐむ
かきふくし　かきうへ　かきとろうろ　かきなると　かきさして　かきそそうへ　かきうくる
かきうつを　かきつづく　かきとるびを　かきそへ　かきわたりと　かきされく　かきおつめ
かきおきうひ　かきけうつ　かきとりぜ　かきけぐし　かきあふさむ　かきさし　かきとみぞう
かきさとさひ　かきのうを　○此類ト各別ニ出ス

かく　蜘ノ巣ニイフ【拾遺】【物名】雑秋「たかれこ八重にまつらんささうらのいとくものすうつくろと【夫】廿七 従二條院 「かけろふの
ゐひのいとのなぞくるる【万】五ノ卅二 まさらへくもののまうさて【拾】七ノ二 さんぐのらのんをくさるどのこすかいころ蛛の巣の
こがんのころてあくさるすらこえざるに雨のかくくるが白きにかつくぬきたるさらうてそりどもうあえんよりこえん
【斉宮女御集】「蛛のいのかくくてもあらねども家のくさにけさおるべし　返し「かくろもわりなくるめうくものいを
なのうさみふろすぞられしき

かく　承と掛く【古今】秋上 義法「こころもうし秋アかねの玉章にかきあへぬのの八澤ぐうり
【新勅】哀三 従未極「みしへのねくされ髮の面げに澤うき寄さよのまきてろ

かく【武烈紀】三ノオ 大君の甘への色垣 掛カヽメ垣ども【宇治拾】十ノ三 あろえりのをこうべさきつきさ【著聞】十ノ十三 うれてらへ
さえたとろんかくまてそりろ【万】十六ノ卅 ふけるさしかくも【夫】卅 復按「山城のあしやふりけつところきぐさへ臣ふし
ともやひろつれ。今モ簀 ナヲカクナドイヘリ

かく 舁【拾】七ノ八 こ琴うかきさらへして【しのぶや】三 こくかしその枚のあふさふ車どもかきおろし
かく 擽 ○髮【拾遺】十七 まさおほうへふかきさろ 従 繪の入る笛どもを
かく 懸 ○是ハ 琴 涙 羽カキノカキ【万】廿五ノ十五「かしこきやあめのみかとかけつれどねのこしみなやあさらかひ也て
前ハ カク カクル カケ【カイ】【カキ】ノ義ヲ見ルベシ　手かくハ【て】の部
カク カケル カキ カシ【新勅】大嘗 従四位上 「きてつるる人なりもこころもておかくるふともおうもそや
あらまし【土佐日記】みふ帆さけなどよろこぶ【新古】尺 法議「南無阿弥陀仏のれまふくる糸のとりくきぶれぬんともがる【拾遺】哀二 ゑ
たりとえせる八月の出つるりろ【ウスグモ】廿四 とうろをくかけて【千載】秋上 春後「山のえふすきそみのまめけ
わかへ八萬年のあるるやかくまじ袖のえしむろらん【ウスグモ】卅 えもいかぬむとあやきこし達あへなえひいとなうさげ
ふさく【狭衣】二ノ十 妻戸あらてうまかけつつあるをれむ【雄男記】十三 柯該志ともみるえ【夕顔】廿 今とうけて何の故う
ふうろめとさらん【夫】卅二 先後「年をへて世にもくけうかいよおぶれかけさげうれて身とおもてくさ【夫】卅三【新六】五
先後「ものひきさうぶ身しぐゆる昔の笛のうえてふ人とかけてつんとん【夫】八 多五百番歌合 野所「不く一とりけ錄ふあひの
の山ほれいりつふうひあつさうとあのそり【円】坂川百首 仲実「あひつ山とそのくえしふとまもしをとおくしふひとずかけ
あとしつり【平家物語】十一 ゑる松の平家ふ火へとうけて【新古】哀三 定文「何とうてもの衣への中へさとれらけつくちうへ
わんとおさぐ【紀書紀】一宮記伊「あるふきくたうしの浅のあぐ沢へうけども袖のね上をこえさん【金葉】哀ハカシウラ
○契八沖ゞ従ふうけあれどと従せうあぶ又ふへかゝつらえドのふるり

かく 闕【神代紀】上廿七 劔及歩鉄【榮ミハテヌユヌ】卅 沸にいちえさこるど番かくぞさうらへ
【万】三ノ十 由てろ月八とちうけしろう

かく 擽【万】六ノ廿九「月へ宇ちてたくさら月のしまねろえけるる死衣の衣ふあへつるかも【円】十一ノ七「出れおさん君と
こんとて定まの乃とろくこの手ぬねうきう上【盛衰】卅三ノ七 舌盗の沢岸八余殺ふれさとろさ有さし
猫友呉かきなぐくとさくめくうり【前太平記】三十 槐飯舁をそらうふ盆盃べうる飯汁れ菜を殊猿の肉など

さまぐふとりいとるまてそ知しるゝ事宇〻ひてりごく拾の人〻かいそ〻あらくの登良あ秋るんとそく〻ひらせく
うちそひて

かく 斯 推古紀十七 訶句志茂餓茂 拾遺上「よの中とかくりひくのそそくれハうみやりのふるらんとそろん
詞花恋入「つむめつるやめり功んひきうれしかくのころろぶろ中の去ふ 風雅恋五衣笠「哀し〻あんのちの哀の
のくるあぞるりかくとそせめてあろせてしるゝ きりつぼ廿四 かくふぶそくてかれしすまうんようハ内裏きせさうむすひて 後拾
秋下良暹「白菊のうろひゆくそ哀のあろくしつるそ人もるれしう あげまき七十五 かくりハ神無月のつごもりかたう
相つぼ七 かくあぐるとそかくもあるんと感覚しけてんとおぼしめすよ 古今賀 仁和帝「かくしつくとふもうくふもあまがが
らへて哀ぶ事ちょふあらてもある イセモ八十三段 かくしつてまうでつうりまうりろると 古今大ナホヒノ歌「あさ／しき年の
始ふかくしすそみとそかうれてたのしきとつめ 月清集上「哀あるる秋のさ遊夜ろりてかくやちろんうちのにしひめ
新古五羇旅「かのかのいくのやのふとーとへてかくりひくのうずハつのれど 玉葉旅 後京極「旅人にるし月とそあさむそそ
かくしも神へねぇくらやあるらん 続紀廿八 吾加久不申成 波奈 拾遺秋 元輔「あうきものをあわれんとハいろぐやんかくそ
へそめ秋の夜の月 万八廿八「あし引の木の下ちうそれとそぎてかくうてそあそぼそてひんろも

。**かくれろり** **かくのごく** **かくて** 別ニ出ス

かく 秤ふかうく 古今恋五 そせい「秋の風のいねてふともかけなくふるなふけしむろ人のかうらん 六帖五下「夜のあのしぶうる稲の
かとそうハのふそうりそしうるのもうけなし 後拾恋二「秋の風の稲てふをとかけしらハ君ひ知ろうんしけも
るし 六帖五下「かけつ丘ハちぐのこぐれも教ありぬると哀のあへハうりるき 日「今まてんとりひしずよりふかくを丘て
人のつくさの教ハあうふき

かぐ 嗅 新撰字鏡 嗅嗅加久 著聞二十 律師異香カウとかぐれ。他人ハコヽとかぐばさく 古今夏よみ人しらず「五月まつ花
橘のかとうげバひろし〜の人の袖のうぞそろ 拾遺人七 ふろさあぶてとかぐ含せのまつろふいと良ちあるる
あわうろ 拾九廿三 斗のあうぐいのかのあやしうかぎしうぬさあるうれどあうぐさてうるが

がく 額 つれく 九十九段 自讃のうち 横川の常行堂の内龍華院とかけるふる額あり 拾玉「此両の跡ふそのくうるみ此
大きの額の銘そそ出ことありき丘し 著聞 ち九 法雅寺のりハ額を一枚うきて良あひ〻うりそれぞ見いまま
うつべき碑茶もあろ丘しそさく 平家五遷都「延喜ろ兵循るの大元額うち輪とりへ〻と思出しそまう秘藉あらうべ

がく 楽 夜半抄 うま季の事まそうる都の面白さあれどふ 日三 まちとろうるう楽の哀ぶそーしそき 徒然二十九 ちゃぐの
あのねどもまふ時みく楽のあといと面白し 日口廿 年の暮くいとちうろろありそ 芸のうる之 廿六ぬざ
その大がく〻ありくど こてふ みうそつうさの人〻しそあのがくせうろ 風雅釈教 菩提「法の声ハ空ふかくうそ答
あれをのあるさふ哀やちうらん

かぐ 下愚 論語陽貨篇 上智与下愚不移
つれぐ 八十五段 此人ハ下愚の性うるうべうろぞ

かくろへ イセモ五十三段「さのかろ寒くのころち寸ひかくろへハ九のそ午くとうしとあうろり あらし 十一かの浦ふあぐかうに
かくろへべき年作りるえ中ものあへ 。隠 カクルヲ 妃 タルヒ

かくろへ 。隠カクレ 夕妃タルヒ 新古二秋「いつるさの山のひむろうるろくてさのつうさへさへせさうらん 帚廿二 あくかくろへ
ハとかくろへうろさ夕ふのそまして 覧之 上十二 六帖一下「白妙ふきるのふれくがふ松原きのさどうりそかくろへまのさ
すぐ丘へうろのかくろへてうろうの兵づつさぞあるべき 夕貝 十二 あまぐちうかくろへ思ひのひしすいとおぼしくて スマ 夕函
代車のあやれうろふ女の世うふくかくろへりあそもいとされふ姜とのそあがぬ 帚 かあぞびあそそろかくろへどとさ
かくろへつさくふふん人の袖いひさうぶるまさふ そしひめ 廿三 うちかくろへつくあぞろめうかるる アゲマキ 二年 へぐえ竹のためじ
げあるふ木の下のかくろへを作ろごろりき 風雅 春中 後京極「霜人のあさふむとのくまつろみかくろへ今ねてきてさとあへく 胶雨
和泉ゝ「今も精兵の手う絶ふかくろへてあうりのふえぬ従えるの姫百合 夫 四 伸実郎見「こころさや兵のこれ丘ふかくろへて風のよえうう老とるろる 夫八 百合 現六 光明峯寺入道摂政右大臣「今へそ兵の明ろうそん 夫四 隆祐朝臣家集 五十二首

桜ゑりとの袋くきおくろくろ 【続後撰】十法成る繪 「人国ふ八世のうきをふかくろくて祭をこくろふ山のその月
【松玉】四「さとくろの女神の袋ふかくろくてきこまそこめそ
人の祝きそるこぶかそくん

かくろく 。カクロニ同ジ ロヲ省ク ホツレノ オツリトイフ例カ 【万】二廿「きろくろ
【松玉】五十二「そそもろ

かくろく 【万】七七 かくろ紀髪ふおくこつけみ。外
【万】三六「ろろふ 姫ふそやかくぞろ

かくろう 。コレホ ヘづくろ女ふ世の中ふろ
八十五 かくむろうく女ふこふ〜笑て

かくし 【應神紀】迦遇破志那多智磨那 【万】十五二
【夫】六俊成「千早振るかもの社の祢ぎそび榊
とめくんな八十氏人ぞきとひやろろ 【夫】廿六春之有衆「祝

がくれみ 樂人 【ホツム】十九 樂人衆人

かくる 隠 【古今】三上 紀淑
「まの秋のきこハあやきく枯の袂ふこそ
なこふめくてハ枯のむとりてかざくんねろろきと 【長能】「あ
【源通親】「こくつこそバ教へちくるりめろくん人のふぞかくはこぶ
かこの夏どあのづろくえあろ 【帰】廿八こるやかくいくへのかくあ
かこはるるんろし 【帰】廿寿れまどへさん とまかくれしのびぞ
寿れてねふもふもろきとろくさ 【口】二八 人の里のきをふふきろんるこして 【口】「「あ奇すへ

かくれ 隠 。要ハ体ノ語ニテ倍ニ行ク
カケトイフニ同ジ

かくれ 【秒】北オヒ ヤドリキ 【ハ】ふおうて
おくぐかくこまふのゆひれ 【狭衣】三仙廿「こそふりふ花ろてそけ
ゆえてミまをおくセゆひうりとえろよ 【ホツム】七ともの
【口】廿上 七五ふそふりくんのえふくうけぢろきふどるる
うで安をめて 【楼上】上四八ごちハ例のごえおくくきふるめり
かくまと 隠 。死スルヲライフツヅク詞。カクルトハふみくイヌヤ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

さやかひぬ〔うつほ〕すはとかましくてかくれぬひめと〔狭衣〕四 母かはりし人は世て病つきて人どもへぞかくれ侍りはし
るぞ〔推がモト〕おぼしきちるへかりなかとかくし死にあふもおぼしきさでかくしさせたまひぬ〔新古〕哀 一条院かくれたまひ
みれども世のはかなさのことひとりさめひて〔拾遺〕雑上 小一条左大臣すかりかくれて侍るに〔平家〕廿 廿三 美濃守
かくしさせたまひて

かくれ　隠　〔新六〕「あさくく秋のくさのちよるくれをしむしてへのやまも独やねつらん〔好忠〕三月中「山かくれ風ふきる
しぬるしあらんはるくしもすてすかめん　うきさんは〔堀太〕秋雪 紀伊「すみさてけは殺へぬしぶこまらかくれのき
しつかる人は侍るといふる〔同〕秋冬「家かくれてかくしや身をむらんあまもかくれ今ぞするくる〔同〕秋雪 公実「こえのいる
秋の月くもれのおもかは身のかいそとふくぬまもかり〔夫〕十八 師光「ささなみすむ松村にかくれのかひもなくまとろ
夜つのすき人ならり〔同〕十二 文安百首 親秀「あつさのく春花かくしふれのこなるもくや兼の声しるらん〔続古今〕
雑上 み花かくしふるのなくとこてうある 小町二〔続千載〕哀二 人丸「おく山の木がくしふりあのあるさいしより
あふわざれだく〔堀河〕下七四「今日をむ大内山の山もりはこかくれてのみ月とそみる〔新古〕三 家家「仲つ波つくの蛙の
うらかくし風をふくやとまるみ人〔スマ〕十二 そへらかくれふなるかれて海とまさるへかへるうさし〔古事談〕六 著
簑笠者一人居柱隠〔新六〕六 為家「友まれ野をくへだかくしのまよひがあししふもめくぞか来ぬる

かくれ　尻　〔神代紀〕上廿九 尻毛〔同〕下十ロ 尻明耀レリ

かくれどころ　〔拾遺抄〕三 かてしとりのおもひつとうけてうくれとそろとるんめらひなぬとそさのつざまり

かくれぬ　隠沼　〔古今〕ハイカイ 忠岑「かくれぬのあさふりおもつねぬなそのねぬまえくやしろうみへとひそ
〔拾遺〕長歌 躬恒 たくさたのまとかくれぬのそこよりねざせ あやめ草〔新古〕五 為家「かくし
ぬの芦のちるれのよこしもふ哀つくふれど知る人もなく〔漫撰〕哀二 為家「かくれぬにおもひわびぬる我身かれ
ゐてのほとゆりやまましく

かくれが　隠家　〔古今〕雑下 よみ人知らず「みよしのの山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせん〔夫〕廿九

信実「夏かりのはふしるれむ谷山のかよひの桂かけれかくもなし〔同〕廿 林賢法師「むせてうる垣根の本のなふくまかれて
かくれがもなし　あしのやの里〔ワカナ下〕十三 女御の君さぶらふ、ましてその御親ならでまし候をまひて侍るに
別れよかくれがの花にしろたへひげおしまつらしあるぞ

かくれづま　〔六帖〕五下二 隠妻〔夫〕廿五〔六帖〕家持内大臣 かくれづまとよみくるりはふくそれふなるひらるゝ〔万葉〕二八 こもりづまと訓り
光俊「いろ人のそのはとぞでならうれども折らし、きにかくれづまかな〔六帖〕五下〔万〕十二廿九「いろふ出てく恋ん今て
おりぬべし心の中のこもりづまはも〔六帖〕カクレヅマ

かくれごころ　〔後カゲノ〕下 おそしまし、「限り生キ行時もはなれ命ちゐまだかくしふへある人なりおぼはなとて
いさくろも言へりぞけむ人とつけてちらせのひし かぞ

かくれあそび　〔栄ツボスミレ〕十九左 はかくれあそびのふどもわらはけうろん地して

かくれみち　〔和名抄〕十四 間道 加久禮美知

かくれみの　隠簑　〔枕〕六ノ二 へだてりつる屏風もおしあけつれぞかいまみの人かくれみのとられたらん地して
〔狭衣〕三中ノ四十七 まかりしみ隠蓑とこんあらんはも人ならしてそなく 〇タゞ隠レシトイフ也
〔同〕二五上廿八 かくれみのく中納言の二の前ぞやるらんときく〔拾遺〕雑哀 忍びたる人のもとにつかはしける 平兼盛「かくれみの
かくれ笠ともえてしがなさいたりと人にしられざるべく〔新古〕五〔夫〕廿三 信実「さるかくき世のうき時のかくれ
簑何か山のおくもやうき　ひきでかの音〔同〕十 延喜御内大臣「かくれみのうれるをとらくもなましいかにや夫をみるるなど
〔新拾遺〕おそれものつぎおりふ 寄るの鬼とを「鬼まろも粉の内ときのくちなぬぎてこよひや人にあひやらん〔続千載〕誹諧 光俊 世と
ましく人にまとへぞまくしき孫むわれこそ今はかくれみのなれ

がくそ　楽所　〔ヲトメ〕四八 がくそあそびて〔若ノウラハ〕廿五 くれかかるわどにかくその人ぐも〔栄音楽〕がくその
おのまるども吹とそろそく楽なれ声えもいまだかどろくしきに

かくつちのかミ

〔古事紀〕上 次生火之夜藝速男神亦名謂火之炫毘古神亦名謂火之迦具土神 因生此子美蕃登見炙而病臥在

かくのあわ

〔和名〕十六 結果 揚氏漢語抄云 結果 形如結緒此間亦有之今按 和名加久乃阿和

かぐら 神樂

〔江次第〕十九 新嘗會條 其菓子ハ加久縄一坏 〔古今〕長歌 [illegible] 〔拾遺〕[illegible]

かくのごとく

〔古今〕序 ことばおほくかくのごとくなるべし

かぐのみ

〔垂仁紀〕九十 命田道間守遣常世国令求非時香菓 〔万〕十八廿七 登吉時支能香久乃菓子乎かしこくもの [illegible]

がくや 樂屋

〔こてふ〕八 かまへはりたるらうとかくやのさうぶよして

かくまくさ

〔和名抄〕廿四 黄連 一名王連 和名加久末久佐

かくごん

恪勤。勤仕スルヲ云 クダイセヌヲ云 〔令義解〕四十九 恪勤匪懈者為一善 注 恪ハ敬也 不倦力曰勤 〔考課令〕凡帳内及資人毎年本主量其行能功過立三等考第 恪勤不懈清廉称主為上 〔職原抄〕下四十七 凡稱侍者親王大臣以下恪勤之名也 〔浅野群載〕六 依年勞 恪勤次第轉任官人等 〔[illegible]〕十四 [illegible] 〔宇治拾〕一廿五 [illegible] 〔同〕 大臣のおろし [illegible] 恪勤の [illegible] 〔盛衰〕四十三 [illegible] 恪勤者 [illegible]

かくがう

是モ恪勤ノ音便ニヤ 〔[illegible]〕 [illegible] 〔うつほ〕 [illegible]

かくて

〔桐つぼ〕八 [illegible] かくても [illegible] 〔古今〕 [illegible] 〔カゲロフ日記〕下八 [illegible] かくてもへぬる世 [illegible]

かくやく

〔新訳華厳経音義〕 赫奕 〔希麟音義〕三 上音格次

かくざる

〔コテフ〕廿三 [illegible] かくざる [illegible]

かくしどころ 隠シ所

〔今物語〕三十三 [illegible] 法師のかくしところ [illegible]

かくしをとこ 隠男

〔宇治拾〕三十 [illegible] かくし男 [illegible]

かくしだい 隠題

〔奥儀抄〕一 隠題哥是古式不載事也但古今并拾遺集ニ物の名と云ハこれなり [illegible] 人是を稱隠題也 〔千載〕 [illegible] 〔宇治拾〕十三 [illegible]

がくしやう 学生

〔ヲトメ〕四十七 [illegible] 学生十人 [illegible] 〔若菜〕 [illegible] 学生ありける

かくびやう

カク病 カクケ 〔和名〕三十七 脚氣 一云脚病 俗云阿之乃介 〔国ユヅリ〕上 [illegible] かくびやう [illegible] 〔ワカナ下〕 例も [illegible] かくびやう [illegible]

がくもん 學問

〔帚〕三 [illegible] がくもん [illegible] 〔同〕廿八 [illegible] 〔栄花〕 [illegible] 〔枕〕 [illegible] 〔千載〕 [illegible] 〔をち葉〕 [illegible] 大江匡衡

かくと 隠

〔延喜式〕十六 陰陽寮 所々村々ニ藏里隠布留平涙 〔古帖〕 〔新古〕雑下 [illegible] 世中の [illegible] 〔若菜〕 [illegible] 〔夕ギリ〕 [illegible] かく [illegible]

〔门〕廿九「とうくいのひきつろひて此ほかハひきうしとわひつれぞ」〔源夢〕「ゐ人のかくしおきたまへる人を」〔门〕九「女ぎみうかくし
まゐらせたまへる」〔夕顔〕「四十三などてか人とあらむもかくいまへりつるぞ」〔源手〕「八かくいまへるべきみふもあらざめるなれ」
〔拾玉〕「天「六十までに人にまうとれめるかくさぬのとやのえの月」

かや 萱
かろきれ 〔和名抄〕廿三 萱 無飢反 与宜同 和名加夜 〔万〕「十二「秋さりハ…かやまくハこやろかれとのかやを」
〔後拾〕巻三 衆資且毋「あつまやのかやが下ふしもすゞろれぬいまや月日のうつりもあらとも」〔门〕「
後京極規「雪がれのかやが下をれとふかくふかひきぞれてなぐきれるぞ」〔六帖〕六上「七るうるかや八秋のうへ名且宮や
人ふむひとつけて女くぬる」〔新六〕二 衣笠内大臣「千秋の穂ハね秋の森のすつくますてまうさふつろ岳のかやあ」

。をなかや ─かやうふ ─かや根 ─かや下おり

かやく 〔大辞〕文保式帖 正殿蚊屋一條 長七尺六寸 弘十幅
〔ヤドリキ〕九三 此ほうぎかやくとぬるとせのしのひて何人ぞとりせまへぞ 〔狭〕二十上 四十 此住る人見つけて
かやぐとあひとうむうふえふげてあひとうめられぬ

かやりのきえ
〔今昔〕「夏 定家三「さみだれハ日ごろへふろりあつまやのかやりのきえの下くつりまで」

かやりひ
〔和名抄〕十二十 蚊火 新撰萬葉集歌云 蚊遣火 加夜利比 今按一云蚊火 〔夫木〕十三「秋の田ふかやりひ
たつるまづのとがをそれとまめるたさかせまち」〔山家集〕上「夏のよの月まるてもやるかるらん」

かやむしろ カヤ 筵
かやりひろうまづのふせや八

〔夫〕廿二 定家家集 寄筵恋「あづまのくまのかりねやかやむしろきめらんきえてしとのかとれ」〔千載〕〔堀太〕人家恋「あさでふともあづまとあのかや筵ことのびてもろぞをころるま」

〔夫〕廿二 為家「夏ふりさかやのくふかくかやむしろそじきさよそのふしのまくらし」〔夫〕十 為実「とさりし
みめりの里のかやむしろかりふもきくの花るうりせぞ」

かやう
〔帚〕三「かやうふあれざうまるにづしるどふおあさちうしすべくもあらぞ」〔门〕四十一「かやうのついであらん

ともいとかさし」〔末ツム〕「かの人くのいひし津のつれかやうふあれぬありなれもし」

かや 茅 〔夫木〕十一 ほ永椎「あるさのとあるやく庭のかや下ふれのれを……去のあゝく」

かやのかきね カヤ 垣根 〔夫〕廿二 〔現〕六「ほ一条入道関白「うらがろくかやの垣根のさりぐを吹風とまほときあするろく」

かやく 茅屋
〔拾玉〕上 六十八「このそちつるれかやくの板庇もしおふうて欲ハ夏もえぬぞ」〔スマ〕廿三「かやあとさ芦ふけるらうめくやるどあいう」「つつひるし」「ろ」〔後京極〕「さえまふ舩ハまろるのかやあ」〔千載〕「八イカイ 戯 賊
満我聞」他本と
のうろふとるる」「板ひさし」まどかやあの時ゐてもかくしかとせぬかくれ

かやま 茅間
〔夫〕卅 清輔「あつまやのあのかや牛まふあへとらく人とものぐハこうぐ見あろうん」〔门〕「ふ我の巳秋上二ゃまさ
「山里ハ牛まぞろの粉のるやまうのりつ秋の夕つくよふれ」

かやふ 茅生
〔夫〕三 為家「あらけのかやふやしつまうちあろうゆびともうろふこそそ宿」
〔门〕夫 衣笠内大臣「騒ぎふと小みちくかやふハまろれてとれものかくさうろ風さ手くる里」

かやぶき 茅葺 〔夫〕八 為実「文月あハまやのかやふきぬんちそあつめぬ宿も萱とぞいふ」
〔松〕十一 かある へまうつうるあふ女とものあくらしとおあ庭の暑るるのぬとまさのうあそれとおわくまてふのと

かやつ
うらひあさうるを女うふきくかうしとうろつわどふ時をるといとまくうろつ人あまぞんうさ「ふとくぶよ
あのれかやつまあんるをこてそれハ内まさうとう人ふまでもそそぞ

かくれ殿のさんまい
〔公事根元〕仏名ざてえて栢梨の勧杯とりふとあり大道寺の西の摂津国栢梨の庄と
いふところの酒とまうりて庭上ふて勧盃のあろ 〔江次第〕十二十八 今夜盃 栢梨小
大盤坐下以栢數居之 注栢梨摂津庄名也以彼地利所造之甘糟也

かやさく
。〔加〕八派 文ルニテ 易ク 又 サク シキ 貴人ニ ムカヘテ 手ガルナルコイフ 〔落窪〕上之二十七「さく なやまいとものあるれ
ぬうんとだのりくろんいうであるるかやさくてとくものまいぞ内ことうれたくとまくものもさもめる
むとのゆうり〔玉ぐさ〕十九「此ほちうふるれさびくまうでなう例まうひふなれどかやさくかあへとうなれどかちうよう

あかきをえがきて【三宝絵】其九いとかやまくはそしくひらくはむくなどのつくりまつりてさへ雑役をもかれらにさせよ

【万】十七四十五 てりわたるもどちもかやさせ【スヾムシ】十六のべにさそのびてかやまうりしあるさへあくるあさあひて

【ワカナ上】廿二 かやさせ月をうべなびていとあそびかしくそこの夕へ【玉ノひめ】卅三 かやをさへどうそさきのあはれしきいへいと

うつくしさぬべき世にはべる【かげろふ】四 夕へつつ月くかやをさへ人へとくいさうさね 時方とひ給へと申しあへり【やどりぎ】三 不堪なる月の

かどとさろくをいでてかやさくかうひのすべきあらねが

かま 【和名抄】十二之十 竈 和名加萬 炊爨處也

かま 鎌 【和名抄】十五之八 一名鍥 和名加末 ○字鏡 鎌 加万【神祇式】六月晦大祓 焼鎌乃敏鎌以弖打掃事之如久

かま 蒲 【末木】廿六之十五「今年さへよそにもうきかなりさうろ次辺の水に袖ぬらしつく

かま 釜 【東科日記】廿三のうそふをあうめふを出しまでかまへしもひきぬうれあそいくさべからずとあひてえ給ぞまかりあり

くそり【宇治拾遺】二ノ廿一 五人なへのうすとみなくさめてさて【荒崎合未】十六ノ卅三「ふぢの花とうそれへ行かよ

まうり

ふてこふかまるし

がま 【和名抄】廿ノ十三 蒲 和名加末 蒲草名似藺可以為席也

かまへ ○後世物ノ企ヲ結構トイヘルモ【俊頼ふ】十 いづくへうへまるかとさかしがる人しもとよ人の思ひけるほどさ

此構ニ同シ 年へあつかまへよとのあひて【口】十二 身あくうのぞきとるほどてそれうあらぬうと

ら人生くせんとするんをへのうくう人ふまつうまどかまへのぐまべきとのあなぞ

かまへ 【拾遺】恋ニ スケミ「えしあるのをさとおそんとかまへうかしあむがまる乱とうべく【玉かづら】十九 例あうあひまふれぞ

○本語 カマフナレド多クカマヘテ ナドイヘレバコヽニ出ス【サカキ】廿七 ひつのぞまざるべくあるかまへ出しよろさたりのり

るりとおがしめでるよべし【玉かづら】廿 まうとおがしまへいとあしそれどそれかべくもかまへず

かやもくかまへうそれどかちようりあめそえがうくて【宇治拾】八ノ十一 いとかしそれどもうえしさ飛あうぞてうへ

たまうるべきあをもかあへめ【荒むらさき】廿五 ひとよりがさこうすをあつるあいうまかまへてさぐんまとくむく人とうりて

【玉かづら】九 とりくかまへてあはれあげまきらんとふへ【栄花物語】三 かの法會の日へえまかりあぐれぬかしこきうかなへて けふまぬ

うるあり【夏のうちは】十六 かまへてひかえあうあうちとえはへまししそのてかくしまへ【宇治拾】三ノ廿三 人々かぐおぼとうまへてうさらべし出でえ

たり【口】廿二 ○尾服下ヌ 地藏ノ秘 あらんとあどまうず月のあられぞえあつまりくとかへぞかまへてあうあへとりへぞ宮をえんねぞ

いうぞあらんとりふあまとあり【とはずかたり】七ノ卅四 そのうち夕あまうそどのかまへてやまちれぞ

附 **かまへん** ○倍シ必ズ キツトノ心ニ思フハ【夏のうちは】【宇治拾】ノうり轉ぜん

【アゲマキ】廿六 ふしてへらくあづまあどふあのうがちへあひうまへ【浮舟】四十六 やうそその日つくらえとおかおふ

かまど 竈 【新古今恋】「あらかまうへんとしのわしめとて氏のうまどもうくうえそへ【万】五ノ卅 かまどまへろうりう

ふぞさてぞ【拾】六ノ四 古弘が歌 かまどあ里やくべうう【夫】七 仲哀「かまどのうそうそのかまどいえうようなひ

いての小因の早苗とうえよ【玉かづら】廿六 家かまどをもたて男女のくらの出くさ子どもとをひきさうれて【新古撰】夏比

やまのかうそえれかなうう氏のかまどへあふざえひあうり【夫】卅 寛喜元年 西園寺入道太政大臣 出迎 家集「くをあとうく氏の

竈もいそぐめり年のうへまく峯の山里

かまち 頬骨 【今昔物語】十三 ふるき法師のりひすうるとてかまちとえりてうり西り方めくかくりてうり

がまん 我慢 【大便品】二十九 比丘比丘尼有懐増上慢優婆塞我慢優婆夷不信如是四衆等其數有五千

【慈恩傳】九 示大衆徴妙絶其毀謗之心顯師盛德之高摧其我慢之意

がまのさう ○降魔ノ相 不動尊ノヤウナル顔ヲスルヲ云【東や】四十五 人ぞくもかくこれうのさうるまと思うのへてがまの

さうと知しそつとみえまうつれぞのとむくつそくげちくしきさ女とおがしそ

がましし 【ワカナ上】八ノ十八 たえうれあぞをかまうえへぞそがましらうのあさうしがり凄えくをそのあひそと

かまゐく 【和名抄】十八ノ十 麠盤羊 和名加萬之々 大族羊而大角者也

かまつかのはな 【枕草子】三 わさとうくそ人めうをべきふもあしぬさあるれどかまつかの花らうしうりそをそうくげ

るつかのうつ花とりげふ書きうり【輪ありふ緑】ツユクサ ツキクサ 又さらえとかきあり

け

かまのほるへ 〔夫木〕廿三 「とこふともあらしまんわかとかれかまのほるへのえさしこりつゝ」

かまつかくさ 〔六〕〔堀川〕後拾「むまびきるかまのほるへのえのせしろね」旋覆花ヲとりつ今ラクルマノ花とりあはせを

かけ ○契丹ニコナタカナタニ荷ヲ置テ扨ニテ荷フヲ一荷トイフベシ 〔あさ〕四十三 ふさびつあちさかけさをつるりた ○一荷ヲ一カケ二荷ヲフタカケトイフ 〔李凡〕廿二 さねひつるとかけつくめつと

かげ 駒毛 〔和名抄〕十一 駒馬ハ栗毛馬也 〔夫〕十五 ちゞき入 ちふぎ「風ふきわたる木の葉のこずゑハさらくとも秋のかげにハいくぞまもらん

かげ 影 日月灯ナドノ光ヲイフ 〔義楚〕六帖 三要集云弟子参師有六法云々行不得踏師影也 〔夕ギリ〕かげもなう夕日のさしかげに何かならむとしきたるをまなびかげなくごとなく舞とさしかくしたるを 〔うつせミ〕火あかうさしたるに風ととひろげて 〔夫〕十六 定家「つくるつのたつくのこほひとげわすれやくもくさのかげろふ 〔好忠〕六月終「いはきせてかげみるわかきのこの 〔新千〕秋上 兼好「一むらの雲のあとより出すなりけりちぎりの秋のよの月 わたの原のかさとまのかねしてはるのそまのかげともぐさん

かげ 影。鏡水ナドニウツル影 〔続後撰〕旅 あり〔荒たし〕の中のあさりかねハわがかげとのみやひびらん かげうつるらん 〔古今〕秋五 紀貫之「うつみてもるすてもいむらさざるさ揚子によめるかげるとして 〔秘書〕三 法のかげにまかへるらん行てきし 〔後撰〕離別「身とわくるとのかけさまず子にを濃き汁斗とぞ思ふそへつる

かげ 影。形影ノ影ニテ俗語ノオモカゲナドイフガ如シ うつとまく 〔とりかへばや〕三ノ廿九 〔さごろも〕廿五 母は身ぬればかげぶたつのもえぬ母いとろう他多つらと内わのさげのかけへ 〔若菜上〕四 人げすくさら手うの物をせうしをかけかくしをかぶりをるか 〔さむつひ〕六 かげもつきてうちかくれのよぞ 〔夕ギリ〕千代 〔竹川〕又かろうすかにのやとかげふそひてそうかひめりそろさのかげやつきてのうつかひぬ 〔後拾〕秋上 ゆきかふまでまさらなりる あわ兼蔵 「さだかに見る夕暮の人もるさにおふ見らむ彩そろへ秋の欲の月

かげのとく 〔著〕ニ廿三 若菜の四ふさく大臣ともさてかげのとくにおとろへてもましともえぞ 〔人数〕〔男数〕かげのとく紀二出ス 〔伊セ物〕九段

かげ 陰 おのかげのまをふ 木陰 〔夫〕廿九 鮭宜 え扱のかげにうつりて「まつはつかに今もいらはる千代の松木まさるかげともあらまし 〔帚木〕中川のわたりあるいへにはあさかりしをさけをかけたる沢の木ぞつのかげに 〔古今〕秋下 遍照「わび人のわきて立よる木のもとハたのむかげなくもみぢちりけり 〔門〕千「つくばねのこのもかのもにかげはあれど君がみかげにますかげはなし かけはあれどきみがかげとうけふまうとのけはいなし 陰の小草 陰の宿木 次ニ出ス 〔花の宴〕十三 此ほまにふするかげぞかくるとのみさあとてつまどのみをと ひきつつのみぞ

かげ 蔭 〔古今〕千「つくばねのこのもかのもにかげはあれど君がみかげにますかげはなし 〔夫〕廿五 光俊「世とてうるさとは ちりの陰の庭さへりしげさとかげなり今もあらし 〔さごろも〕かしこくとまごろげとぞたのみ宮人あふさるに 〔栄花〕世さてありしかもきずまをみかげるかかたにつうり おとしめなごとのあるみ人にもかくつかず身ハかくうく 〔栄花〕 すうりくろ男女ハ母紀の君の衆生紀陰のさかふあらをれさせのつりとぞせあしもひさる 〔とかへ〕四十九 さうべきさそう げどもまかるわてほ 〔狭衣〕四ノ十二 娘君ハ手つのてきびひとうの陰かげうきて見そ風の音をもふせ民の陰ひしき 〔あさ〕七ノ廿 こちさ陰かげくさりのありうのしてるき 〔栄花月の宴〕十六 大北のすの世とりとしを抱みあふぎいつもみ今ハ官の一ぶのそうげふ かれのへえぞうりをてさせまそどりさくうくなさしかるしとまよのつぼみあり

かけ 〔しはの〕 〔しがへ〕 夕ベニ 〔かけ〕よりつ 皆〔かけて〕ノ傍ニ附ス
〔かけじ〕 〔しまろ〕 〔カケシ〕 〔ナカレソ〕 〔カケヒモ〕 同

かげ 影 〔かげふする〕 〔かげとみる〕 〔かげみる〕 〔かげのぼう〕 〔かげのさとみる〕 〔かげの〈池〉〕 各仮字ノ順ニ別ニ出ス

かけ ○かけハ鶏の事なりおもふこと 〔神楽歌〕新羅「なかでいとねのを鳴てたろかるけのとれとのまでわかつ 〔古事記〕上巻 みなとりある迦祁婆那久 〔夫〕十九 旅昭「秋とふりて思へるくかけハあるくれてもさめてもぬるやさとべるさ 〔堀太〕晩 蓑俊「あけねさ鴨のそねかきうちあいうそかけの見え尾たる 〔六帖〕「ふなろとりかけのしろ尾のぬろくし欲とひとりかもねん 〔万〕七ノ四十二 「みなろ名

かけの垂とのこゝろ　そのうごくさまもおのれおのれ

つきぬも　[和]十四ノ廿三「やどるふなくるかけのうごくいろくいなづまの

[和]十四ノ廿四「おもわけをろこそあるそくさのうちのいきとしいけるものゝ

[和]十四ノ廿五「みそをへかけろとうをれ　[和]十四ノ廿六「江家次第ニ

和名抄云布　**かげろふ**　[和]十四ノ廿七「蜻蛉一名胡　和名抄云久

是八飛ありトアレバ　蜻蛉ヲイフナルベシ　タゞれかげろふのおそろあげふとひちりぐと

[和]十四ノ廿八「ありとうそをるみんとうをどこれだみやくまちごとさえ〜うげろふ

[和]十四ノ廿九「かけろふのこゝろはかなきものゝたとへ　[和]十四ノ卅「今昔物語

[和]十四ノ卅一「いつとうとうひくうをこてかけろふのうたへかどのふとすぐさとうん

かげろふ。是八蜻蛉ヲ起ス事ハ上ニ出ス　[万]十七「今ころにたるうらやも情火のもえつゝ

ろふのあるうをれつゝ。陽炎。遊絲　[新古]春上

あるぬうきそうれつゝ。陽炎。遊絲

是八用ノ語ニテ日ノクモリテ霞ニナリタルヲ云ニハアラズ　月ニフ

かげろふ。是ハ　[万]十七「今ころにたるうらやも情火のもえつゝろふのあるうをれつゝ。陽炎。遊絲

[和]十四ノ廿九「かけろふのこゝろはかなきものゝたとへ　[和]十四ノ卅「今昔物語

[和]十四ノ卅一「いつとうとうひくうをこてかけろふのうたへかどのふとすぐさとうん

[和]十四ノ卅二「かけろふのこゝろはかなきものゝたとへ　[和]十四ノ卅三「江家次第ニ

[和]十四ノ卅四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ卅五「かけろふの不のめさうれハタメれの梦うとのうきねのとこのあさとこそなれ

胡蝶。虻蜂。蜉蝣。　[和]十四ノ卅六「かけろふの不のめさうれハタメれの梦うとのうきねのとこのあさとこそなれ

かげろふ。是ハ　[万]十七「今ころにたるうらやも情火のもえつゝろふのあるうをれつゝ。陽炎。遊絲

[和]十四ノ廿九「かけろふのこゝろはかなきものゝたとへ　[和]十四ノ卅「今昔物語

[和]十四ノ卅一「いつとうとうひくうをこてかけろふのうたへかどのふとすぐさとうん

[和]十四ノ卅二「かけろふのこゝろはかなきものゝたとへ　[和]十四ノ卅三「江家次第ニ

[和]十四ノ卅四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ卅五「かけろふの不のめさうれハタメれの梦うとのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ卅六「かけろふの不のめさうれハタメれの梦うとのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ卅七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ卅八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ卅九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ四十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ四十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ四十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ四十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ四十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ四十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ四十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ四十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ四十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ四十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ五十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ五十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ五十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ五十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ五十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ五十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ五十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ五十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ五十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ五十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ六十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ六十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ六十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ六十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ六十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ六十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ六十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ六十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ六十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ六十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ七十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ七十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ七十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ七十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ七十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ七十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ七十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ七十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ七十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ七十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ八十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ八十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ八十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ八十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ八十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ八十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ八十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ八十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ八十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ八十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ九十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ九十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ九十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ九十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ九十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ九十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ九十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ九十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ九十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ九十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百二十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百二十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百二十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百二十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百二十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百二十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百二十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百二十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百二十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百二十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百三十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百三十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百三十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百三十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百三十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百三十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百三十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百三十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百三十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百三十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百四十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百四十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百四十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百四十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百四十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百四十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百四十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百四十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百四十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百四十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百五十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百五十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百五十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百五十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百五十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百五十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百五十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百五十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百五十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百五十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百六十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百六十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百六十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百六十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百六十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百六十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百六十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百六十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百六十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百六十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百七十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百七十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百七十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百七十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百七十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百七十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百七十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百七十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百七十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百七十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百八十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百八十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百八十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百八十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百八十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百八十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百八十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百八十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百八十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百八十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百九十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百九十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百九十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百九十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百九十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百九十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百九十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百九十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百九十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ百九十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百二十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百二十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百二十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百二十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百二十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百二十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百二十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百二十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百二十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百二十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百三十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百三十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百三十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百三十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百三十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百三十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百三十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百三十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百三十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百三十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百四十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百四十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百四十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百四十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百四十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百四十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百四十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百四十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百四十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百四十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百五十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百五十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百五十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百五十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百五十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百五十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百五十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百五十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百五十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百五十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百六十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百六十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百六十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百六十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百六十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百六十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百六十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百六十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百六十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百六十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百七十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百七十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百七十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百七十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百七十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百七十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百七十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百七十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百七十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百七十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百八十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百八十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百八十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百八十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百八十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百八十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百八十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百八十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百八十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百八十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百九十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百九十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百九十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百九十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百九十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百九十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百九十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百九十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百九十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ二百九十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百二十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百二十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百二十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百二十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百二十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百二十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百二十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百二十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百二十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百二十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百三十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百三十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百三十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百三十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百三十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百三十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百三十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百三十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百三十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百三十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百四十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百四十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百四十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百四十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百四十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百四十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百四十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百四十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百四十八「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百四十九「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百五十「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百五十一「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百五十二「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百五十三「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百五十四「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百五十五「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百五十六「かけろふのあるかなきかのうきくさのうきねのとこのあさとこそなれ

[和]十四ノ三百五十七「かけろふのあるかなきかのうきくさのう

かげそぐい アゲマキ 七五 大系ノヴェいそぐのつぎやいろふ…

ねろと云く

かげとぐさる 松風 七 年ぢぎみおる…

かげとぐ山 七九 七二 「…

かげぢ。 名ア山路ノイフ 夫 廿六 音 …

楼文ようさとだみいまそぬとも 七一 ひめ 廿八 「…

のそれをも人にそうくれをこの井ハこれかけぢとかうふまつ風 四 「…

名 十五 磯道夜来カ知山路閣道也 七 ひめ 廿二 あさぢ…

ゐると 夫 十五 源孝愛 「谷川ハ氷…

かけぢふりかそちてくふハゐりとよりまりめつくる 新六 五 …

かける。 走ル 夫 廿三 万 屋ノ棟ヨリ水ノ流ルモイフ かける雪のふハぎぐそひの末ハさそ…

そんかうハのみとゐりふーおと あひ 八 今ひさゐんとー…

いとかけとうねゐーげよゐつと 多〈カマ〉 かけりめりさていと…

ゐそついやうしありさゐハ さとうひ 「ゐりさぢれひさ…

秋のーの月その弱よ泰こみる雪井のかけ足河のまもぢん

かけく アゲマキ 七八 さをうけかへこかこさそうひ

かけぐね 帚 廿九 かけぐれとふさふひさのけの夕足ぢのあ…

えーのうふかけがみーうふ元のさとにめさうとえあさをゐりそれぢ 夫 廿一 新六 三 信実 「世とをむく…

かけくし 。心ヲカクルライフ 心ニカクシキナリ。大方男女ノコトニイフ 四 「ゐえぢり」とえぢもめうぢあるうけく…

ある雪ふかけくーくて女六人ゐうんの人をうてひとうゐれ…

人の巻ーくうつのでふもさにこんいあがーしうくーきふて 挑ガ本 廿五 いとすあ雪ふそりひつげ多へもひがれこがう…

のつゐとへあがーもかけぢそく大系ノいろふとうハかけくーげのつ…

ゐつもかうふうゐ 四 廿八 かりそあの世のうひうくかり…

どもものおびゐぢんハかけくーきふうるんどゐがくてもう…

狂とてもかくてもえぢーうかけくーきあうきえてんをゐ廿七 …

ゐひぬおとぐ夕ひてかけくーきふハめうれど狂うすのふ…

うるがにとーうえへの人で ワカナ下 十三 人ふハふもゐおとうびえてくかけ…

ワうゐのひつく射のふもも五射面めうて 四 四 本三 うぐがれうゐ…

ゐくてをうんとうひーうど 七 さハがーくおいもめう公…

ゐそのみどのゐそうう アゲマキ 廿 かけくーえあいりづくふ…

むさえれうけくーきえひうる。 添え様とのふゐよ カゾくシ…

かけろ 次ノ かけて ブ本出ス

かけづろ。 走ル 兼盛 二代后のみうをかけづりかんとえうん…

かけづろさ 。兼官ノ 夕ツノ村ぢり 九 右大弁かけづろさ辺のおれ砂ア省文章そ…

かけづろ主 夫 廿七 新六 三 信実 「かさまるさふあくえ形殊のたーうふをかけつうるさがよのみぢ

かけなは カケ縄。年色之及ス男女家和名加介奈波 駑縄也

新古 さろさ和家 時〳〵あれバ田のかけ縄引ほす 支 引放ス

かげろく 。カゲモカタチモナクケウロウト 図 ほす 枝下 支 引放ス

あるかなきかの秋の花をよめるなるべし

かげの 陰野 新拾 秋一 末木 土 秋歌 伊勢 秋うら花山の清水のかげの

かげのとち 陰ノ栃木 あさ 九 ほす 新勅 まゝやいふ〳〵 秋

かげのすう 。鬼モアラヌヤウナモノ アゲマキ 谷 大和の葛 かげのすゝきあだ

かくれ家にかげのすゝきのほに出るを見て

かげのごと 影ノ如 サカ 谷 三 此世ヲ夢ノゴトシトイフ義ナリ

かげのごとく 影ノ如 堀川 夢 冬 春 作者 うつせみよあはれ

かげのこさゝ 陰ノ小草 イセ集 四五 新勅 ほ 木のかげのこさゝ

かげのこゝち 影ノ心地 萬ノ葉 廿二 六 ヲ 今ハ修えさへ

かげとのむ 頼 三 イセ 仮勢 家中のかけそとうのひえ

かくの年ろハ〳〵唯の四條と云ひ教えよとるくさ比蔭ある花の

きさゞげ ひげ ふさ とかげハるゝ〳〵

かげねぶ 夫 廿三 新六五 左注 表 作実 わゝ〳〵ものゝえやいふとかけ

。春おきたる人の営のかけ筆とぢよかるゝとうく

かげくさ 影草 。物の影のようなる草をいう 万 七四 新古 春のあけぼのうつろふ

ある家 えふくさのかけさゝをおくふことのあけさへ家世くり

かけまくもかしこし 。恐多シトイフ義ナリ カケンモカシコキ ノヤシキ 神ニカケンモ 続紀 廿三九 此家自 文 母藤原乃卿等 平 波揖取畏聖天皇御世重 旦 文

口 名 宮ノ 「かけまくもいとゝしこゝろのこもりてをるかなの

うけきくもしこゝろよとそうの山風 口 帖 夫 廿七 ヲ 里 「秋

かけまくもかしこけるを 万 廿三 桂文 ノ 敷 ヲ 姿 作者 「かけまくもかしこけるを

かげぶち 山ノ名出ス

かけご 松 遊 表 ろ 人 ご 「君とのゝそちひけごのみてげわけ

りてゆけでみてげわづ身をおれぬかけごろりくり

かけこめ 蔭糸 二 ふまのちうぢさろうまんいとびしきそのかけごの下よの入れて 彩 雑 三 夢のそのかけごの下よの入れて佐うくろ 「秋

かけて 。賭テ ガケ 松 遊 雑下 夫 春 注 作 「秋

。兼ル心ヲ マヅモ ツニシテ 時令 人事 六 今モ イヘリ

どもいけごまろいうつく 古今 表 一 ほ 「風

かけてのひ一ろくもあくろ木のそうしくえおそのあり

かけて 拾遺 表 「宮中女房 ろ 人 「まうけてきさんとも そあ

てまくろそ氏教春とびさてもべでごうろ 左拾 五 「りうとても

ありくろ 松遊 表盛 「風体 表盛 「ふ出てくえあや来つつ時を味へ 「秋遊 秋 二百六十その中 好忠

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

「許りなひのきおろし山をとゝふきおれど下葉もかけてまづさきよ けり 新古 十三下 延喜御製「かくてこそ見まくほしけれ万代をかけて
匂へる藤浪の花 古今「和田の原八十島かけてこぎ出ぬと人にはつげよあまの
つりぶね 国ゆづり 中ノ三 北のかたぐらに女房ぞひきて面の二代さいかけてさぶらふ大殿どのにはすへひんがし二の二あらう
かけて侍れ 古今 知らぬ人とてもすてゝあらめとかけて 時のうつろふ人のなのかは 「花の香をとめくやとてかけやけばかぞをきまちぬべらなる 万 六
如眉雲居尓所見阿波乃山懸而榜舟泊不知毛 古今 序 さゞれ石のたとへつくばの山にかけて君をねがひ
17 あつは松山の浪をかけ世中のきつとも

かけろ
ラトメ 廿七 桃花の枝にのつのかきて左京の大夫のけろ。娘 イセモ 六十九段 いつきの宮のかみ
かけろつかりの伏ありと笑て 律歌 卅五 しるべの内記ハ式部の御衛をるんかけろうろ

かけて
○ムニカケル ロノハニカル ト同ク 楼ノ上 上ノ六十二 いまし人とかけてのびれがくて のまいく……くらん
ムニカケテモヒ ロノハニカケニイフコト 古今 十五四 六帖 五下「よひくまぬぎてわがぬつかうれかけて君をぬ時のまもなし
みとくえ 三 新古「宮人のまよう衣もゆへぐこと見かけて人とうれしよう……らん
ゐのひそのひかぐくえたこと 万なふ 一ノ八 なかなかの妹とかけてみのびつ 於送 十三四「いそのかみふるの社のゆふだすき見かけてのみや
まんとおもひし 舒複 上ノ廿三 続古「たえてあとふかるる人のためにかけてのまつそきまどひのかなめ 綿植 廿六「かけてのよ
えつくぞーのぶ繁まいくしれぞゆし後の花そも 蓬 卅六 中納言のきとりしハ年比思ひ覚し ゝらど此に是のひのみとに中く
さこそるる繁ふてもかけるえど 律歌 廿九 さきらのこそえれどもうけのまえに ねざめ 十四 さうらこそかしくおど花を先てるとても
先とうけ侍へのり 栄花不錦字 八位めのそちかけまうぬれるくこひろききう 万なふ 三ノ廿二「捨ひれのかけまくかしさ
妹が名をけじのふつかけぞいそであるん 保桜 十三ノ一 此「秋の田のいねてふこともかけなくにおもひ出るやうにげもなき 帰 四十三
よし 今へまをこるなうけそとて 古今 十五 よみ人しらず「それをだにおもふこととてわがやどをみきとないひそ人のきかくに 六帖 五ノ下 武
たまとえかけれバろしかけくじもえあるわづらいもし人のいや 楼ノ上 卅四 そふそれえつけても我をそせあり人をと思ふ
いとろゝろうなんいうぞ有の世の中のうゝとかけゞとのまぞ 古今 十一 よみ人しらず「まきもくかむの社のゆふだすき見かけてとひと

ひも君とかけぬ日ハなし 17 十五 ぞせの「秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人のかるらん 万なふ 八ノ五十二「わがあまの
ゆきつかかへでうるぞまいもとかけつくひぬ日ハなし

かけんも
附 みかゝう 廿一 君の花をばへるさえ世とやなまあへなくりやいえんとてかけんもゆくしくてりひ出ぬを

かろる
附 大和物 二 内へまんまゐるとのひ「おさてぶれ内とかつへいとしくかげとぞせじとなかならり
みこせうつ名れぞ

かけて
○転メ イサ・カモト訓スレバ穏ニ聞ユ 夕霧 十七 おとゞきあてかけてならひよくぬさるなよ
倍ノ氣ニカカル 目ニカカルナド イサ カナルコトニイヘルト同ク 狭衣 三ノ上ノ廿一 尾張将ぞかかびしかりしんれてとも 姫君の御まえて
ありまいうの縁もんと思ひやりしどかけてかまふるのとへわのめうしはうしざりし
そくつことりん

かけても
○同ジ 右二 若紫 三十一 のてかけても文おひろなれバうら人なるりゆひろかんおと 末つむ 廿三 かけても人のあつうよ
ちゝうまうまへのものそわつのまぐらうゝ 蓬 四十六 かくろ花はおかえそゝうんとかけてもおがしうら
ざりしうぞ えしひめ 卅八 年比かけても文及びぞざりうるとのうへぞ やどり木 五十九 あつまうきさんのかけても侍ゝだてそめくさ
ましからぬ 17 七十一 着の縁けえひまかけてもふれらうん人ハまつぬ国をまち給ねなるまありときふのあると 律歌 五十 さきそぐふ
いうくらかあうふ見かけでもつ文だぬんだへよとぞくとなんのまへりおくしとふえてあがしえてめぐめり かけろふ 三 かけてもおかく
ゑべてまくどかどうとくしきゝのあがくらんおとひへ笑さつゝ人の情がまを 大和物 六 いゝまとかけてすいきゞ女もはしと
思つべし

かけめ
○妻ノ「カ 徒然 下ノ五十九 なぞんごちのかけめふてかえかんらるハ 17 ノ三十 なふがしのおれのかけめふてよくも見人ぞ
ふへんをつくしむれとこがしのまえんや 17 三十ノ其六 さまうのるまさえんごちのかけめあそやくるしとて

かけめぐらう
栄花燈ノ 十五 かうおやのこめんのかべしうまゐるどかきてかけめぐらうきそやうり
三河の守まみがしなつけて筑紫へ出しさて待り

かけまち
和泉式部集 二「まち人まるへもあらまんとうづぬさんらうしのくふの君のけうる 古今 雑下 よみ人しらず「世ふかれぞ
うきうそそまうされきうしのく家のかけ道ふまるうしてん 椎が本 廿三「君多てくよのかけまちてへしようなの

まどもの[何]とろへろ 大本一作光景曲 口 世 みる糸根ノ如ヨリ 夫 土 建 なほ狂疑 「ふりまくろ谷のかけろこけうえて
かくふ男衆のあとあれふろ

かけひ カケ樋 ほ 雅三 「末の雫将」 ふ 夫 世 永久百首 雲雀 「あふ
坂のかけひのみふみづくいまるあのふつらくみそ
かとづ五反ふそをとーうねつ 夫 世三 久安百首 清慎 「まつ井のかけ極のあふ
上世三 「かけひみも云づらやひとづんふそくもさぬるろる 埜 四 「ふるの音ろう物つねまるみやかけひ水ぞ行秋りんん

かけやらず[何] 夫 廿八 「家下ろ[何]て 雨り 「かりのこをろ此ま務ふかくろへてかけめち教ふるく 悟朴

かふ 跏趺 大経上之本 受施門数佛樹下跏趺而坐 注 方廣大荘厳経 於浄仲上結跏
趺坐發大悦言 く

かけもの カケ物 桝 四九 かけおどもるどいとになくていどみめくり
ろうあろそひのふ接をかけ拘よてこぶんよ救ひとろかちまそんろよえとーそてんとふえと
かけーふのふ人

かけぢよひ 夫 世三 仲応安集 「家をあのそねふとかろ車ふ手とと

かふ 更 万 四五 衣手易而 ワろてとふのめることん 秋代紀 五三 試歌易幸遂相易之 ふなあ 表三 像表 「をへ
へぶそん中の衣とそなり 夕良 夫 さるどかへ表をもかのふをそぶ 壬生二承 上 「ふふろうへまのへそふるふふかろもも
衣のふどろ うつやこ 土 うつやこの多をかてろ本のりとお役人がろの
回とふへてワろをのろ きろうが 世六 心まのふりてまどがこいとかへまう
てそそけまろあふふーふさもあろれ 松 五 イナカヘジノ 句 そ
ろりそれよかへさをも 疏古 ふれつ 「このまでふれ 秩のふのふ

かけぢ 。おこ衣をふろくぬふと

かふ 飼 白文 五 蠶餓無人牧 郷 「孝徳紀」 かふこうけあが柯賊ろふ駒
秋 「まを豹」 まれふふ我ふのりかふさいろりかんふくく 欽分 十一表のことともふまかりせのふろろ
松 ハ十斗つろがせてまふとかまそろこそろく スマ 四六 ほるどもちろうろ
知そかふろどめづじうんのふ 初古隋 豹とめそのさふかんん 夫 廿七 格傍云 豹
ふかふ斗をひさもかへさど 夫 廿五 アケマキノ 家集仲応 豹かふまの中ふ
家ふをふをいもろいそくそのろふふ接ろろそんろづふりぞちろ 口 廿四 建安三年添併遠 「まふまかりかふ斗
ろりふろりふーのくほふ豹やとあまー 万 十九 三 ふろそのまーろ
よーも 夫 廿七 「うふあろくさふもの教ふひまふまそろくふ飛くふ
ねーをろりて 万 十九 「かとくぎとかりふれせろいてーてきむろふいふまろきふんと。 欽分 「の」 ノ約

かふ 買 僧正遍昭 ふのやをぎの手ふ内かひまふん 夫 廿 「かひ園ふ
ての郷手代をうへ 口 家集 後拾 「ろのそうろ生の法水をしてろふかひのろ妙てそそん
秋送 物ふをえ 代家ふ妻ろふ人ろてもそてーうふあるーろぐふろもなえんとぞ思ふ

かぐろ 和名抄 三廿三 禾仏加不路 頭瘡也野王案無髪也 「安康紀」 一岐 疑 四本今首物語 一次の髪をくふそふろ
衣服の体人を遣ろ 「古拾」 五九 その姿をあてあやーふの髪かろうろ 夫 廿五 後撰 「いとろーや

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

かぶと
かぶり
かぶり
かぶろ

知名抄 十三 曽和名加布度首鎧也

冠 夫 五九 桂僧正名抄 「これもつくりの下のうせぎをかうかうかぶりけるなり

万 廿九 麻 被ひさ可布利 夫木 廿七 鳥ほの世みさの利生公かうことなあるあさけーの月の様ぞや

和名抄 十七 蔓菁根 和名加布良

かぶら

和名抄 十三 鳴笛前漢書音義云鳴鏑如今之鳴笛前世日本紀私記云八目鏑夜豆女加布良

万 九九 木国のひしき雄の響矢りて虜ころうろく坂のこ

かぶらや

字治拾 十五 山のうへの人のうしきかぶら矢を射おこせつれを

物そ且城をさーてありてもくとぞ人の妻ふいこうろく

かぶと

万 十三 「さうちれのたくのかぶこの眉こりこりのひひもをこるみつるもろーこさりのとろくぞや

古 「たうちれのたくのかぶこの眉こりこりのひひもをこるみつるもろーこさりのとろくぞや

がんご

安万集 「まめこりの妻のかくこのいとうるみくとりひろれを紀かろくかう人のえるのかりかう

盛衰 十九 紀介夜ぐ借ーめ人かーぬへろひあうくんとり

合期 人えぞかちをこて雅ともちくぞれ身ぐまも合期やめ

字治 「まこの間行程幾ふ三里だりえ六角交ぎそた蔵るありほるふ

平治 下 「まを病と受て万死一生起とくくーて明りえ

かぶら

日秋積ぞえ合期ふくめ附ふりろろ弓弦手をくみ力弱ふく

林家秘抄 巻之三 長久残七年納言経信歌奉出

火盛不合期

前太平記 十 俄のうまてあとも可難合期いくぐせん

かぶらや

弦ふ合期ーー難ろろろあとぞ吟へ

源義 十九 「七くかーこふ合期ーえのうろる間係木

義経記 八 最期のえまやうく存

沙石集 四下三 年こけてほ為の事よかーて多八合期ぢとふぐ合八ぐ

かぶりもの

夾纈 名抄 十三 加字少知結帛為文縫也孫愐曰繒之有夾花也

かぶと

白文 廿四 鸚鵡詩 さく人憐巧語情錐重鳥憶高飛意不同 應侶朱門歌舞妓深蔵

寺下廿九

こ

かぶー

頭ぎ代シ タルヲス

古事記 垂 夜多釜のひとりともくこ宇那加夫斯。 俗頭傾ク 鐘ノ打傾クニヨリ云フ サマヲ

神代紀 下 頃傾也此云歌多志 天智紀 ハ垂額而 熟ノ文字ヲカフシテアカフメリト訓タリ

敬本 枕のかさくえて おかつうたが祇のこれひうかれかうーこの指かへをめんん つむぐ 百五段 かぶーかうちるぐと

ようーさうのスル

がふー

合子。今の椀之

延喜 廿三 漆器部 朱合 俗所謂朱漆合子也 盛衰 廿三 田舎合子の大小皮多く食ひ

多の塗方ろろあく数安多りろを唯く盛のげてさく合

よと簡ろのろの上八毛体が通多の数遊多なわくまも人ふくそをさく椀度らぐ椀のくくとらめろ

かご

水手

倭名抄 衣服耳さく号其著岸之處曰廣子水門也九水手曰廣子盖始起于是時也

古本倭名抄 水手 日本紀私記云 水手 加古

万 十五 月ろろこの老ときみゆの多ぞかこのあろうろうさくろも

海中本舟をそ吟ろのあれそのかこ水手 夫 廿三 盛る盤屋 かこのあくまるまるまるまる

のもぐみ 夫 廿三 四 廿三 老文沙の立ふのそこ 因もたろくみおさろけさろりめ

かご。

是八帯鉤ニ銅ノホグミヲ今ノコハゼ如ク合スルヤウニ作レルヾ。東帯ノ条ハカミニテヒキカクルヤウニシタルヾ

倭名 十三 腰帯具 鞍具楊氏漢語抄云 鞍具此間云賀古 今按唐令所謂玉鈒具也腰帯及

鞍具以銅飾草也。 有三六 かごとと 又 かごとなり 万ケラヨメリ 古 十五 下 「かごとの多ぐべさ

名抄 廿五 「中さえバかごとなりとこのやうさまさえるぐの号八とりてぐさえるぐと 古 十五 名古

「七後のえのそてろひうち号のかごとなりとも多ひえてーぐる 新勅 三 「ろえかえるろ多後とろくひうち号の

かごとなりのあふ後のせさ あげ 九 里五 「さえのえさてろ社ちさとハオ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

新撰字鏡 「めぐりのそんまをむるく」で女陰字のかごとぶよるさ
陰茎のむそべかごとそのひむりぞ 夕良 「かのうえもおがの
ナワけるうんそなふのあるをかごそれ彼女陰をかけんと思ふ

かごと

。カゴト同ジ カコツケコト ムナリ 観智院 「そうをさいそ
カゴツケル カコツケ セイミスル 内 ありやーの店がやるく
かげうふ 土 「そ後ふあがんうだうとかごとそてを
かごとみてとうと あるかかげて 「そこうく」 「かつけの
あるかかげて 「そこうく」 「かつけの
オーひめ 土 「かくうくふかうそのうひれうそ
ものうくひれうそ 「かごとふあびてお知
国ツリ中これうるそ女のうそのうつけて男とりぐ
かごとふもいうど 後くウフハ 「そうかごとふんうん後の私もうく
つくふべけんどのふひうさかごとおひうん 「 世 うひうふ
いとかくうさうり 夕良 二 云悟 二 新撰 「 山田之介うふつうと
「そうとあのそ一ふうふ私のそふかごとと風ふあわせざうる
ぬごどりとりうふのけーさよ 新云 多 あのそ一つりやう
夕良 二 いそひつく 捨うるあのそ夕良 ハおりふかごとの
「そうのり おそもつけて世中さそしそを
。公あるは 同 ～ 後ともそれむかごとうそーうふうあ
実のるるかごとがそーう 「 土平 立阪 あさあそうつるようぐりんて
陸は飛 杜中 「 ふーそんうくふそうさそうりんそかごとがそーさ多の振そへ

かごとがは

。公あるは 同 ～ 後ともそれむかごとうそーうふうあ
実のるるかごとがそーう 「 土平 立阪 あさあそうつるようぐりんて
陸は飛 杜中 「 ふーそんうくふそうさそうりんそかごとがそーさ多の振そへ

ありくるるごうくそもるふつくろうんのあとうふかごとがそーうふうあ
るさうくうとるふのねとかごがそーう生のあるるる 続後拾 雑上 ふ
りが浜落をてかごとがそーうさ落のまるる 千載 の国伝 「そうかごと
。勢大 堀川百首 ニハ かごちがそーさトアリ

かごとそろう

。ワヅカ イサヽカノ心 かごとノ種ラ指ジタルヘ 浮機 まふ 頑愚 「あろ」 多さ思ひかごとうくふ」のあ
。倍語ノ イヒワケバカリ チヨット ナドイフト同ジサユルモアリ 安多記 「こえそやるあ病とうくひうち常のかごとそうのあ
ねもかごとそうのうろうるうん ちりりれどかごとそうハあそべーつり 京極 「あ落のうそ
アケマキ 「さうふそうそうれもそふいそそともかごとそうろうハけど
かごちノ訛ニ出ス 夕良 「世二ひんびあのんふうろーもうんうくふうふ
河海 かごくトシタルトイフ心ニ四園トモイフ 松風 「者もりねうそうひふくうくふうりつる
かごろ 入もうれでかごうるうるうふくうくふうりつる
。カコツケル カヅケル セイミスル 自文 託 ワヅル コヲル
かごろ 実ぐうる集 「かごろべさあとのよかごうん 文明 五二 「かごろべさあとのよかごうん
女のあるんかごろべさあるとあのりおりうふうん 永友 三代 そのうそ
れでありそうさりうるんそあのうりうふうん 帰 丸をうひおうとひさうをそうひおりしをおどふく
ふうかごちてかごろ流さへつきれ丘でふく 夕良 辛かのタ奥のおうふそへふく
ふく性ふ公かごちれどいとかけそるとけーさふくりひうそて 義経 中冊ハ宮くちのはしそのタ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

つるで刃べよ 名義 土佐裁のいろくそれうとそぎてよ
ぐてよ 古今 杜若のようふきづくようやひとりあつ
布れとぞするせ難かくやうげくんせんとうみ 人九集 上
今もれげてふもろ 新撰 そうてそひと月のうへ
ぐ正木のうへぐそしもげてよのそぐどうるん 大伴家持
めうそすちげて 秀ほ 月あとる郷でうるまへ云がるよへ
時そ永中ぐうるそぐてふるけ 秀ほ 三をうさて吹風
山辺のうへいうれやわとみれどもそてよもろ 秀ほ 下
うげてふもろ 万 古五 まこれぐつくへの庭の川とあのめやこそ
ぬぐさ小かくれかくく秋のくこふるへ 古今 当後うう杵
つるとくくやうめつ 万 三五 将ちひうへ
万 天八 ひーほとふひつさてたれ
。かれ食もろそ
。保かてくうてとうり 伊勢 物語 五段 秋のうへ
やさうてよのくうどうるん 土木 定家卿 三 沉水漂著於淡路嶋 其大一圍嶋人不知 沉水又名蘇合香 雅言
くうるふ 雅言 三 沉水漂著於淡路嶋 其大一圍嶋人不知 沉水又名蘇合香 続紀 四五 敗軍鼓聲徹空 和名抄 天仁 粮考声切韻云糧和名加天 行所費米也又儲食也
かて 新古 五 光俊 いとるるうれこるへのうとうとふてそうひのろふいそれたりふー

がてう。 万 一 ふのべのそのとそてう杵風のいそのこ
おりのけ後のふのまそでものそれよおうう杵
えがてうまるとふひつく 古今 「わがるのふがてうまるくうへ人かちうるんほぞふーうぐさ 古今

かさ笠 秋代記 十二 結束青草以為笠蓑 和名抄 五天 笠 和名加佐 所以禦雨也
の名抄後 百度 そのもくさもうあでそくこれとて牛どひさふふう 伊勢 五十 万 十四 花てるや
るふかをがぐこれそよふーのちへうぐうんをるるくよ 新古 筑波 「みちぐふげ交ぬうう筑波人のくこるまる
るつりつく 新古 五 春日 「ふ毎れまるの林のつがみをまりふ 口 「り赤」 うそそも
そもうるるうふんをうれふとうそそちよう不ー 口 「光俊」 るふれ
ふとうりくり 新撰式 大堂二段 後条 おれくさせて 延喜式 五 内蔵寮 干 菅蘭笠四十六枚 令の国 延喜 十九

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

御すよめそぐことき 夫木、秘書 第六 五巻本「ゐをそくろゐをくさかさをみくろれそろ
図ノ緋ニ 第六 五巻本「そさろくろひそろくさとそ廿宮城野く木の
ろとゐのゐゐをさをろ 夫木 井 万葉 ろとろゐそ 夫木、秘書ニ出シオク 已ノ誤ニ

かさ 瘡

イセモ 九十六段 そのひそゐ月のうちぞろゐれぬ女ゐかさひとろくろゐそうゐはもいとのろしそく

かさ 暈

第六ニ 暈氣続日月也此間又日月在

かざしや。 風のかみ

万三、卅九 かゞ 秋の暗夜のそのそろわのゐ
体源抄記 風早乃伊勢乃海 万 七廿二「風早之三穂乃浦廻辛荷乃島」

かざりろ〜

安永抄 三盆 風瘧勝 ゐる加佐保娘子入皮膚虚為風寒所折則起也
好古 六月後 いもとろとと屋のかさとみひろね〜そ旦そろ花ゐのろげとまろくそん
視六 夫 廿二 ゐ廿四ゐ百一 ゐとろめそ花ハそろくそろぞゐろそそれやのろさどとろやそそ〜

かざり 飾 俗ニ 飾ノ誤カ

延喜弾正式 九 金銀薄泥不得為服用并雑器飾祖六月五日諸衛府甲冑之飾不在
制限 帰 玉そとふろハ〜さ人のでろいろ あげろさ 三九 ゐゐふとろ花ゐそろ
みのかざろの綿とそろろふ 白そゐ ハ世中のてろそれてそゐゐ
ろひ〜ゞそろゐろろ 廿九 仏の花ろざろ花づくゐのゐひろひろどと廿そろ 夫 世俗ニ「いろく
のそ十のそさてとかざろろふくへの日ゐへろざのそろろゐろん 雅万本 廿八仏のろそそのろろかとろくぞ初ひそろひ
ろくとろゐろ 三蔵 除飾ナドノコト 又花まろり

かざろひきさ 飾緒

イセモ 五段 人のゐとろかざり緒とろろ
秋迷 第 六月の日ちひろそれかざろちそろ花ゐとふまげのそろれて

かざりろを

続古 雑下 東宮大夏大后宮かざろろゐろさゐひろ日ろ

かざろるま 飾車

夫 廿三 行傷ゐる処 ろゐろもめづし
ロ七 みろ家 茨久栗かざり車のけーきすが

かざろひさ 飾馬

江次第 五生 春日祭条酉日朝宮人等戯設飾馬駄為馬以逢為雲珠以金器為
李子華集

かざれ 重。

年月日名紙ろまろろてゐろ
ろゐろ山 廿三「あそゐそとろろ中のそゐまかされ

ゐのゐろのそハいとろ〜くろんゐろのべれを
秋迷 雑 三盆御所ろ
ろひろそ 平八 夜のそ
ハ花をろ 秋迷 廿三 ひろろろ夜白ゐのそふするどろかされゐのそ
かされゐのげくろんかどそ 今ゐふ 五下 紀ハ 入一日ゐる花ゐへてとろ
のゐ女ゐくゐ栗ゐてのゐかされ 一ゐとゐろ花ゐへてとろ
いとかさ〜けろそ 山家上「いつろ乳首のくといろぐさくろろろ
。 カサ子ニ 二度ノ意 ダエハ別出ス カサ子 一カサ子 何がサ子 カサ子 カサ子 カサ子 カサ子 ほ別ふゐを

かざろ 飾

続古記 五廿 帝之御世万代糸重称飾玉 ロ廿三 伊須ノ賀志鰹遠添飾刺 帰 六 ゐハ敷みて
家の内とかざり人ゐかとゐとろく 雑木上 かとぐハいとろ人回とろざろゐぐせと 夫 元 暁の系

かざれ

ろゐゐのかざろ花月のろそゐひろさろのけてろろゐてげれ
夫 四 主後代 雑「ろゐハ花のかさとれそゐんゐ
そ舟雲 「ろゐハゐのゐひめろけろゐひろかさ九いくそかろ

かざゞれ

風隠 夫 廿八 延喜六年ろ 後撰 「ろろ
ゐゐ 「木主とそつくろいぎ〜そ楼を風が九ゐぞろ〜べろろ 万月記事下 宝治の系

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

のるとかけろおとこうしみそうふ風ふきてひさしのさきとのむかざ
あまるまそそろくろみるーえびーハ風がれみさーくくーしろかとろろわいい
芦刈「ふるけハまるにおそくるーえとかさまさきの松のうぐされ
かさく。今かかのイフムヤ 沙弥「上あろふうやのくひをまをあうきいでくく往てうるまてそんとがさくにてみる衣
かさもと 枕冊「上六ついがされぞその内ふハるくかさまろくいれてまをさ
「ロ」ロロ也 ふそれのひつくろこでてさまてかさうろくいれてうろ
かされ。次ノカサクリニ倒メ衣紙衾万モイつぎノ 和名抄「上ア 史記音義云 衣之單被相具謂之襲 和名加太祢
尓雅注云ー猶重也 ラトメ 里二そどのうえをろのこの手ーくやろ
かされくいうくかさて 字会「上 まきまきにひとかされ 字会「四
めろるーくろうがされのかさまあるハ紀之後がされのありりのまり
かされて。今のハ二葉の 枕冊「上 九いめつついちの日の着ことまきこと
かされてまめをるの作ヒうぐ 落葉「雑五 斑女内親王「狭代ろうとれろ衣とのひろう
又くされてもめつひとさ
かされがのうり 新川落久「ろうる衣時代 倭名「つれどのかされろうくけろうやんあがて後のつうをみーや
かさろり。 大ろろ名え いろ あさかれ「上にびさるはどもるれどもめひかさまろうちちくくとの
さろうとつくー秋にのかさまろうちちくくとの
ぎろまろうどひさろかさちあろさ衣ざれの色うちめかさろうもろべてろくめでく
かさろう 続後「上ア 日月童奴 みかさり 「とをくかさまろうのの
狭改「上 山姥や菊もかさまろ救いめのどきくろくてえやろの
月日かさろりて 枕冊「 そくよまわろことハうびうさろりぬを

かざろれ 風流 夫「芒 清輝「ろろみさそろのー妻汁ろ
夫「芒 散木「中手六ろべどろくろ衣 倭名「ろろ
つろめろくろそそろろ
かざろぐさ 風凪 夫「芦 作集「中為ろのそこ 字「まろちふそのの衣のうぐろ
かざろぐえ 風波 書記「下 流のくそのの〻どくま風波そ〻 「ロ」倭名「風
かざむ。倍ニハ、京ノ字ヲ用与増シ加ルテイフ。タカブルトイフ学。是ハ頼朝ヨリ八騨ノ ※大ニフルマフトイフカニヤ
改正本「四 ハ、ろろ名ろ着ろ元とのそかりくれどもまひとろろも有ぞ〻ろ名とと珠号ーくそ下
かざむ 風波 書記「下 流のくそのの〻どくま風波そ〻 「ロ」倭名「風
ろろ名ろ着ろ元とのそかりくれどもまひとろろも有ぞ〻ろ名とと珠号ーくそ下
と法ろろハ神妙ろれども救難ニのかさまてろめくく救難ニのかさまてろめ
車ニのく落中為名のろまひ衣のろまろまろ救ニかさまてろめ
かさのかりて。製大府云なの門ニ橋の如ニ設あてきろその橋と偕まとのろうあ梅の枝にみつけろ
「ろろあのかさのかやてのりくかりてろもろかづくかろう自ろ「万」士廿五「ロ」きのてがまのかりてのりくこのふ
りとハのろ丸といりようにつくも。延書ハ奥ふ手ふ、カリテトハまろ「ツクル」ぬとハ筒ろ「ツクル」ぬとハ筒ろ「ツクル」ぬ
ようろくこ万かろニワサシノとあろハ美万地名也
かざりて 夫「九 新古「三 文後「まろ名「因 弁中の景の風かりそくち私べくもろ私ろくろ
かさまり 催馬楽「妹が門 妹がりやくおまりのかさまどろやどろてまろうんーてくさ
いてくく多着ろりあくれをくさべ「ろ」もてそとれ 「ろ」ツム「士右さ母ろうあろーくさ衣の作ろくやろう
ろハえーもやとろくさろげろてそえ作と「ロ」丸ろろ如てまをくもりろふかさまりてんとえさあがさと
ぎやめりけし
かざま 風間 夫「芒 為もり「めく彼のかけろ当のをこれをかざ

ろうべるこ風すとまちて〜みゝうもうそそよこがん〜ひれぞそ
ひうろれみのうゝろのまるぞ沖ふゆゑろ

かざまつり 風祭 散木 下廿一 あのそまの林民のみこゝろさゝそてぬさ
ひりのそろてゝせのひりそろゝろひ
えん人かざまつりへ

かざこし 風越 夫 廿九 新古 孝後「くさこ〜みさてろふ末のうええくふをもみのつ附そまさ
新六 二 ゑゝ青大将「あそのそうまけきゑをも風こ〜の学ゝえてそもひ〜ゝと

かざたび 。推古六年四月自新羅献鵲二俣
夫 廿二 三 ゑゝ 拳旅「くさゝうハ仄の氷をけめくんこ

かざごのそ 鵲ノ橋 新古 ゑ 家持「かさくゑのひこそせろ
大和物語 ゑゝ「かさくゑのこそせろ
。まゐ例ゑ大内の作ちこひくく唐詩ゑ烏鵲橋辺敢御延ま
河花「秋「いうるれおとそえそあるんえ天川のみせうひてとかさ
かさくごのあきさあひの橋ふおおやみくん 新古 六ゑ家持「ふ
かさくごのそ〜。楠桜のうへよりめゝ多〜

かさめ 和名抄 十九 擁蚊 和名抄 雑令 散女似蟹色黄其一螯偏長三寸着也

かざー 新古 哭 挿頭花漢語抄云鈿頭花賀位之 推古紀 廿五 以金髻華 著頭
臨時祭試楽実方中将依遅参不賜挿頭花遂加舞ノ間進寄竹台許折呉竹枝挿之
万 十五 「枝ゑ今さうろろへどちかざーみ〜てる今さ
ろこ〜ふ〜 新古 家持「かさくゑのこそせろ
万 十五 「枝ゑ今さうろろへどちかざーみ〜てる今さ
ろこ〜ふ〜 新勅 「祢代ふへめゝやーけん山桜ろへのかざーふとろ
かざーふのそそゑいちろろえて教の白ひよけあさんさうろ地そんゑ

新古 四 ゑゝ青大将 「左右おさろそとうろ立〜うさ〜の花もむし
百代の末ろかさ〜〜とうやゑんん 浮雅 花上ま
おろうべ何ろ山ゐがかざーふもん。是八佐姫ヲアツヨシノミコニュレシ
ゑゑれどコレハ新訳ノ玉ヘルムヲヨマセ玉ヘルナリ
ゑゑれどヨシブノ玉ゑ 浮雅 ゑ四 「ワ右とろのむうのふ末〜の
人のろうこのふ入うふろうおゝ〜うさ〜のゑうやけうえん 宝永六刊古今
せるちふのろうさく 宝永六刊古今 「杜かうさおゝ〜うさ〜のこの
ろうべさこうろうさ〜ろさ〜ハふ〜うさ〜ゑ 新古 雑上「ひさうけ〜ちぎうかいてあのひまおおゝ〜うさ〜の
まぞてるけさ 雑令の衣服令の条の衣と射弓ハ帽子の右ろ左ふさとのろう
年中行事合 「ハとのくおさろをめうを井小ろさ〜のワこの白き月夜ふ。かざ〜の緒とのくこハ何ふてこさまたて
かざ〜ふ羽ひろ〜ろこ〜ろさ〜ろど源氏ふらくるもハ年中行事
かざ〜の玉のうえそろくん 俳業抄 ふふのう人栄ゑどと刈て若ふさそく春ふ人ふゑゑどとかさうろとうさ
ひうろとあろハ挿 醍醐 奥儀抄 三 かざしうろ同ふる人ハひとろかざ〜のうちふそろくとすも射ろさ
ろろ〜ふ同ふる人ハひとろかざ〜のうちふそろくとすも射ろさ
ろええ〜とてハ〜ろてるふおかざ〜とさとを養人落後さのかざ
かる人立又かざとをとのふうあや ゑ 「かざとさもふ
かのかり人も盗人もかれんとてろろふれでかる人てなや

かざーのそ 細流 作り花と着ふさ〜て花とかくとそ
ワカ十上 卅 作ろざ〜のそのふりでんし〜さ

かざそ 。カザシノ下ニ注シタリ 万 ゑ三 新古 ゑ下 「ひくさ〜さ
。插頭ノ字ヲヨマセタリ 万 ゑ三 「まり花の衣ハうろ

衣初「春ふるうめてかざゝん園の花初花のひにかゝくさ」枕名甲下三「ひきうゑてくちかざゝくめのひさしやひもかけめ、
きめのみくる」夫三「新古三秋部「うゑそふるかきつゝ花のつゝりをれし」貫之廿五「後撰「とよ初て時の花とも
かきつゝきさゝ花のつゝりをれし」貫之廿五「後撰「とよ初て時の花とも
いつでき時つゝきぬ」万二九「春かざしのち枕さてをゝぢかざり」万
林のもゝぢとかざゝつゝるうも」万八「春山とにわをもゝぢかさとうきて
もともちゝきちゝきゝよへてゝゝぐさもくんやゝくん」スマ甲五「いつとゝく大人の春ゝきゝ桜うぐさくくも
さゝふくろ

かざゝも　風下「夫十九「坤川」仲冬「
かざゝもち　和名抄廿六白芷一名白芝　和名加佐毛知一云与呂比又佐
かき　垣　和名抄十垣墻　和名賀岐　同築墻淮南子云舜作築墻和名夜末加岐一云豆以比知
新古雑上好忠「山里はかきねひかるゝ松ぎのひまゝくれ枕ぞるゝ」万十三「まこも苅
くさゝ苅そへ妹が垣つゝれ」ゑるうゑ

かき　榜　和名抄十九説文云榜赤実菓也和名賀岐　廣心榜　和名夜末加岐　掖之小而長也
○昆虫草木略「榜　烏者謂之楴」夫木廿九春部「枕石
のゝぢちふくり」同「寂蓮「山里八榜のゝぢうえといそ去これもあり
ゝるぐうみとびのこせる榜のゝぢを

かき　牡蠣　和名抄十九十二「蠣蛤　和名加木　相著宝殻似石也

がき　餓鬼　和名抄三四「餓鬼鬼也餓訓与飢同久飢也内典云餓鬼
冰則変成火」万四廿二「あひおもはぬ人とありみん大きの
かぎ

かぎ　和名抄十五　四声字苑云鑰今案俗人印鑰之處用鎰字非也鎰音溢見唐韻　鉤鍵（カギ）　和名加岐　鎖子（クサリカギ）　唐

韻云鎖鎌果文俗作鎖子鎌鎌也楊氏漢語抄云鎖子鎌乃賀岐弁色立成云藏ノ鑰　夕負「古かざとをゝぢ
ゝりて」万九十七「僕の君八かれてとりさう妻ふれてこそゑくゝる鑰さゝきゝ

かきさゝ　書　ーノトヾム類　掻　ーハラヒ類　かきさ　ーコモル類　頃と取てゑるべ〜

かきさんで　書出　夕良「手あそれげよかきさ出のえれぞ

かきえ　記上順名而常石堅石不動坐　○堅石　○ある人のうくきいうの男波ゑんとのいう
敬末下五四「同人のゑとうくかきえ」「ゑうくくん男ぶかきえのゑうけくさこうくかくさえのやゝ
ゑてゑうゑてゑうゑて作りみ」「ゑうくくん男ぶかきえのゑうけくさこうくかくさえのやゝ

かきえらん　掻拂　万十廿二大伴のこうの松末可吉掃豆（カキ）「よもぎふ
とゝもちひこうのそぞ」同廿五「ゆりゑかきえうひ
さゝふみすそぎて見ふあるれ〜うくひとさる小舟〜そかきえうひ
液とかきえうひて

かきふく〜　のびすきさ廿「さとぶふかきふくゝひこゞれゆ
万「甲四八「垣ゐるとゝきて吾せぶこゝろも、うひ

かきれ　今もゝそ〜ふぐのかきわのさけうやまとゑでこ
ねぶ家ふふ表〜うりり　帚木「山物のかきれあるとゝおゝくふ
見て中〜神ぶくさかれあんふ〜やまとゑでこ　陸氏集「あ
乱ぬ下ひもの実

かきとゞめ　続蕊「五六「えのうちふおれとゑぶうもすくぶ作うれびいうふと耳れゆひろうふなぶも
いきのうちふきまりてうきさとり〜もろ人もゑ〜ゑをきうゑふいとぐかゑ〜くて「つのく一

かいとゞ〜　

かきとゞひ　乱うくう「甲七ゑぐてかへ〜ゆひうんかきさとゞめて姫云ふもそせまりのへべうくる枕分

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

かざり

限。内。間。

竹とり 四 さゝひるゝ〳〵と風ふきてせてありくめんどり かくありさま 古今 古帖 とも 三 さゝと人のくるをも空のきりぬきぎりかとぞおもふ ほ拾 秋下 玄帖 いつくさを秋はきりぬらんあかつきのかざりは秋ぞとゞまる 玄庵六 あををゝくさた 貫之 土 秋風のふくにかざりうちそへてうべもあきぞと月もみる 限りはやうえんとぞ思ふ 万 廿五 いそのかみのそひのきりぎりとやまぢきてきるともたのかざりとのひて初瀬〳〵へまうでゝきけどかざりもなし 玄庵 きりぎりすとのひぬさへこれてそかざりのけとおもふみるきのくり 年月のかざり 人のかざり 是ラ 類ヲ訳義イヤカヅカヒリ。凡テ かざり トイヘル詞本ノ意ハ一ツニヨクく語意ヲ味ハヘバ皆同ジケレドタゞ手ヅマニテハ 訳語ヲ異ニセザレバ心得ガタキヤウナリ

かざり

ノミ 是バカリ 竹とり 三人もあまきのてをしまもとゆふ 帚木 廿 伏見も ひるびるる限りあそ 秋の使 廿 かりかりのみれひ〳〵げてこしの限りあるそかしそめそめのかざりぞあの限りぞる 夕 やどりき 九十三 ゐぞのうれぬさおもひ 枕 ラハこそべてこゝろきのうぎりおもへぐそおうぐきおうぐり 口 九十二 人のかざりとくてことハ皆白ろん 元 浦 廿 伏見る人のかざりとくカハレリ。凡テ 小大君 八 秋年月ぬのかざりのうぎりへそのかざりぞ 枕 八十 名の女男の家あるれる 女のうぎりへそのかざりへさもえをめうぎざうきへと ちや 人の限なとのかざりハ 相つが ふみきかざりの女房 白牡 六上 これ草たれの限りかをそちやん人のふみきうせ

五ノ下廿七

かざり

限 スベテ イッパイ

ざうべき 松ふぶ久 九 紅むらさきぬ次の地のかざりおれるほとゝちざきとゞ 赤ツム 廿 枝もあざしのたうさきこれそへ あづうのけことの限りあり 古今 今年よりかくありけりとしの内にかざりをまつとしをこそ思へ 古今 カケ日紀 秋 きそうぬれさもまぬ山里ふかの限りらめつゝ おもへ もゝ世のうえのかん 拾玉 恨 春長歌 たのかざりかな 枕草子 ちさきうへ給ふ人おかりきさだりうありぞとて牛のかざりも 古今 春二 羽順 ふる雪ハ白くもあらじ梅の花それとも見えずにほふかざりぞ 古今 枕下 奥風 ほかうちふるあのうえ花 伏見 俊 かざりあるぞ ほ拾 春二 かへる人ハかざりのおもひをきお数ひハセよ 万 廿五 あくむのきえ 伏見 俊 かざりあるぞ

かざり

限 拾玉 四 まの上のとのあうりといふともかざりの 月のれどふ金甘て作りあるとのくふされどつの限りをるくつくりうる人も枝ゆかとり 秋

かざりうへ

限 万 廿五 六 ねうれぬ秋あひてれてうるまの秋の限りへこうひ 夕 ちさきうへ

おかざりのかざりも 葵 七 のこゞうれさ秋のかざりあ 栄物 くべ 古拾 秋下 のかざりあ 口 廿七 これとかひ ひやうとてめでこゝろのかざりあ 三代実録 十五 是以謹恐懼已止限量 七 太宗之 まや 聖 いとあてき限りも るく笑て イセモ 十三 恨 かざりあくかあ 帚木 廿 かざりあ おかざりのかざりも 夕 ちさきうへ おかざりあくをくもさきみ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

かぎろひのひと

。貴人ヲイフ 〔古今物語十五〕かぎろひの人の歎のあつくひとしろく見えぬれどそのかひのなきことよりあれ 〔うつぼ上 四十五〕かぎろひのひと人にはかなき世をとかくしつくべらう 〔古今 四十二〕命はかなくかぎろひの夢のうちこそ 〔百人一首 紙四 為切〕[illegible] かなしきことひねくぎろひのつひとみつけても 〔拾遺 九〕[illegible]

かぎろふ

。前ニ出セル シヤモ 是ギリノ意 命ノ終ルニハノフニイフ

〔古今〕[illegible] かぎろふ [illegible] 〔新葉〕かくろぎろの [illegible] 〔うつぼ 下五十三〕けふにとものとぐさびふうらつくかぎろひの [illegible] 〔推力本 十八〕[illegible] かぎろひ [illegible] 〔源氏 十五〕かへぞもの [illegible]

かぎりのこと

。果ノ事トイヘルニ同ジ 法事追福ノ事也

〔源氏 十六〕[illegible] かぎりのことども [illegible]

かぎりある

。男女の人ぞて [illegible] 〔かげろふ 廿六〕 〔宣長云〕此限リアレバハ注ノ如クニモ聞ユレドモ又歎キナ嫉キナレバ宮仕ヘ人ノ如クニハアラデトイフヤウニモ聞ユルヲスベテ限リアルトイフニハ上ヘ限リアルト下ヘ限リアルトニツアルヲコハ注ノ意ハ上ヘ限リアルニ今イフ意ハ下ヘ限リアルニ 〔榜嬢 三ノ注〕 〔細流〕上様ノ事也 限リナキトハ天子ヲイヘリ 限リアルトハ親王ナドナルヲイヘリ 〔宣長云〕細流ニ天子ニムカヘテ解キヘルハタガヘリカノ説ノ如クハ上ヘ限リアルナリ是ハシカラズ下ヘ限リアリテタヾ人トハコトナルヨシニヨリアレ。文九安永ルニ限リトイヘル詞ゾサグノ訳上ニ出セルガ如シコヽニハ限リアルトアルヲ添タル詞ヲ一ツニシテ其ツカヒザマノ異ナルヲ訳ス 一ツニハ 際限ノアル意ヘ保ニ日限ノ日ギリトイヘルガ如ク イツ迄モドノヤウニモト思ヘドモキリノアル事訳スベシ 二ツニハ ドラホド、イフカギリガアレ キマリノアル キメガアルト訳スベシ 三ツニハ 差別ガアル ワカチガアルト訳ス 又義訳ニ 格式 格合トモ訳スベシ 限ハ雅言ニ際ヲ保ニ身ノ上ノ右ノ内一条ニ二条ハ分際ナドイヘル也 三条ハ貴人ヲ 限リナキ人トモ 限リアル身トモイフヨリイサカ為ヲニクキヘウナレド ワカチ 差別 又 格式 分際ナド訳スレバオトリタル事ニモマサリタルニモ通ハメイフベキ詞ナル事明ナリ ソレハ カギリナシトイフ詞モ悦ブ事ニモカナシム事ニモ通ヌ

イヘルガ如シ 釈子ニモ 男女ニモイヘレバ上ヘ限ル下ヘ限ルナドムヅカシウ貴賤ニツキテノミ釈スベキニアラズ ○キリノアルコチヤカラ ○定式 ○キハマリ ○ワカチ ○格段ニコレヲカギリニアノ人ニカギルなどいへり

かぎりある

〔源氏 若菜〕[illegible] 〔ワカナ 上五十六〕[illegible] 〔柏木 十八〕[illegible] 〔同 十六〕[illegible] 〔栄花物語 玉の飾〕[illegible] 〔ワカナ 上五十二〕かなしくよみつけてあまとりのかひつくあまさつど人 [illegible] 〔同 上五十二〕[illegible] 〔盛衰記〕[illegible] 〔竹取〕[illegible]

かぎりある

。ドラホド、イフカギリガアル ギマリガアル

〔きりつぼ〕限りあるふちとそへのよ 〔葵 五十五〕[illegible] 限りあるかなしみけ 〔同 廿七〕「かぎろひあれば [illegible] 〔宇治拾遺物語 上〕「かぎろひあれば [illegible] 〔今昔物語 上〕大寒の御仕とのいでる [illegible]

かぎりある

。ワカチ 差別 ヘダテ

〔夕良 五〕人となりて後は限りあれば朝夕にしもえ [illegible] 〔アゲマキ〕[illegible] 宮は釈と思ひ [illegible] かぎりあれど 〔椎本〕

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

[illegible]

かぐろふ

[illegible]

かげろふ

[illegible]

かぐろふ

[illegible]

かぐろふ

[illegible]

かぐ

さらばこんよかれてやおくんがうもあくぬ月のそろふ 続古 祈雨の心を 延喜御時月次屏風歌 ながつきのかぎりもあくぬ秋ぎりのたつたの山をいろにみすらん 拾遺 秋 紀貫之 ながつきのかぎりもあくぬ秋ぎりのたつたの山をいろにみすらん

かぎろふ 陽炎 新古 春上 春日野は煙立つ見ゆ娘子らし春野のうはぎつみて煮らしも 万葉 十 春雑歌 春日野は煙立つ見ゆ娘子らし春野のうはぎつみて煮らしも 新古 春上 春日野は煙立つ見ゆ娘子らし春野のうはぎつみて煮らしも

かぎろひ 陽炎 万 三 天智天皇の御歌 かぎろひの立つ見えて 拾遺 春 柿本人麿 かぎろひの立つ見えて 新古 春上 かぎろひの立つ見えて

かきつけ 掻付 万 二 天智天皇の御歌 かきつけ 拾遺 春 柿本人麿 かきつけ

かきつくる 掻分 竜安抜 仏をうつくしくかきつくるこそ 千載 釈教 通俊 仏をうつくしくかきつくるこそ

かきつのる 万 八 笠女郎 杖の歌 杖つく翁かくのごとかきつのるいたくな老いそ我が杖にせよ 古 雑下 かくのごとかきつのるいたくな老いそ我が杖にせよ

かきつばた 掻寄。倍ニカタヅケテオクヘ 夕ぎり 下 ぬりごめにかきつばたをうつしうゑてかきつばたとぞ名はつけたりける

かきつれ 掻垂 万 九 たりそのうへにいつくもの数うきたびし橋 夫木 十 雑部 橋 源仲正 たりそのうへにいつくもの数うきたびし橋 古 恋 二 かきつれてうき寝する鳥の上毛かな 古 恋 二 かきつれてうき寝する鳥の上毛かな

かきとどむ 書止 栄花 さかえ 女房連名の歌 四人づつかきとどめてそれぐ〳〵とうびてくのせうとせうのあさ 栄サマ〳〵 さざれ石のあくさべき 栄根合 内わたの姫君まうせのうへ 新古 雑上 かきとどめおくべきことのはもなくてうどのことのいとあはれなりしかきとどめてまうす 新六 四 雑上 かきとどめおくべきことのはもなくてうどのことのいとあはれなりしかきとどめてまうす

かきとめ 書留 栄サマ〳〵 さざれ石のあくさべき 栄根合 内わたの姫君まうせのうへ

かきとる 掻取テ 恵合 ふれのつきさのれことをかきとりてきく人おほかり 栄根合 内わたの姫君まうせのうへ

かきなす 書添 ほん 幸七 仏教のことのをうふーそくとかきそへて 仏をうつくしくかきなすこそ 拾遺 雑上 女ーをかきそへて 拾遺 雑上 女ーをかきそへて

かきなでる 書撫 万 十六 ろひらさ花五 きざこころいかにとてかく書なでる 万 十六 ろひらさ花五 きざこころいかにとてかく書なでる

かきつづる 書傳 続拾 雑上 家隆 いまーくのうれのまのうへぬるみかきつづるあきのあと

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

かきつばた 【和名抄】七ノ十四 劇草一名馬藺 和名加木豆波太 【六帖】六上 貫之「人ごとにをりかざしつゝかきつばたさくころ
うちぬときこえん人もがな 【万】七ノ卅五「すみのえのあさ沢をののかきつばたきぬにすりつけきん日
しらずも 【同】七ノ卅三「我のみやかくこひすらんかきつばたにつらふいもはいかにかあるらん 【同】十ノ廿三「きぬのなやかく我がもとらん
かきつばたにほふいもはいかにかあるらん 燕子花を正字とすへし

かきつれ ○前ノカイツラ子ノ下ニ附ス

かきつけ 【ウス雲】廿 いにしへのことどもかきつけおかれし物をみれて

かきつね 【ワカナ】上五十五 そのかたのかきつけ見むとおほかれば

かきつかね 【万】九ノ廿八 くさつかねとことにいふうれしさの外のまのこと 【亀鑑】四 首のつかきつかねおほされて
うちなきたまへ 【亜合】 故宮貞不の作のまどもかきつかね出でとおほされて 【あやし】 世の中とうとかきつ
ね侯もみちぬのちく 【スマ】卅五「かきつかね着のことぞおのりわかみ下ハそのよのなるかねども 【浮狀】卅上 七紙「ひときとめとが
かけてまつらんみづきをかきつかねつる神下の妻

かきつむる 【アカシ】廿 かきつむるおほげうーさみずちつくおくも作る 【同】卅八「かきつめてあまのたくもの思ひのせんも
今ハかひなきことかはみづからせじ 【おさがれ】廿三「かきつめて着衣しきあかのよろこびとそよるよしのろえねる
【新続古】 ろおほかの松「やかよもとりいまーめーかあかまつめてたひらぐさみやとやん

かきつもる 【夫】十九 なほ家枝「ちりつもる木の落葉ともかきつめて木の下ながら焼くそつる 【夫】廿五 入道内大臣「いせの海の
あまのすてくもかきつめていくらびおもげめのかからん 【秋文集】「冬川のなくの玉のくとかき
つめてこぼくつくるらんとなまん 【拾玉】二「秋ノのこゑふりそへてくつるるもぬふかきつむもかげのかさ 【同】三「のかに
あまりで此世ふかきつめてつひのあひに焼くろべき

かきつくを 【抜萃】十四 さしのものでのもいまーうかきつくしのへ 【新古】雑下 杜松「さちのくのいえでよのなぞ
あらぬかきつくしてようがのいーぶき 【秋篠月清】上「ようくでさかこものりーかまかきつくして

りつのうらのなみ 【栄つるの林】廿七 傍どもなもなどもそべて中くる島をかきつくさざ

かきつけ 書付 【千之陳】十三 藤こやとりひつののことと後ふ人などふのそこやとれをまかきつけをとーつーけの
らやとろ 【夫】卅四 家集この中へのうみのかきつけるのこ七月七日 ふ大君 【字治集】三四 以書付る
何の料のかきつけぞと問ひけるもひけれども何の料の書付なんとりんとりへそ

かきね 垣根 【松遠】秋 よみ人「あつきにへしよまあんむまつくーれかきねのかきこれかうさけるなの花 【夕良】二 山さき
かきねまうえさき作りる 【続松】ハ上 左大臣「神かかいはなさいとのも白なりし垣ねつづきの玄
の夕風 【夫】十四 法師「ふるの垣根つづきの葉うれおあとてのこるる秋の白菜 【夫】九 九条良経ナ二条「かひさうる垣ねむうひの
ありそのる秋の人ふさやまうきふ 【夫】九 あ家「とうやとれふよそへて分前ーかきこれるでーこ花さらぬらん 【同】三 内大臣
まらうやあのまいかつとも先ねのかき根なでーこまとれぶらるん 【和名お武ア教】上「いとくぶをとるきつけふでもあるさくの
こけのかきねといふなりなん 【同】「ゆうさとのかきねふのたそてりをのなく来でのくさきとふあくらひもやぶで

かきるぐとも 【亀鑑】七 まとつでこわきぞかきるぐじようさまよことへんくとあーし 【和勅】四十一 皇太后宮別当「かのひ川ぐきよに
ふどむるぐもとかたならずそふも祝ハぬ島なり 【続拾】雑上 宗徳法「のる堂のおとへいりしていひられど
かきるぐさきらん人ハとそこぬ

かきつかる 【夜ノウラ】八十一 まとりこじくかきるおもれふなりうる

かきたる 書劃 【夕良】九 かきとる島てうるまーそにとくろへりゆるなどし作りき

かきなるを 掻鳴 【きりつぼ】十 かきなのおきハ比あそびるなどやきせのひーふふことるのまのねとかきなるとし
【まきつむ】九 不のうふかきなるとのふかつーう聞のゆ 【手ならひ】廿六 佐琴のかきなるにし
【松風】十八 めのことあつまいびえてさーさりきよかの法をーきこかきなるぞのひて 【万】十九ノ廿三「ぬらくとの

かきなづ 掻撫 まーろの琴のかなむとぶるもかきなるぞそつく節をくーしも 【ワカナ】下五 猫ノ「コラ いとらうたく
うへてかきなでつゝみり

かきなづ 掻撫 [続日本紀]九 吾が髪をかきなでて [おちくぼ]上九 しばしのほどめでたくこそおはしつれとかきなで

[万]廿三「ちゝはゝがかしらかきなでさくあれていひしことばぞわすれかねつる [万]六廿五 つのはにて撫

かきならす 掻鳴 [古今]恋二 よみ人しらず「秋風にかきなす琴の声にさへはかなく人の恋しかるらん

ことわざめてつゆじとかきならしてとのわざつきね [古事記] 畫鳴 訓畫云加岐鳴云那志 [後撰]秋中「秋の夜は人を [新続古]恋三

内侍「ちぐさ」をたゝかへのてもとひなかきならすきこ琴の緒をきよう

かきなぐる [うつほ]廿四 をさるくかきなぐるしのつもりもいさゝかちかりげるぞ

かきつくろふ ○訓

かきうつす [まつら]五十 きことまめひなしのつきをつくしてまうかきうつしそぶなくてそとのあへど中くよかきこそ

るひ作りけるとてあり

かきのぞく [国ゆづり]上之里宮たち垣のごとくおそく生ひくるるはめでしおそしまさるめ五ぞ

かきあはす [まつらの]廿 ちのくに紙のあつごえしうつねき いとよう書あはせたり

かきおとろ 枕

かきおとす [ラトメ]四十八 又かきおとしそくなぞ あらん

かきあつむ [アカシ]十三 人のいうきくみなくらん是しはかきあつめずばどえず

かきおく [かげろふ]八 書おきしものおみとも見えず [西行]新五 寂友「さてつぎ世のかたみとそれのわまれたくあとをもかひやならん

かきおこす 撥 オコス [夕貝]廿六 いかにかたくの人をかきおこさんとよそえあへ [あや]六十四 あひてかきおこしのえぞ

かきあはひ [サフシナ]六 いまそとかきあはひさてかうってとりて我とりひなむしのましきつきまゐ又り

かきなやむ [スマ]四十八 係ふ風吹出て空もかきくれぬまゝ ひぢぶきこなとうありきて

かきくづし [宇津保]廿五 かきくづしそかくいふ人をくるりさかりにくけに [カゲロフ日記]三 人あり浄らかのあるとしかきくづしに

みぞいふとこよなりとりひろりていとをうくなく [アカシ]廿 心御ふきをえじめしめどのみづひはの

世とつとおもふさるらうきくづし笑て [門]四十五 君のかきくづし笑し出てとて [狭衣]四中 十二月ばかりに笑しまざれつる

人のうちもかきくづし笑しつづけてみとつかりのひて [株ノ上]上十五「十月ばかりあめのすみぢかきくづし ちぐ

まつ本なきすれあり

かきくもる [葵]廿六 うぐかきくもりそら地し侍りぞ [きうつが]十六 かきくもり さそくり地あかりん [古今]恋二 よみ人しらず「かき

くもりあう白雲の下ぐ人はさえておもへばあもあらる [枕]三十八 雨のかきくもりしあれいよくかぞく

えあるとれどもる く白くつもりて鈴のまぢうかりけ [うつほ雲]六 まさる紀くもりしあらつあるあしさ [スマ]十三 かきくもり

さまとあり [夕貝]廿七 いみ地かきくもりしいふぐくこえぐくれぞ [山家集]下「晴やらぬこぞのまぐれの うちぶ又かきくもる

さるくゐめぐりぬ

かきくらす カキ曇 [拾遺]秋下「待ちにほらきくありまつるとをおふあるくぞ秋はくえぬる [貫之]「かきくらしありあや

めもえるらぬ大空にありてもかしきぞあのあべしまへ [新千]雑 よみ人しらず「あらしぐるとまちとよそよかね

みべぐり紀かきくもりあし紗のみさぶみ [新六]一 衣笠内大臣「この里は空かきくもりあらあさにとふとそれがあるぞつめとる

かきくらがる [和泉式部集]上「あまのもちうくきくらかりてめる雪と うあふはあらん紀月らとぞとる

かきながる 書滝 [続拾]雑下 寂蓮「かくみとて今は涙の玉づさをかきやるかたもなくぞなる [新拾]恋一 よみ人しらず

「いまやんえのぐの浦のりわまかきながる波のひまぞなりまし [源氏]廿一 涙のつぶつぶと紗の

いと立たつくえらきたむ下のまで

かきやる [新勅]恋三 江侍従「ひとし人のわくくれ髪の面影に涙かきやるさよの手枕

かきまさる 書マサル

かきまぜる [ウスグモ]十三 うぐひすのつねのあかりへかきまぜ立てらるぞ [ワカナ]上百七 ともかくもかいまぜれたる

さえの人てかりそめもたはやをき抱いさゝかごのうちひしかうべ〳〵さゝやかくもれのひきたうかゞひつゝかうもあれ。タ〳〵入ハ物忌方タが三事ッケテアリキモスルトゝ

かさゝぎ 書交 あつめ 平 さうにもさゝやかもめづしきさゝやかきさゝやかとうてよのひて

かさゝぎと カキ交 アダマキ 六十 あゞろの氷魚もかうそをまうてゝ久くの木のもふかきさゝやかのそあそぶと

かさゝげゞと 未ツム 廿 えゝふなるひとゝきゝこゝろふかをきく 新 きくこゝろこゝろ花とえゝふゞもるゞかきさけゞふゝゝ 葵 里 かくのもやきとのゝ書けゞうく 狭 里ノ里六 新 きく ゝとゝ書けゞうく

かさゝりつ 書銷 カキ銷 帰 廿七 あとまみくこそかきさけちてうセみゝう

かさゝり也 揖伏。抱キかう 子カヌゝ ことつくゝ 廿 名取のおひ人ふかきこうセゝ足 ゆえさゝてかきさそもりつ 日葵立葵 れゞどもるくゝなゝふせさそもるゝれゞかきこうセ

まうふどのさゞうめでさゝ 日名の池 三 さてかきさめそもりてゝ仮名ゝとゝふゝかきさふセもりてゝ

かさゝえ 一云ヨリクシノ石ノ階ス 簗 中吉 内侍ノ局ノ名ニテアルベシ 「かきふし人の袂のえゝふてゝ花のありうをそうふまうつ凡 夫 十三 ゝ

かさゝご 垣越 厳本 夫 枕草子ニ見エタリ かゝるゝとゝある「かさゝごゝふ仮名ゝ風の匂ひふてゝ

かさゝぎ 和名抄 廿六 蓋草 和名加木奈 一云阿之井 俗ニカリヤストゝ名ク 一名ノ里の匂ひ

かさゝぎり 新古 新中 後成「いのふセんあづかそのふのねくの行ゝさゝ

栄花 三 大北なも内へゝ足とでおれいとてかさゝそ

かさゝぎり 夫 四 ほゝ仲「さゝ花ゝうちかさゝぎり立ゝうタ立ゝあろし志なゝの花ふ

かさゝあれを ツレづく 九十段 ふとハれて独ゝさのハセていうぐゝんゝ

今物語 片桐 着ゝうへゝく独とかさゝあそてゝあゝ

かさゝのひく 。カキハ助辞歟 「竹川 亜 歌二夜不ふかさゝのかさゝて

かさゝあつひ 書集 こてん 土 のゝ足ゞキーふゝとゞもをかさゝのへ

頓成集 七「花ふゝ風ふいとひそちれゞてそかさゝあつめ

いろ不ーふどハかさゝのつめのてさゝ引 **かさゝぎ** 土 仏説 **掬ツボ** 土 仏説

あゞ〳〵つゞけら足て 椎が本 廿 着今とかさゝあつめかふーふれ花ゞ仏ゞ

うさゝくのかさゝあつめてそのハふゝ

かさゝあつこ カキ改 **夏ノ下ハ** 廿二 やりふのゝ芦もかさゝあゝくさゝあていとゝ

かさゝあさうひ 書明ム 夏ノ下キハシ 五 ゝ 夏ノ下キ舟へ ゝふゝへゝくもゝゝとあ

かさゝぐろ カキ探ル。已ニカイガグリ不ニ附

かさゞま 帰 四六 国も及ばぬ書ござゝ

かさゝと 橋姫 四三 ゝとかさゝし ゝう ふいとゞうがゝーくて

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

や

かさこそぐさ 〔拾遺〕八 みなつきなど書きつらねてかさこそぐさあまた〳〵もえおはり 〔字彙〕四十三 筆ふきあつめてかさこそぐさあまた〳〵もえおはり

かささぎのはし 〔夕貝〕廿八 かささぎの橋〳〵のかたかさこそぐさん地〳〵のかさこそぐさ（?）〔拾遺〕十一 中くもりん地のかさこそぐさゆくあやしきに 〔アゲマキ〕十一 ん地

かささぎの のかさこそぐさ 〔兼好〕 しう作るを 〔ことつくし〕 廿一 あるきずれかさみずれあつ 白木 〔散木〕上 四十一 〔扶〕

かさこそぐさ のかふのわのゆまりふるつまで人のんをかささこうらん

かさころび カキ 柴 〔夫〕廿 家集 みもり「あもてろとの人の世のかさに家ありとぞちえど 地竹草の 一名

かさきのうた 〔夫〕十三 秋時あと雅有「かくねかけいずのかさ家風にて明みあらく秋の空

かささぎのうと 〔推力本〕四十三 う。さく何とろきさうあふかろうすうゆれば例のかさのくしうらあめり

かさゝぎの 〔万〕十二 二十四 こやのあさやに撥 かき をそん 中上三 こりと あきさて

かささそひ 〔あはれかり〕十三 木次の下葉あかれ上三 不 あどかきさこうびくらうと

かゆ 粥 〔末広〕四十九 れかなみどころくふまつ 〔湯児〕上三 おとくたち真じしのひて すずひかあさくりてんとてさへう つさどもふいうそひて皆るまつ。芋粥 巳三 四ノ 拾三 九ノ八

かゆこそのひ 〔和名抄〕十六ノ十 四十三 戸字苑云 周人呼粥也 粥 和名之留加由 薄糜非也 唐韻云 饘 和名加太賀由 厚粥也 トアリテ 今ノ人ノ朝夕米ヲ煮テ食スル是ミ飯トハ蒸笥ニテ ムシタルヲイフ

。雅望考 ルニ カユヲハイヒハ カタカユヲイヘルナルベシ カユト コハモト 二物ニテハアラジ 〔えいひめ〕四十三 れかゆこそのひみごまつりのへ 〔まや〕三十三 れかやこそのひみごまつりてとそきそかへ 〔末つむ〕十九 れかゆこそのひめ〳〵てま らうどみもまつりのひて

かゆづゑ 粥杖 〔文徳実録〕五之三 仁寿元年正月十五日癸卯 諸衛府献祝杖 内侍傳旨 〔枕〕四十四 十四日のはいなきくこかさうぶむまあつくあく げうろかゆ杖ひきうく〳〵つかさふ〳〵 がひみうくれど男ゑ〳〵うちあひかのそくどのくもうぐあう〳〵うごとあると 〔長門侍日記〕上 正月十五日 かく ぞくはへ人うつ日ぞうし 〔円〕下 また月次中おきうのやさくりしたかきてたわうつてうつべきとう〳〵おいせどありしうれ

かゆのき 粥木 〔拾〕三十三 十五日はもちかゆのせくまつるかゆの木引かくしそ家のこさち女うちあどのうう がんと

め

うこれどとうういしそ 〔建武年中行事〕十五日れかやなどまうおこなひそのまゆうさへく杖みてうちあそあり

かめ 瓶 〔和名抄〕十六 瓶子 和名加米 。活 かいし〳〵又 柱木研ニモスルカ 〔サカキ〕四十 あすか瓶かめにさくせてひさしのりとに おし守りせのひつ 〔夫〕四十四 信実朝臣「くれ久くさみ殿の家とかめもさく今るの月のせ井あぞかう

〔漢国〕 あさき二 ひさしうれあくみちのるを深ふかめさヤれどうろひかみうり

かめ 亀 〔和名抄〕十九ノ九 大戴礼云 甲虫三百六十四 神亀為之長也 和名加米 兼名苑云 亀一名救䶮 漢語抄云 字美加米 〔和泉式部〕雑五 人のかめ不酒の入れてさうづさみそへて井らえて出〳〵給へうふるくみそ 〔万〕十六 廿 陶人のつくれる瓶を

〔新古今〕 三 為家 川ヒのそちの内中の夕せさみ何そときりぞ亀そるくろう 〔万〕一 五十 我国ハ常世尓成年

図負留神亀毛新代ト泉河尓 〔書洪範〕注 神亀負文而出 〔拾遺〕哀傷 秀能「ころつくをみくらし川の 亀あれなこのりのうそくふあつそねうりうり

かめえう 〔和名抄〕三十ノ八 癥瘕 醫首家書 有魚瘕 蛇瘕等 師傳云 加女波良 此類也 腹中之病也

かめのかゞみ 亀鑑 〔イサヨヒ日記〕 さてもあつまの亀のかゞみふうつさぞくのうぬうけやあろそろくと せめておのひのまりてようづのえぐりとてつそれ 〔文撰〕前事之不忘後代 之元亀也

かめのうらべ 〔万〕十六 十三 そおちえやかう祢ふりもあへを為ト祖をふそ亀ちる精そ 〔業弥記〕二 盍命神亀以 極 致 灾之所由也 〔令義解〕一 四十一 御巫ト兆 謂 在女曰巫也 ト者灼亀也 兆者縦横 之文也 凡灼亀占吉凶 者 是卜部執業。此亀ノ占トヲモノ和漢トモニ今絶タルヨナリ 〔夫〕廿七 卜部の ひあまりうめのうらべふてのとくべいそれもあうきさ月の夕へるる 堀川書入 マスラハ正本 亀ノ甲 占三ヤ

かめのきぬがさ 〔拾芥〕 義 師付「かみやと亀の手そうにほそゑるよしもくさ人をあふ見つると。

かめのヒぐし 〔令義解〕三 五 凡卜者 必先墨畫亀 然後灼之 兆順食墨 是為卜食 〔夫〕卅七 光俊「川のせたうきたつ亀のさし〳〵いりし世うづうの言ひしろり

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

かめのみや 夫 廿六ウ 倭成「四の御、治ムる行いまるふきく、飛のこゑそこゝん
かめのうへやま 夫 廿六ウ 古代「百あいかあのう人多ム山ゐ其ノ上ニ天をかさねつゝ
かめやま 亀山 蓬萊 拾遺「別戒多住所ニ飛ムおいく、ゑりのゝゑ
かめのせうり 夫 廿一 紀宣「ワゝろ後の登ムねさぬうに宮いかあ

かみ 神 古事記「天地初発之時於高天原成神ノ名御中主神ゑゝ
皇大命 良麻呂 詔大命乎 万「天も皇神祖詔可見詔大御世再 万 十六廿七「かゝ玉の乱ちハ
祢をいけどうみ 万 九ノ四「大ゑい祢ふゝゐゑゐ赤ゐのゑらゑム田井を初とゑゝろ ロ 二十三「ゑろゝゑゐめ
木みいちえゑみうゝ祢そつくちゑゐゑゐめ木でよ

かみ 神 雷ヲイフ 雄略紀 廿五「其雷虺虺 浮雄 表六ゝゝ「ちそゑうう祢
ゐくゐ 万 五ノ四「いうれれみかみゐゐうりそれワゝ
祢さへゑゝうゐりゐれを 拾遺「雑春かゑいさゐりゐ作りろゐあゝゑ天尊加護「ゑえとのゝゑ
思ひゆうつ祢うゐもんのそゝふゐりしゐゐ起 スマ 四九「ひゝゐみちてかゑゐ ひゝゐめく

かみ 守 国司ヲ云ス。今ヨモイフカ 帚 廿六「かゑ物ふとうゐ且ど人も後の且ど
長官 和名抄 五二「省曰卿弾正曰尹勘解由使曰長官ゑゝ戚曰大夫近衛府曰大将ゑゝ内侍
司曰典侍 侍太宰府曰帥 鎮守府曰将軍ゑゝ已上皆加美

かみ 髪 和名抄 三五「髪和名加美 首上長毛也 枕 九ノ金「髪の手ゐのゐ
もとゑえづ且て。物語ニ髪ヲサマザマニイヘリ尽ク抄スルニイトマアラズ。タヾ一頭 上モ 双髪 上モ 往リ
枕 土左「宮のおあのえゐゐゝゝと伝聞ぜんいえゐゐとびゝゝゑゐ居ゐとゐ
たろ髪みゐこもあゐりやもゐゝとゑゐ ロ 九ノ八「撲滅ふひちゑゑと
久保ゑゐゑゐふ 井そゝくて「ゐのおりせゐゐれどゐそうゐハゝゑ髪
りゐゐん人も皆ゑあゐりぬべきゐ死ぞゑゐ 吹川ほ 後拾「琴のゑゐるのことぢふむセダゞれいもゐいとぢぬ

五ウ下ノ四十五

そゞろさむさふ 枕「まゐ 四孤の乗ゝゝゐうふゐゑくとてゑゝさ安うの拍ゑぞくべき印つくりつくさそゞふ将ちゐふの
髪あゝゞふとうぬゞゑゐ地ゐろふ 狭衣 三下 四七「ゑとふかゝゐらの髪なゐろさふふゐろゐ地ゝて拍ゑゐろゝゐ
かゞろゐゝ。以上恥カシサノ甚シキ物ニテ感ニ堪タル折ニモオソロシト思フトキニモイヘリ

拾 古後撰「人の傷ムる人ヲ「ワゑさりとゞれくゐれ髪をとゐ伐の他のおりとみゞぞふれ
ゐゝぬつくゐ髪なつ且ゑゐゐゐしわりゞふゐる 栄花 土「いとゞぎ人ゐ
第ニ五 内文庫「いふやんとよのゞの髪の杖の表えのゝゞゐふふゐ十ゑゐ 和名抄 江浦草 和名豆久毛 ロ
あち髪なのゐろくふりのくうゐゐゐもゐし ロ 九ノ六「い系「人とつくいくゞいのゞ
ロ 古後「うゑゑちとゐひゐゐゐゝゐろえのゑゐれハ今もゐゑくゐり 台帖 五下 鵜匠「ゐろかえのゐろくなう
やくゐふゝあれゞゞ祢ゐをあり且とゞゐろ トリカヘバヤ 四廿八
。 かみハ髄なり よ ノ約。是ヲ童ノサマ剃ギタルサマゝ。 かえみりかけて 是ゝうノ類順ヲ追テミルベシ

かえ 上。貴キ人ヲイフ 帚 九ノ九「れどかゝとゝゝとてもひとりあゐう世中分ゐ
たをゞ且ゑもいゑゑふゐびゑてゐひろゑゑふゐ
。 上下 上中下 上ゲ上 上ゐゑ 別ヲ出ス

かえ 紙 和名抄 古ハ紙兼名苑注ニ紙古文作帋 和名加美 紙有色紙檀紙穀紙屋紙さゝ等名 ノロキ 紙公事紀
帚 廿五「ゐりゐゐゐゝうゑゑゑゝげゑゞのかえゝりりゐうふ 枕ぐえ 十七「ゐえゑゑゑ
ロ 古「かえのかえ。えちのく紙 葵 廿九「あとにひの紙 枕ぐえ 十七「ゐえゑゑゑ
かえ 上。タヾ物ノ上ノみニ 帚 四ニ「ふえりゑのえゑゐゐゐふゐてたる
屏風のかえゑゐかゝえのゑゞゐゑゑゑゐゐ ほ機 雑一「ゐりゐてゐゐ紙ふうゐんきゝ
又ゑんゞふあけんとてゐのかえふゑゝゑゐて出行ゐふる
かえ 上。上代古ノコトライフ 千載「かえ出番のぼゐひゐゐ書も文治の今ふいゐゐとのゑとゑゝゐひゐゞきゐりセ

かみ 上。長如ニイフ 和カナ 下品七ツ ニうへのハ仮上せうをのぶ 又上ニ
。川上ノ一同 土地ノ二倍モイヘリ 但瀧ノハ滝ノウヘトイフ心ニヤ イセモ 公七段 竹山のかミあありとい
布ノ一の滝ノ上よりのぼらんとのひてゐる〳〵 ロ 「さる滝のかミ
かみ 上。句ノ初ニ多シ 歌ニふるさとといふことばかミふる
みニノ句迫ヲモイヘリ ほ拾 雑三 世中と何かさとりんとりかミ

かみおとけ 神佛

かみうた 堀大 祢ゐ仰実 「名大さく天の名戸の祢ごさいはめ
祢つぎごどーげく内仏ゐもる ゐくる仮ゐそ
「名なふとうやさうきこのつきもやどかミひざーげき月のムキのムや

かみとぎえひ トリカヘヤ 二世ニ

かみとぐかミ 上が上 帚 ハゐゐぐーげのつべさゐどゐ〳〵れぞかミぐ

かみかうり 紙冠 枕 土廿ニ えぐさき君法師法場師のかミかぶ
寂心とのふ人のりくろく法師法場師紙冠ときてゐ〳〵もとえうけて
法師のかミとかうりてえやぐちとゐくまて

かみかく 新古 五 知弘 「今も仏ふくる別且つる 髪うき毒しく
枕 土一四 あつ女房のをにちのよるうふ人をかこひてあつぐきく
「ぬぐきそうごさきく とゐんのふいくりのふべさとの
かみかけて あふさのかミうけてなげふ突名のエーえごうきゐ
突えひぐめのふるめりや

かみぐさ 神垣 サカキ 五 祢垣ふ法しの枝もうきゐをいくふ

とーふ松ふるゐて一枝よつりのべの白雪 新古 二 知弘 榊をまやふ
かみそりさ 櫟髪帋 和名抄 十六 一一 和名加美賀岐

かみくめせ 散木 中 十二 大度ふてかもぐ今をとりへる
やさせのひくふ神のこひ女ぜとめる 「君
かみかぜ 神風。いそとのうん 松風心 浪重浪歸国也 夫 十九 義注 かぎの社ふ今
ーき祝もよーゐ〳〵 ロ 「ほふ松 「君をいのる時ーもめれや祢風の名
山井をそうてり祢風の仔芬のとめうあひえうくも 山 弘 女 「ゐぜ
さぐじみもをその川

かみよりいさ 神ヨリ板 。宣長ネ板ヲ祢ヨリ板ニスルトイフコハ琴ノ板トテ杉ノ板ヲタヽキテ神ヲ依板トスルコアリ
今モ伊勢ノ祭ニ礼ハ此コアリ琴ノ此ニ祢ノ心歟 ヨリ板ハ神ノ来リ憑リ玉フナリトイヘリ 続後拾 哀三
置テ請玉ニ神降マセシ「ナド思フベシ 万 九 廿六 「かミぐの人
かみぐのん 十六の番 歌 祢社伏見 祢きかくろうーぐくて気ぐふもかミようを
かみそぎ 神代 新千 祢社伏見 天のムのわけ〳〵首をうつーきて
松のとのもろうぎハかミよふ五百 女〳〵なのふもふ
てそハ祢代のともちひいづくめ

かみた 神田 夫 廿二 る気 「さくるそ去ぐのかミ 囚のことろふふろ苗ハ万代のふめ
口 十二 「きのふてそ祢田のま苗いそきーぐくさふひのものことひくふう

かみそぎ 髪ソリ 和名抄 十三五 剃刀 和名加美曽利 名義抄 加利久波之 仏上 祓ひぐをとゑづくるかミそりてさうのひふれぞ

かぞそぎ　葵　土　いとらうくしけう髪などものをそぎ落すやうにてきく茶のけぶりいと立そぐれとてそこらうちつけにかきやりたるいふおもひやうんとそそきうづくひの人　伊勢　かみそぎの奥ふく海松をまきちらしたる山橋のふもかそぞそ

夫　廿八　類六　和名　ありふるみ月のくみのかぞそぎ山橋のふもかそぞそ

かぞづくひ　俗　大五　あたらしめ　さざらめぞうひかぶりしたる紙づくひかぶりしたるとのえかつくうそをかくのふ

かぞまろがれ　上中下　源紀　廿五廿六　諸奉待上中下乃人等乃念良末久　仁七毛　今度　かぞまろがれもあらうこびもあらうみーうろこびもあうつ附みへーむとて

今いかぞまろがれものくもかやうみつれをしみーうろこびもあうつ附みへーむとて

ヨめりろうこと　ラトメ　土　上中下の人乃上乃くとふろふろうろ　万葉　廿伊多

かぞまつさ　神無月　和名　かぞまつさ　上　かぞちぞのこの木のりとふあるとてかぞまつさ

神無月のつい立ちでろにぞろ　好太　和名　神ぞづきろみ　万八四　かぞまつさ

かぞのこいろ　夫木　廿四二　梔をを　神のふむろとあかむれいゆふつををのねくうろうろ後朝

上ノ十日。上の十倍日　仏性　芳木や　とりの　廿七　かぞのこいろ

かぞのとろ　帚　十ぞぢちのふまをぢふんぞろうみてこふふそろうろもと

かぞのかくり　幼　古　中ねノ系　いとさぐふふかろーきさみーてかきめぐくぐふふろ　もてーぐくぐふふろ　髪のつ

サマヲ　かくうみどいとあらしげうりうり

五ノ下ノ四十七

かぞのかくれ　空七ふ　髪ノサガリバトイヘル類カ　まろうむ　廿五　かーらつさ髪のかつぞれいとうろふーげうり。髪のさふし

かぞのそのの　神ノ園　夫　廿四　祇園乃ふ　かさふさまふきの尾のうぐさ月ふ神のそのとぞ今日ぞうろふん

かぞのうろうろ　埼玉　蕃　大進　れそこれの髪の毛のうぐさかーうきーくもふこれみくうろ

かぞのまち　上ノ町。神ノ下イフやニノ町トナルニやヒアハスベシ　やどりき　光　あるみぐちふふうとふぐれかぐぞかふの

まちもふらふとそぶにつさぐもハこふうふえざめれど

かぞのふぞぬ　つぶく　廿八陵　紙の被衆の表一枝の手うけ　蔡のおつりのいくえくう人のつひえとうさん

かぞのさね　かぞふ　雑下　結周　夫　江ふるりろ水ふやきふこせあるまふぐぞ手ふ神うふ

かぞのさね　かぞふ社ふ合卅番を保　まぐふ死のれぐひとそろふふやふも

○禅ノ庵ニカ、テぞ　古剣ハ子ギ女ノ男ナランイヘリ　神まめ

かぞまつこ　神奴　夫　卅　髪の集　髪木浦尹教度　ひろうりふ

門　卅　和名　僕ノ系万代　髪木法ふ教度　神奴とろ

門　卅四　和名　世くかけていそふふうろの神ふつこいやとふーふいのうりうりん

かぞやま　神山。契沖雑記云賀茂山ヲ又ハ神山トヨメリ万ニ三ヨメル神山ハ大ハニテ賀茂山ニハアラズ又イヅクニモ神ノ

マス山ヲイフ相撲ガ神ふカシノクボノトイフ所ニ集ルニ中ニアリ

かぞまろり　神祭　地川経　大木　桂ふ世　神山のろうふ父をれバ月の内ふりぶかりふ

菓の下ろちきカーふやれ社をらぐめてーふる　俗　さふ　夫　廿四　杉田

○音楽抄云かぶの浮ふる山をふ女つぶハふうふきぶふとふ　羽花　ふ　若宮　柳とる　ふの山路やをとうんふふけてのふ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

すろ神くみ 新六 一名を肉食「神まつろさう紙ふるびくゆゝしでの玉ぐし
あ月ふるれをゆふけてそむろの榊ゆでてさをふり

かぞふり
うけて 夫 廿五 紙垂「ひさのこぎ手に胡鬼やつむらん髪ふりかけて
さゝげうるあどうとうりゆふふりかくべき髪のあや
かををふりうけてゆくけをひうる着こゆひ〳〵おのけのさみとうへ
ふりかけてゆるこゆふれみげ廿五 いとんびつ〳〵生をき

かぞうそま 紙衾 袁後 三尼二紙衾斗と被着々

かぞでれ 神声 カケ日記 三ハスハ不さぐゆるゑ髪のゆを徐ご倒のかを

かぞのそび
神遊 夫 大後成「かこ山や榊の枝ふにさうけてそのれの神のそびいとけのれも月ふをさゝろ
ぬゝし枝の尭の神のそびをろうゆるさうふり 新六 一光後「月さふる夜ごゆけ

かぞのげ
○抄 一一ハ神遊ヒハテ神ノ天ニアガリ玉フライフ
傳馬朱 引五三「まく神のゝさの神のげふあ人ハまとをの余有どてさけ

かぞのげ
○髪トリアゲ今サシテイフ 秘抄 下六得選三人也又髪上来女兼之 万九廿五 あ〳〵のやのうゆゝとあが中を
むりの肉ふう記れどろろ人ふりぬ且花髪あけふどさじてかこのげさせもきそ印本ナシ

かぞのげ
○女ノヲサナキホドハ放髪トテ 髪ヲアゲズ男スル頃ハ髪ヲアゲテ結ブコトゾ
続紀 三十五 慶雲二年十二月乙丑令天下婦女自非神部斎宮宮人及老嫗皆髪等髪上 語在前紀至是重制也
弘仁 十六六「榜の寺のそ髪ふ尭の振〳〵うふのえふりハ髪あけつ〳〵人ふ サガノ池 辛二つくそふり〳〵も皆

さうで髪あげさうぞく〳〵ろ

かぞあげ 万 三廿七 あをのそうへとひくさ神上あり昼ぬ

かぞさうじ 紙障子 袋草紙 二廿三 紙障猶早依樹立 狭衣 三上二 修り〳〵ヲ景ふ二紙障子
ふもとうそうひて紙隔ふふ〳〵のたぞとうへうふの紙さうじみごだろふてあう〳〵さかりそめのあどころとうへろ

かぞさゝる 夫 廿九 紙「神さゞるいふる根の着ふう松ふへふろる年ふ
ろうゆふみのそこ枝のりそふけむそすでふ 袋ノウラハ 廿三 あるふ人ふ一のくおあふえそ神さびふるこ
どもゆへりの 宝物 千ごろゞひおくゝ〳〵かぞさびてふこあげさるれどいとかりろ〳〵 続紀 中二宝亀
みえ申ろこそろゞうゝれさ申ごくふふてそふれを 万廿 六廿三 ふゝの宮八
みさうみ手ぞ掛川ぞを廿の春ぞさふ紀神さびてそれをふ 狭衣 三上二 修り〳〵ろ人
ふろおてそ神さびふる子どもの母とを有ろ ほ拠 三ウ「神さびてあ
ふゞど 万廿九「ふふとととさそこれハふさゞゆハこれふをふ 菊岩 五四 宗尊大納言
かろさいたろうこひてゆさ〳〵神さびふる人社ん〳〵き 万 二廿三 まを花ふハそとのの大ふうどふろ〳〵ま
神さびさそり 万 三廿四「ふく〳〵と後ふふくあや〳〵ももふさびと
松 十三表 名身「いそのろふふ〳〵表のかふさびてふろふれハれねふ 捻玉 七社歌雑「大井川松の尭山のふりとりそ花をさゞる
佐保の川原の神さびて 行のみち八ふ空とふく 捻玉 七社歌雑「大井川松の尭山のふりとりそ花をさゞる
多のかふぞう庭ふろ

○附

かんさび 万廿六 二母をふ〳〵りゞあれきふかんふゞらかんさび
勝 ホコル表三テ さび ハ進ノ詩ヨリ出タリ 手ズサミ心ズサミナドイフモ同ジトイヘリ
契名抄 九ウ七 黥 髪曲ス 漢語抄云加美木里無之勢薗髪曲ス也

かみそりむし

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

かそさい 髪際 和名ニ針灸經ニ加美岐波

かそざね 鉄 ニテ五六寸用あり 紀傳のふく嘆月歌のさやうなるふ紙さねのいとうをえみまげさとらふねと
きてうちさうぞひうるれどくいふくでうりみくさむげつみ
えげうり 盛衰 平八かそさぬのうへふとさをえ保の衣とぞさたりうる 字鏡 伯掛 八ニふくさいとりふねとうそみとへ紙ぎあ
ひとうをぞさうりうるさてひとさむりうるみてれとかふさたりうれむいとあうりうみてよかてうり

かそあも 上下。紙ニイフ 倭ニハウヘシタトイヘリ 古ヲアヒ 廿かそーもひとつ

かそあも 上下 スマ古俗のくうりねべさかをーもさぎありせのふ

かそあも 上下。上ニ着ル衣トシテ褂トライフチルベシ 今俗ニ肩衣半褂ヲ云 天和勅法六 遍照出家後ワヅさうぞくかをーも学ふちすて坐ふそあやぐぞニ下をさうりろ 安元依怙紀 扶桑於ふ カ甲八巨ノ さうぞんれうり物のかをーものふ
おりてさらくろうりうりもかうちかうニ至るのさぬふ 字鏡抜遊 八ニ武五ありかうのかをーもふ紀ふをさてて
著皮 廿三 くぐのひさニ上下ふあを紀さたるのぶり人

かそーも 川ニイフ 夫モノ人 ろくぐ 十井川ふのあぐみかをーものふみ

かそー 醸 酒 吉事記 中手八 もくろうが加美斯美岐迹りれ恵比ろうり 崇神紀 五許呂波涼択破和鉄涼択那
區周耳伽綿 蓋淤朋涼択宇摩羅耳 択虚之茂知埴勢 磨呂俄智 祝代紀 上廿三醸ニ八醞酒ノ万 十八ニ来
仮をふ嬢 なー古もも 代ハかてなーうふーあくれだ 古事紀 中ニ息長帯日賣命醸待酒以献
△倭ニカモスとふハカムとのべていろくべ

かそ名 紙繪 拾遺 雑下 名ふをその紙画ふまるあるあ あふ法作 ろふれひのるあふ
ふぐひの和ふやあくん 古俗紙葉 はまづろうかふ

更合 古代のふうふさかく面白き紙画をとつのるとふあめのーくいとうをえ

かそびと 神人。古訓ニヨコカミ人又ミヤ人トイフ人アレド皆ヨチシ次ノモヨレラウケタル ホトゼニバ ハブリコノトヨムベシ
万 下九 神人のをにとうりろる 神をふかふけもふ

夫 廿四 家逸 神やそふのそそぎふ出つくふきのとふのまぞそぐーさ 中務の条 ふふうぐぐくく
の名ーてそうろつの神人。古訓ノ説イカベトゼモ的確ナラズ 夫 廿五 家集 家陸 山風ふ秒事ふけて白妙
の名ーてそうろつの神人。古訓ノ説イカベトゼモ的確ナラズ 夫 廿五 家集 家陸 山風ふ秒事ふけて白妙
の名ーてそうろつの神人。古訓ノ説イカベトゼモ的確ナラズ 夫 廿五 家集 家陸 山風ふ秒事ふけて白妙

かそひろ 紙捻 古今後 六 土器ニッヲ打合セテ黄ハ色紙捻ニテ十文字ニカラゲタルヲ
今昔 名法紙鳥帽子を紙捻とりて頭ふあひつけて

かそひげ 髭髯 著ノカキハシ 九髪ひげをそうろ法作ぶふあやーさふいうをなるあり

かそひげ 紙髭風

かそぜに 紙銭 和名抄 廿七 加美勢述

かそそぎ 神杉 万 五 ふろうの祢枝祢とろう長をもひ且ハヤ
顕宗紀 八石上振之神椙伐本截末

かー 和名抄 廿七 万モ千七 祥柯唐韻云ー加之所以繫舟 漢書地理志 祥柯郡 注祥柯係船杙也
万モ千七 あそてく可志ありそくいありそろふふてうの後へ
たてく候さそうふのうふ中そうかセキー 夫 廿三 字鏡抄 「さうぬ
ぢというぐそぐべさ 散木下大檫得船ぶ「こさうれかーもとろーさ

かー 樫 和名抄 廿七三 檀和名之萬年木也再雅集注一名椴一名槭
万 九千九 もの 檀實のひとうろぬうん

かー 柿。カスノふ

かー 借 大方ハ切ル、詞ノ。又下知ノ詞ノ下ニモ。又マヒハカス工詞ヲオキテ
下ニイヘリ 願フ詞ノ下ニモ 切レタル肉ノ下ニモ

かー 和名抄 廿九 ふをもふ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

ちひさくさめ仿れど 口をとーうときこふつきてゐるびとをぞうらしけ
ゐりしごろ〜 帚 土わかーふつけて出だえとるゐりあり〜 柏木 卅
そてふ 土 さーゐらびゐるうんーもあをひめぞとーし 帚 九 まとのろうま
べーかー 「かーえ木 卅 かをあ仿くんもあのゐーらー 口 廿七 あれゐりかー
捌つが さへゐひつかーとえさりて放ひゐゐ 帚 土 世だ弓乏とうゐ海づろ
ゐりぬらー 口 〃 寸ひとそぬろー 口カナ 公三 これぞこいとなげあふふくき
ろゐらーとそそと 松 云 先弓て垂そろひとてくらく 将名のまへーも
たをゐうゐうまーかをとうへゐろー 口カナ 公六 うきそのひゐるさぶれもゐ
のねふハワーろ乏のひろれろー 柏木 卅 ひゐるろうへんうー 帚 卅 ゐろうへんうーと
ゐがーいづ 口カナ 九十 女市のあまりやゐくろふあびれゐるうるんらー 口カナ 八十九 まづへか
かーえ木 土 さゐうあてえなへんのあれゐるんらー 口カナ 八十九 まづへか
ーこえ花のゐひゐろくろーさえさかーゐど人ぞゐひあそをとる 柏木 卅 三 え弘ぞなおつくもあくさか 口カナ 下
圭 まさとゐ弓ゐ仿ゐ本仿さふるうゐあきろー 口 卅 秋のあれをさかうゐ
うでなくごこーうろひぎそそんぬをかーとのゐ在 イセモ 毛 波 んみもか
ぎとろ 「うつをき 六 おもかーもうぐろー 口カナ 八月 まちてどものんろろ
ふくかくぎろー うつをき 五 弓ろさ乏ぎかー 六 帖 四 ゐぞぎもあ乏ろー
かーえ木 世 釈くちのろぎふあ乏ろーとうぴいゐろくんふもうえそぞ 豹 友 弓
土内ろうぐんゐをとさふあも何ぐいあそぐかー 夕負 四 五 とざみふいひる
かろさろふあぞ 云 て作るか 夫 卅 九 第 弦 糸 左 「今うつろ 三 とのオ
ともか。 さかー 三 邦 別 三 云 うの外あるよいとゐあーす

かーえ 柏

万 卅 九 「ろうふのこのてかーえのふおもに
いろみのくゐ安可良我之波へをきいあれどゐえとあうりんとさいされろう 仁徳紀 十三 「取到熊野岬其鬼之御 縄葉木」
葉楚之苞図易波 万 十九 四 「名せろがさげてりろわくらーえあこうもにろのろり
。あうくら柏 ま柏 このて柏 柏木 村柏 めさ角 ろうのをふ柏 ろうのをと柏
カシハトアルー可考 。塾沖カかーえとハさぐをふをれーろへてかーふとのハが図ふえ
をべーをろーハ教ろみめ且てをふのつやくうろくこのそかーまちひさ花を
あうくみ おふおるをふこ うふ称務 ふれのをふとりくかーまとくうゐハおまま弓
まべて木のをふとそりろ称をりふろべーあうゐかーえとハ芸の而さをりふ
称代時をふふりろれをゆふをふともいへり

かーえて

景り名 土 到的邑而進食是目 騰(カシ)天等(ソラ) 遺(ソラ)盛

かーえのこりで

夫 廿 お模 「称のかーえのこれてさーろぐうひろりろ

かーえぞ 柏木

。き衛 赤つノ称ナリ 玄関云 源氏ニ右衛つ舘ヲ カシハ木ナレド トモニ広ツモルサマオナジキ故ニ同称アルカ

元木いとおろーふりの称のまをろんもいとかーこーきふのとけぞ
後称 「かーえぞを椎のあづえふそうえてさのふさふやふーまろべさ
あらんあハバまひのふも 保 元 表 左を赤緒る経成 ふを近 「ここそきく
世と 松浅 雑表 赤絹を数宮を儀の仮木 行くろくろくとまふく 太近 「人ーえどでこのめーふりかーえ木のりやーふん世ふふりにろ
大和物語 二廿八 ろのおふのをふのを仮ろろ仮 源 名 処 名 処 の 「かーえ木の木のトをおいぬとも多といさづふるさぞもあろうん 柏原帝

皇年代暦記 桓武天皇天應元年四月十五日御位延暦廿五年三月十七日崩號二柏原帝一

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

かしかまし

【栄花】【浦々別】廿二「かしかまし此わたりにさてむ〜のねよりほかにおもはれそでてそちへ【夕顔】五十一 近くてかしかましくいひさわぎなさひて【松風】廿 かしかましうかひなきひて【夕ぎり】四十八 住の友はかしかましみ

かしかましう とどろきひびく

附 うくかしかまし 【夕顔】十九 あな耳かしかましとこそ思ひさわぐ 【口】四十七 耳かしかましかりし 夜さのおとと 【拾遺】

かしよね 【和名抄】十三ノ七 粿米 加之与祢 浄米也 今ノ洗米也

かしづく 養と育とをかしづくとよむ ひとしき人のかしづくとよめり 【イセモノ】四十五 人の娘のかしづく 【玉かつら】六 よき人のむすめとはいはれたちの人かしづくとおもひたるべきなり ひるもかしづくべきなめり そのかしづかるる 【やどりき】廿二 おほくしく ひめぎみのかしづきたるを 【東や】四 みかどの御むすめなどもかしづきてん 【若菜上】十三 かしづきのいとるさきもの 【若菜下】四 げにおろかならずかしづききこえ 【柏木】四 ひめぎみとは私おもふあまりかしづきのひつことかぎりなし 【蓬生】四 此君をいとおもりかしづきのかたかぎりなし 【帚木】三 女のおやくのいとおろかにかしづきのさま くはいふにもいとおもりくして 【松】二四 よふさうくはにかしづきて 【ワカナ】下 あけぬれば猫のかしづきとして 生くろとて 【柏木】十人ひとりのおもかしづきふとかくつくろひて 【柏木】四 侍どもそのくわのかしづきもそこそこかしらのしかも人口の君ふあそび又りおとどり うてかしづきこうへあくまれ〜さはあそびどもふるん

かしづき 【ヲトメ】廿七 殿あまりへ〜まどはほふていとらうたくしてかしづきなど〜〜らう君のそふ。大みやノ孫娘ノウシロミスルナルベシ べきはいまじらうてとくのへて 【口】廿八 舞姫かしづきなるし〜てつまどの中ふ人と見などさて〜 【千載】雑上 大みやまさにとろ時辰の日かしづきに十二人いへ〜はおもひづく人母うでらく

かしづきむすめ 【東や】夫そうどの娘かしづき姫とそえのへ名は〜さうの人よう年あ母あはあらさん

【夕みかほ】五十三 つまはいと名かくろかしづきぐさなりとあ〜いさめ 【みをつくし】卅三 内侍せるそ

かしづきぐさ ありてさうぐ〜きふかしづきぐさとそとえ〜なう 【ウス雲】十 あけくれのかしづきぐさと

さへもるむと思ひて

かしづきびと 【松風】卅二 れまづ思ひよりてごまさかむさのなかしづき人ともなれよぞうり

かしづきもの 【玉かつら】五 此君とかしづきもあまてあ〜るくは 【ヲトメ】卅 此君とえてひけつかざうのかしづきもののとおもひて

から 【和名抄】三ノ二 頭 賀之良 獨也言處體而獨貴也。今の俗カシラとクビとの分は頭とクヒとは頭をて頚とるへり

かしら 【宇治拾遺】九 仏法者のあはれ いくかしらつくりまうらるぞと宣へど五からら作りまれてとのへ

かしらいたし 頭痛 【タギリ】九 げにいとかしらいたうしさかのこちてかしらいたしとありつれば【若菜上】廿六 今さき〜とそぞかぶうも廿年ふり〜なれどいとかしらいたうおもうけ出ぞ【松】七七 此つ枕柴ノ宿多ノコシラヘ

 【不二】教シ玉フ 友雀羽 いであるらうこ出あなされよあるかし〜いまいくで堪ゆるんとまぐせめ下せめやて

かしらく 頭ノカク 【玉かつら】九 濡れはせめてさこふ下ねさるなかしくてからかきあつく 【着竹】十六ノ甲 三矢

 乗ふはあくろぞ〜しててくろかけうろろかつるふあくるなれどかつるもされて乗はる

　友多く え〜とふげてもふ名り此男からかきさよよ出ど心ふ思ふる〜

かしらくさ 【和名抄】三ノ廿二 瘍 和名賀之良乃佐 頭瘡也

かしらとつどくて 【狭衣】三ノ上卅一 あるかぎりわきまれゆどひておもえ中さずかしらとつどくて住ろかのうるさ〜

かしらとつきあてて 【古今著聞】女ゝかるるぞさみかしらそつきあててねとのそぞるく

かしらそろ 【夕顔】卅五

かしらつき 【うつせみ】四 かしらつきわそぞあふちひさえ人のさく 【口】かしらつき頬つきおあざやかふ 【あさぢふかき】廿二

 やうぞいかしらつきさる中ゐきて

かしらのゆき 頭ノ雪 【古今】春上 家持「春の日のひかりにあたるわれなれどかしらのゆきとなるぞわびしき 【末つむ】廿八「ふりにけるかしらのゆきをみる人もおとらずぬらすあさの袖かな 【拾遺】雑

免出法 すべてこれどきえせれりのいとをへてからふつりう宮みぞめろろ

かしらのすゝ 頭ノ霜 地ノ川ほ 神ノ髪かしらの雪もそろひあくぢいふ年月つもろん

かしらおろし 頭ノ颪 [ふれば雪] 五 何のめのぞくみてう又殺みもかへろん とのゝ雪ぢ

かしらする [狭] 三十六 大根 美濃国ヨリ始メ尾ガ本ニ多シ 髪ノ長サ二尺許ヨリ短キモノヲ云 [枕] 四 女房尼ガ本ニ多シ おかうそいみされどそれいうきごとのつゝ [枕] 四 女房尼ガ本ニ多シ そてぬふろへこれとれん光度外と祝れれろえぞもうゝろ

かしらあらふ 頭洗 [枕] 二 つろのかゝろぞりあくひつくろひてゝ [日] 二六 かきやきもろ初めくひけゝろて 春 かうふゝゝろろ着ろ [日] 七十二 かそろゝきれ髪あれくろとのこのかゝろあくひてやを粧よ

かしらそろふる [古代日記] 七そぢや八そぢの法みあのろのの [字鏡] 整釜 熟飯也加志久 [万] 五 世こゝきよへ海のきくおそろゝれぞ改もゝろろけぬ

かしく 炊 ○米ヲムシテ飯ニスルヿ つろ五のひぬゝんとて山の法作ぞろうへ光ゝそおろゝ稲木ひろへせあふ白ろれのキグりるどろ知そおおろゝかセゝそ [サガ俗] 廿六 光

かさろゝきのいひ [和名抄] 十六 修食 饌 加太加之木乃以比 半熟飯也

かぎやう 嘉祥 [字鏡] 六月の儀仁明天皇の承和十年の六月十六日の儀 みのて悩をるをゝゝ十六日の祝ふるそへてりちひ十六のろ木の実もその祝みのてのゝ百とうのつくりのをいとるみゝろろゝ八のれ月のうゝまいて志もつくこれりの元るゝあびゝとりめでゝ元作るとてみえるて加祥と改さをおえゝて六月十六日ふるゝまうのいとるるひゝふ

その年氏やをく思をろれぞゝ

かしまの祝び 常陸ノ帯 [夫] 豊明節会ノ時ニ腰ニ着ケル帯ノ事ナリ 俊頼 [ふぞもかくりろれそろくろる] 古事記 下 安康 [カホカタチヤサシエラシテ] 体捜茅

かゞけ ○ [ちや] 茶ノ湯 [喪] イマダ成長セヌヲイフ ○ヌスボラシイ。見ダテモナイ 白文 [ニ] 子李子 憔悴 時 [爰ハカマ] 夫いとかゞけろるをゝろうちあひろうや [ちや] 茶 かゞとゝ元作ろのかゝの爰のかゝろろ

かゞけつく てそいさそろめるとりひてかゞけろめのりゝハをえろろりかゞけつくおふもろゝでおろれぬとや [初] 六 ろる家 [ちや] 茶おれのもろ

がろん 我執 [盛衰] 二十 大慢ノ者ハ天魔ノ為ニ執着ノ心ヲ生ジ仏ノ教ヲ信ゼザルヿヲイフ

かゝこ ○彼處ノ [庭ボ] 三 そのるをとるんかゝこふもいとのそゝぐゝろれぞろろ [初] 十六 かゝこふいまろれどとぞて令婦もいとのいれさ

かどひきのろくろりけるひおそれのろり [まつひ] 十六 かゝこふいまろれどとぞて令婦もいとのいれさ

かゝこ [カゲ白記] 三 秋ノ名ニ負シク出ヅ [あ] ノ初ニ委シク出ヅ

かゝこ [あるかゝこ] [葵] 四六 いまひのおふ作ろあるかゝこおぶぶ垂仁天皇御宇始為ニ別殿ニ御温明殿ニ白河院御宇仰旧内侍所

かゝこゝろ ○温明殿ノ内侍ノ名ニ因ル [禁抄] 七之 神鏡飛出欲ニ天而女官懸ニ唐衣袖奉ニ引留依此因縁女官

奉ニ守護ニ賢所御衣上古被奉自中古絶周防内侍旦女御装束也夏生衣冬練絹被奉也

かゝこゝ ○名ノ初ノ字ニ因ル ○其余次ノ [かゝこ] ニ従メ出ヅ

ろろるるとおひのてて五てけくいひそゝ作ろふ [司] 九 されどかゝこゝとてもひとろふろ世中をろろ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

ごちそうぐさうられべ 万16-3384 なほ於遠 二世 のくさうこるいとかーそ
ーそともえざうつれど 梯ノ上 上五七 いとちひさくてかこう
ーの物ゝかはこてみめーもてきく サカキ 手の後うも侍
ふ世みる分え うる者の作の男どりくぐふいとかーこそれども
つくりて作りろ西の山ちふめりとかーこそれども 竹トリ 六 大角ノ 首かーこさ天父のひーうふ風ふりそ
それをふるうる手そして 葵 四五 かーこのそれる手と空とあぐてるぐのの人 大和物語 五七 もちのくふいれでの君うはらつれ春も世ふるくかーこそう
人ごりくありそうのの八ほみーめつし 相つが 廿 かーこさ相人のありろとふぐーてのの人 万 三世 いすーへの七のかこ元
かーこ〜 ◦ヨイトイつ公 前ノトム同ジケレバ 伏浪 相通ハシテスルベシ ワカナ 上九十九 やうくれろるお風うぞかーこそ元
同うろと真ぐそ イ毛 廿度 かし男女いとかーこく人み
るびうめいとんづきるそひぐるう 万16-3384 なほ於遠 九千 いとおこさきうるくやひかそーてこんるうろう タ良 四六 かーこく人み
ごいもかやふわそやそぞと元人五位いそごあさ作ぐぞとの 国ユヅリ 中五八 美宮相何のうぎもせさそろ人もみけ
カゲ日記 二人くおるうい秋ううるてそいとかーこうれとの
ふ元大和かーこうみるうへうえとのかしーうそ 枕 四七 あふ ノふさのの夕ぐれ内で作り
ーくとのとかーこーとるんやひのろくくこへのそうのるみんん 竹トリ 六 士二 ろ汗のめのはやつくろひさこうう松ぞぐも
あぐりやそうんとうえやきくきく されどくふふぞそこそこへいうう
ときかげりやとおとさーかくをきく かーこさかげとさくげくる
さくやうく 後拾 かーこさまるう ◦公前ニ同ジ 生来タコデヤハアラウゾヘ 梯ノ上 下廿四 宮大の夜のとうへーくこそ十み狭づかえこーつく
こどもいづれともきくやひかーづきるかくてそひおそんかうふかーこくやへあるぐさ
かーこく ◦公ハ前ニ同ジケレド 是ハ善悪ニ通メ切ナルヲイフ詞 イミジクナド、同キカ 古後日記 廿七日風やき吹あろ
ふみさそこれるをかーこくるげく 竹トリ 六 士二 ろ汗のめのはやつくろひさこうう松ぞぐも
かーこく 発ク 竹トリ 六 大角ノ 首かーこさ天父のひーうふ風ふりそ
ーくとのとかーこーとるんやひのろくくこへのそうのるみんん
あぐりやそうんとうえやきくきく されどくふふぞそこそこへいうう
ときかげりやとおとさーかくをきく かーこさかげとさくげくる
さくやうく 後拾 かーこさまるう ◦公前ニ同ジ 生来タコデヤハアラウゾヘ 梯ノ上 下廿四 宮大の夜のとうへーくこそ十み狭づかえこーつく
こどもいづれともきくやひかーづきるかくてそひおそんかうふかーこくやへあるぐさ
かーこく ◦公ハ前ニ同ジケレド 是ハ善悪ニ通メ切ナルヲイフ詞 イミジクナド、同キカ 古後日記 廿七日風やき吹あろ

かーこく 発ク 竹トリ 六 大角ノ 首かーこさ天父のひーうふ風ふりそ
ーくとのとかーこーとるんやひのろくくこへのそうのるみんん
あぐりやそうんとうえやきくきく されどくふふぞそこそこへいうう
ときかげりやとおとさーかくをきく かーこさかげとさくげくる
さくやうく 後拾 かーこさまるう ◦公前ニ同ジ 生来タコデヤハアラウゾヘ 梯ノ上 下廿四 宮大の夜のとうへーくこそ十み狭づかえこーつく
こどもいづれともきくやひかーづきるかくてそひおそんかうふかーこくやへあるぐさ
かーこく ◦公ハ前ニ同ジケレド 是ハ善悪ニ通メ切ナルヲイフ詞 イミジクナド、同キカ 古後日記 廿七日風やき吹あろ

かーこく 発ク 竹トリ 六 大角ノ 首かーこさ天父のひーうふ風ふりそ
ーくとのとかーこーとるんやひのろくくこへのそうのるみんん
あぐりやそうんとうえやきくきく されどくふふぞそこそこへいうう
ときかげりやとおとさーかくをきく かーこさかげとさくげくる
さくやうく 後拾 かーこさまるう ◦公前ニ同ジ 生来タコデヤハアラウゾヘ 梯ノ上 下廿四 宮大の夜のとうへーくこそ十み狭づかえこーつく
こどもいづれともきくやひかーづきるかくてそひおそんかうふかーこくやへあるぐさ
かーこく ◦公ハ前ニ同ジケレド 是ハ善悪ニ通メ切ナルヲイフ詞 イミジクナド、同キカ 古後日記 廿七日風やき吹あろ

かーこく 発ク 竹トリ 六 大角ノ 首かーこさ天父のひーうふ風ふりそ
ーくとのとかーこーとるんやひのろくくこへのそうのるみんん
あぐりやそうんとうえやきくきく されどくふふぞそこそこへいうう
ときかげりやとおとさーかくをきく かーこさかげとさくげくる
さくやうく 後拾 かーこさまるう ◦公前ニ同ジ 生来タコデヤハアラウゾヘ 梯ノ上 下廿四 宮大の夜のとうへーくこそ十み狭づかえこーつく
こどもいづれともきくやひかーづきるかくてそひおそんかうふかーこくやへあるぐさ
かーこく ◦公ハ前ニ同ジケレド 是ハ善悪ニ通メ切ナルヲイフ詞 イミジクナド、同キカ 古後日記 廿七日風やき吹あろ

かーこく 発ク 竹トリ 六 大角ノ 首かーこさ天父のひーうふ風ふりそ
ーくとのとかーこーとるんやひのろくくこへのそうのるみんん
あぐりやそうんとうえやきくきく されどくふふぞそこそこへいうう
ときかげりやとおとさーかくをきく かーこさかげとさくげくる
さくやうく 後拾 かーこさまるう ◦公前ニ同ジ 生来タコデヤハアラウゾヘ 梯ノ上 下廿四 宮大の夜のとうへーくこそ十み狭づかえこーつく
こどもいづれともきくやひかーづきるかくてそひおそんかうふかーこくやへあるぐさ
かーこく ◦公ハ前ニ同ジケレド 是ハ善悪ニ通メ切ナルヲイフ詞 イミジクナド、同キカ 古後日記 廿七日風やき吹あろ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

あれ君のみことかしこき父母のみこゝろくるしく人あいそみやも

かしこまり ○九種ノ義アリ 本ノ心ハ恐ル、心ヨリ轉ジタル也 一ツニハ恐ル、恐レ入 二ツニハ敬スル心 三ツニハ謝スル事 四ツニハ懈怠アヤマリ 無沙汰ノイヒワケノ心 五ツニハ勘當ノ心 三条四条体ノ語也 五条ハ

かしこまり ○ハ勘當 ハ勘氣 ハトガメノ名也 スマ 四十二 源氏の君ぞおほやけの御かしこまりにて次の浦に おもしろき事と 顕輔集 かくぞねるよと人のよせつかふよりて白川の院の御かしこまりなりしに 拾遺 律師ちかく おほやけの御かしこまりにてこもりゐ侍りけるよ 詞花 雑上 おほやけの御かしこまりにて侍りけるを 源ぞ本る 侍りけれどその月こびの月のみまかりてよめる 致經

かしこまる ○怪ニ恐レ入テトイフ義也 仁徳紀十一 新羅人懼之 カシコマリテ 日本紀 恐怖畏 景行紀五十 天皇則惶之 カシコマリ玉フ 同五 悚恐伏地 オソレカシコマリテ 夕ゴコツ 蜻ノスケム子答 年ころもえつくまどもいそがしく侍るうちに作も きけるにかしこまりてまかりゐるのごとなるさうらふかね 同 枕草子へみ 御ことにかゞみやおがきたすのかしこまるかしこまりて まりやひかまうかとてある 同 おくものさねるも衣ゆかそろしとておりけむぞこうちかへりめをみかしこまりて えの事ぞ いま後紀十七 此よのとおがやむワづらへしくてかしこまりてるさるみてお しもへかけろふ 廿五 おろうまあちこうちそうへこそ人を安みかしこまり候えてかくもしあきあひるとことれし 柏木 卅四 六条院はいさくなるとのひとつ さくひめありて月此ろの内みかしこまりをてすゐるん侍りしを 宇治かげのかづら かゝくいとあびんてるをとつ なりまかりてかしこまりを侍りつ 枕一 義尾 僞めのとおかへてんいとうしろへてさと侍さかなりしみかしこまりて候おおもむきを

かしこまる ○禮ヲナスサマ也 夜非紀 謹惶 神武紀十一 慄然改容 續後紀 二十七 皇太子恭成礼利 因畏 カシコマリ 比 ○敬シウヤマフ也 夕ゴホ 四 又さわるるみかしこまる みそ伏 四十二 えりやさちかしこまりてさぶらふ人 作り 十二 秋ちゃうのみ若かしこまりてお前へ へとゆふさうら 御ろく 蔵開上 千もかくへし りかしこまりて取りぬさく 同 四 五十三 北の方 大い殿へさ人 御かしこまりて取りぬるく 御ノカリ子トノ神モ 多クカケリ 枕 三五 みね殿あゆき人こそいとつふかくおのゆくさりはさる人の いとふお手まりかしこまりてうるもうつろきまるぞ 源氏 七 ワづいえんまハたぞくりてんやるとのの人かしこまりて さうらふ

注領某之 夕がれ らうがえしも天然みちおそれしまりてとかしこまりて コテフ 廿一 人々ハこそやうみろ御殿後あかしこまりを定 てけぢかくもさうらひハど 帚 三 いづくみてもまかりのれ候えのへかどもおのづからかしこまりもからど 葵 八 院代の人々まもかしこまりんかへありつつるをと

かしこまり ○失敬懈怠 無沙汰ノイヒワケ アヤマリ 無沙汰ノアイサツ 藤の花 下十一 中納言の ひさしくさうらはぬかしこまり候へんとてるん さうらひつる 吹上 七 ひさしうたいめんをそろぞありかれぞその かしこまりも候へんとてえん カゲ日記 四 二日ぞらりありて又御前へて侍らねれどおむしろへりなるかしこまりなどいひ 落窪の君 おもらがかしこまりもろろこびをひとよろびみ候へんとて大きなる君だ三ふうのれし なかどころをぞわくこゑどいのれて 宇治拾 四 院むくゝみおそらのをけみまりひとひまつりとどいかしこまりをなごやを 宇治 十四 出でみおそろくかされて んやどれしのひし世のむくひみどと佐みかしこまりを申るゝそくろしえん

かしこまり ○怪ニオれヲ申ストイフ義也 継体紀十一 謝 カシコマリ申ス 竹川 卅六 さもがみかことづけるうおおてしかしこまりみ 東屋 廿二 いとむづうしげみ侍をどかしこまりとゞふとてるん 同 卅四 かうとえぞの人てるかし こまりハ此筆まうでも候えさせんとあり 同 卅二 ハとかさどけるさらごふも侍ふくそ此君ごそかしこまりを候えん のひつべきされどるうきかぞとの人 宿木 十九 ゑへのかしこまりハことさらふろるん奏つべく侍り 同 卅五 院か そうけまつれどお限りるきかしこまりとぞ申さめしるさるよと候えさせ君ぞうみ今まふでかくあそびてあ させのをひろうくみもいうぐそえ侍らぞさうん 盛衰 十ノ廿二 大和國の院めんがく御ろるそこれおもぞ侍りなべき さ五月ぞ此中法頭も安のひるぞいそぎ御御まちてかしこまりを申すやさせのみぞくとあかへつて院恨みやめ べき 祭の使 九 ありてぶさうしておれうちきかづけのひてかしこまりや頭 東屋 廿六 川ざとかう院みあかるかな 後涼もかしこまり候へすべ 宿木 三 出る本えてまぢかうえ奏り侍りてみくかしこまりとるハをべきと見 東人

かしきとの ○炊殿 孫徳式 七 新造炊殿忌火人庭火祭云々 火炬二人取山城國葛野郡秦氏童女 コレハ神供ヲツクルトコロヲモウス

かがさ 揩。雪覆 夫 笠 ㊀ 名義抄 嵐山さびしくぐろく苔もる ㊁ 六仲 かーさそくこーの山蔭の揩をうつもるふるびまれるかなとかまくら

かひ 貝 和名十七 尚書注云貝水物也和名加比 万三四 ㊀ 名義抄 貝 ㊁ 伊勢貝 ㊂ 俗用 ㊃ 名義抄 貝 ㊄ 名義抄 貝 ㊅ 名義抄 貝 ㊆ 名義抄 貝 ㊇ 名義抄 貝 ㊈ 名義抄 貝 ㊉ 名義抄 貝 ㊊ 名義抄 貝 ㊋ 名義抄 貝 ㊌ 名義抄 貝 ㊍ 名義抄 貝 ㊎ 名義抄 貝 ㊏ 名義抄 貝 ㊐ 名義抄 貝 ㊑ 名義抄 貝 ㊒ 名義抄 貝 ㊓ 名義抄 貝 ㊔ 名義抄 貝 ㊕ 名義抄 貝 ㊖ 名義抄 貝 ㊗ 名義抄 貝 ㊘ 名義抄 貝 ㊙ 名義抄 貝 ㊚ 名義抄 貝 ㊛ 名義抄 貝 ㊜ 名義抄 貝 ㊝ 名義抄 貝 ㊞ 名義抄 貝 ㊟ 名義抄 貝 ㊠ 名義抄 貝 ㊡ 名義抄 貝 ㊢ 名義抄 貝 ㊣ 名義抄 貝 ㊤ 名義抄 貝 ㊥ 名義抄 貝 ㊦ 名義抄 貝 ㊧ 名義抄 貝 ㊨ 名義抄 貝 ㊩ 名義抄 貝 ㊪ 名義抄 貝 ㊫ 名義抄 貝 ㊬ 名義抄 貝 ㊭ 名義抄 貝 ㊮ 名義抄 貝 ㊯ 名義抄 貝 ㊰ 名義抄 貝 ㊱ 名義抄 貝 ㊲ 名義抄 貝 ㊳ 名義抄 貝 ㊴ 名義抄 貝 ㊵ 名義抄 貝 ㊶ 名義抄 貝 ㊷ 名義抄 貝 ㊸ 名義抄 貝 ㊹ 名義抄 貝 ㊺ 名義抄 貝 ㊻ 名義抄 貝 ㊼ 名義抄 貝 ㊽ 名義抄 貝 ㊾ 名義抄 貝 ㊿ 名義抄 貝 (1) 名義抄 貝 (2) 名義抄 貝 (3) 名義抄 貝 (4) 名義抄 貝 (5) 名義抄 貝 (6) 名義抄 貝 (7) 名義抄 貝 (8) 名義抄 貝 (9) 名義抄 貝 (10) 名義抄 貝 (11) 名義抄 貝 (12) 名義抄 貝 (13) 名義抄 貝

かひ 交カヘ 古今 賀「榛ぬちりくひくの立ゐらくのこんとりふるをまぶふうふ 万」あひ 三をうひみて人ふるのりそやつまん貝やひろもん 催る示 イセノミいセのうみのさこゑれるぎさまぬ汐ひとぐめくよゑごぐのつま 枕つ然 八仕供のやさうくひまするきふ 万」吉「かくゑをそのうちろ〈あれどもれ」さふをあがおりえるくよ 夫」苗多多内食「のづく川くごろふみのうちろひふあさ飯そーふさやさつく 仙カヒハ汐ノアヒダニヤ 行カフハ 行キ交 余皆文ノ字ノ也 ○ちりカヒハちノ郎 道カヒハみノ紀ニ出セリ 拾」三上 スキノコヲ其ノ末ニ附ケテ白クあれどれうとをえふくで首ろひかぬみるびきてかひろざさてろ人みてそいくごう仮さえめ五

かひろざ 狭を 三上七 さまハセつつ仕男のえろいとかさでけみくなきごうしくのどかひぐ〜〜く

かひぐ。 甲斐アリテノ心 今為終 古 えてさいくるおがさ五ど

筆ばなてのちくろろとかるぐくいろうぬべき時ふいひむつびてふられふるくくごるせろうんのだ大臣後もいそぐくあれみかがーろりかひぐ〜〜く千我をまふいやとにろ 万」ふくめづらしさ二ふーとろひうれるみつけてもかひぐ〜〜元ん地て 保多久物語 三五 を墓をとぶれてえのへせ松の一むろあるやかひぐ〜うぐんをついろろみもるくちのとこーそ 沙ふ三下 ふさろもかひぐ〜〜くゆひつ五ど 著受 士六七 日ろろーのそびさじて枕のみーろろ何みてかひぐ〜〜くぶるくひてろ 万」塔紙の箱ふてありろみやかひぐ〜〜くのぶどくふ飲てれよろ

かひよ。 蚕ノ声ヲ カヒヨト伎ナセルニ 和訓栞 下つ初ニ ひよヲ蚕ノ音ニイヘリトイヒテ夫木ノ「よとつくえくノ お引キタルハ矣フニタヘヌ退りこれお カヒモナクトイヘルヲ詮ニヨヲ入レテ呼ベルニヤ

モナキふトナリヌ 古今 ハイカイ キョシヒト云始「枕の歩ふ妻ろ死森の年とへてろぞ系えのかひよとろろく 彩翔 夏 未定自「今ぞこれいのりしひよまる山おりくだうれーえをろうの夜 夫」主 保延元年ろ〜 義ふふえ 五分ふつ 九十六

此みろうえーろハ何をろひよとろるえあつもろん 夫」土 カル従 和泉式ア ろくいとぐ〜くるえさふのかひよとえん 万」廿五 秋琴う 笑才の笑ふるとて「事ちこひん枕の年之の春うりもちくさろ 後のろひよとえふ

かひご 好 まさそ 万」 ひさうろごろくさの松ふひろさ五てせろえあきふ

かひごろさ 次ノ かひごろさノ約ヲ見ルベシ

かひつくる。 善悪ニツケテベツクル ヤウナルサマヲイフカ 万」カシ 四王 ぬさるどとてかひとつろもいとれ

土 見モ人クアリテ 例のろうこびるさーてのろうかくおいけうひもつろ

かひつもの スマ四六 めさどもめさりてかひつおりそまる五ると 夫」共 天ろ 古事記 中平 頬曽多和夜賀比那表麻迦牟登波 狭ろ五 かさ五ろ死ひとろ仕べーのひまぐうろえろ

かひる 晩 あをあかス 世八 ちりねさころかひみとちーて 万」廿 五世 仕ふをろとろくてきくとろくめつ仕狭ふそくかひみろさもちら 手トカ ヒナツバキタル アバノマキ七二 姫君おもへ人 ホニイヒカヘスリ 村のひざとふうろ仕極つきかひろちどのうつくーさち

かひるぎろさ 人ふも仏ふそれを 口 五世 仕ふをろとろくてきくとろくめつ仕狭ふそくかひみろさもちら 村のひざとふうろ仕極つきかひろちどのうつくーさち セのえぬふそとをく 口 二上 世 仕かひろまろうぶーふーのひろるくーさの 万」三四五 ちあ ふべをえ可生分ふか けて 元文 わふざとそきろひるぐうかひるとおふて 陸奥 三六六 ちあ ふべをえ可生分ふか 伊勢物 世三 夫木 弁尼歌一歌おひろ女の「ろるもぶうつくおろふ村のつろ枝ハかひるろさそろれ 夫」

かひるぎろさ

ぶろろ。 九夫

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

かひなさ　名義集　「ひとちのいろこそのつとのくれなゐもあるる

かひなし　六帖　五下　「いもの袂のちひろの浪みひろくとも
ゐつゝふつゝめのすりかけるあつぎそとをうんにぎりのくるゐろそれをえのひてあるかひるのつぐやとのひろうそろみこがみつをなくろひろ　イセモ　六段　にぎりうをしてなげくさまかひろ〜　後水　いとぐうれさるげどかひろ〜　古今見記　みるよもいやあるべしみつもろふるあとでかひろ〜　和泉式部集　下　「みる人今ゐるぎさみとれがうひさをこれとわりえぬあやこのあわづるびの著笠古今六帖　名ゐ　いとくのかひろ〜　後水　三越　あるものうひろくていさくるげさてこもれ　スマ　廿九　「いせまるく汝ひのくさみあくりてもいろひなりたるたゐ名ゐ　名ゐ

かひらみ　新六　五　史伝　「こまろうのかひるくく

かひのがる　伽毘羅衛　。南天竺ノ国ナリ　名義集　三十三　見二　捨遺　哀　仮名書紙　四廿二　枝葉の伝写　「伽毘羅衛ノ城ヲ出テ檀特山ニ入リ給ヒシ事ヲ云ヘリ　「かひのがるかりやさをのもゝそさ　夫　八仲実私記　「玉川のほくかひのがるかりやさをくたる

かひはかわれ　その殻をとりぬる

かひかひろ　貝オホヒ　「トリカヘヤ二

かひこぐろ　。是モ飼ヒ子ルニヤ　夫　八　新六　名ゐ　「かひこぐろ

かひや　「坂川百首　氷　実　「きさらとのりへつゝかひやのかりつけ〜かひやのかりつけ〜　万　十九十三　「かひやの

かひふく　。已ニ貝ノ不ニ出ス

かひかもろ　後カゲ　「けごもの行夏をとりせろうんまろうみあろ

かひこ　。卵　カヒノ不ニ附ス　「おもかげ　十九廿二　蠶　和名抄　比古虫ハ吐絲也　万　九廿二　「ゐつごもろ二夏のうろのえみづと貝合せとてあふくろ

かひの実　貝合　蛤　「新六　「ひのあるこそもろひあろ手ふ　「竹とり　「かひのくく

かひあり　「新六　「ひのあるこそもろひあろ手ふ　「竹とり　「かひのくく　ありろあをつびてて去めろいのちいさとろ　「伊勢　廿三　「おれのまよあろうろーみれでこそやいせれ　「伊勢　廿三　「おれのまよあろうろーみれでこそやいせれ　「枕冊子　「あさりしてかひありろとあろ身とろうみてろとんやろろん　「枕冊子　「あさりしてかひありろとあろ身とろうみて　「古今　「きろのはみあろうもろあ手のうろあるかひろと

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

かも

シキもこ。紅ノ中略ナリ 白久 廿四ノ二 平展 絲頭毬 和名抄 十五 坐臥具 氈 和名賀毛 毛席 撚毛為席ヲ也 拾遺 雑下 敷妙乃 東乃方尓 有時者 伊豆久波 安礼杼毛 安我古非米也 毛能乎曽毛布 かをさして 万 三 廿六 あしべより 万 三 廿六 あしべより

かも

和名 十八 鴨野名曰鳧家名曰鴨 新撰字鏡 鳧鳥 鴨加毛 新伝 三 廿四 葦鴨 かきそもとうぐひすのこゑ 万 三 廿六 あしべより

べいやさそ。かりわめ 大木 七 新ばれ 三 廿四 そを肉食 さくさみろの 仁ふるろ 紀 神武 紀 神代 上 ねくまをとそうひうれてやまとそうかもの 万 六 一書の名水の泉を夜をくさねさむさえさう池のかもとり

かも

か ノ心 かも ノ心 てまをとそ ノ白久 集ス

かりづさ

。掃部司ナリ 枕 古今 行幸 めでう死也 うそ 清涼殿の 万 十 かりんづさのりのどもう 万 十 かりんづさのりのどもう

女ウ反 作ヲ略ス 多リ 天 作ヲ略ス 也ノ反

かもうり

和名抄 十七 冬瓜 味甘寒 無毒 止渇除熱 和名加毛字利

かもじ

鴨柄 和名抄 十九 切程式ニ 賀毛江

かもめ

和名 十九 鷗 加毛米 水鳥也 夫木 十 四 冬 「さのみるとかりめもむとのうさはかも 万 二 そうそうぐん 万 二 そうそうぐん

一名江鷺

かぜ

風 冬ノ風 山ヨシノ風 潮風 湊風 夫木 廿三 泊瀬山風 飛鳥風 初瀬風 イカホ風 サホ風 顕昭 以上 夫木 二 万葉 五ノ下ノ九 十八

。ホヒの風 義法 ことの玉風 〃 名の知風 〃 久吹風 〃 みの下風 あり 以上 夫木

風のみ **風の音** **風の故** **風のつて** **風のそよ** **風のよそ**

浮拂 巻五 いせ 「めふこそめ風ふみをへざてつ 万 六 雨の名水の泉を夜をくさねさむさえさう池のかもとり

かぜ

風。病ノ名ニモ 「ヤドリキ 廿三 いさくろ 万 六 風ふみなえーキーク 名をこそ 万 六 雨の名水の泉を夜をくさねさむさえさう池のかもとり

竜ノモトリエズカラキメミテノ からびてあをさめぐろ 万 六 雨の名水の泉を夜をくさねさむさえさう池のかもとり

さりをあこうたけくろ 万 六 雨の名水の泉を夜をくさねさむさえさう池のかもとり

秩 三十六 名ニ 万 六 雨の名水の泉を夜をくさねさむさえさう池のかもとり

かぜ

風。病ノ名ニモ 「ヤドリキ 廿三 いさくろ 万 六 風ふみなえーキーク 名をこそ 万 六 雨の名水の泉を夜をくさねさむさえさう池のかもとり

竜ノモトリエズカラキメミテノ からびてあをさめぐろ 万 六 雨の名水の泉を夜をくさねさむさえさう池のかもとり

さりをあこうたけくろ 万 六 雨の名水の泉を夜をくさねさむさえさう池のかもとり

秩 三十六 名ニ 万 六 雨の名水の泉を夜をくさねさむさえさう池のかもとり

かぜ

風 冬ノ風 山ヨシノ風 潮風 湊風 夫木 廿三 泊瀬山風 飛鳥風 初瀬風 イカホ風 サホ風 顕昭 以上 夫木 二 万葉 五ノ下ノ九 十八

かぜをさくさのうびく

論語 顔淵篇 君子之徳風也小人之徳草也草尚之〔風必偃〕 夫木抄 後集 内閣

「君が代も千ひろの底の石ねのこけのいはほとなりてうごかむ

まてもおほひき君が代の八千代の八千代風ぞふく 内閣

夫木 雑 山のをそのくれ内の杜風やうびくらし人のオとめるうそえ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

かせづえ

和名抄 十三六 鹿杖 加勢都恵 ㊀ 古行旅具 横首杖 加世都恵一云庵杖 ㊀ 古往来 公二かせ杖をつきて友よりてあゆこう多り

かせき 鹿柵

著聞集 廿二 信濃の守行長が館のまわりに鹿垣をゆひまわしたりけるを ○木の股をいろいろにゆひまわしたるを

かぜのたより

前拾 一六 信濃四八さえめて風早き頃そえていまひ立て百日の内雪もあり日の光りもさせり風静かにて春近しかぜのたよりもがなと詠めやりつゝ

かぜのそうと

めでたしあらたまの年の初めの嬉しかぜのたよりと

布ノ哥 夫木 四八 後拾遺 春上 ○ささ竹の風のそうとも聞こえで来る夕暮の秋の初風

夫木 四一 信濃の歌や風のそうこんやさえ渡る月の光りに

かぜのたより

風便

夫木 十九 ○ささ竹の風のたよりも聞こえで来る夕暮の秋の初風

新古今 雑上 ○ささ竹の風のたよりも聞こえで来る夕暮の秋の初風

いつくより風の便りとなく虫の声々弱る秋の夜半かな

夫 廿五 家集 ほ俤 ○ささ竹の風の便りもあらじかし

べき風の便りの時々聞こゆるもあやしく

新古今 雑上 ○ささ竹の風のたよりも聞こえで来る夕暮の秋の初風

夫 廿五 家集 ほ俤 ○ささ竹の風の便りもあらじかし

のことのそとゞきさうにとや扇の風のたよりまでもいかゞ

新古今 雑上 ○ささ竹の風のたよりも聞こえで来る夕暮の秋の初風

うけてちらさん 新古今 雑上 ○ささ竹の風のたよりも聞こえで来る夕暮の秋の初風

和歌初学抄 かりそめの玉だのあやしきを吹めけて風のたよりの花の宿緒

手毛風之便 丹青 向枝離垂 花之宿緒

かぜ 風

夫木 十九 教仲 吾松つの風しき吹ころ ○万 十七 四八 あゆの風いさくらしるのあまの船をやおもふらん

夕とむろのあいちしまの ㊀ 名寒 北おろし南かぜ ㊀ 名寒 仲つ風

「おろしどのうらうらめもかすめらん」 公重雲平吹放事之如 夫 十九 賀集 ○ 延喜式 六 祝詞 六月大祓 科戸之風乃天之

ちりぬるもあくるまのそのろくのそのそめづらしきその辻風

おやかやうかあひの風やさえんさちや 夫 十九 後拾 月 ○ 万葉 十二 ○ 万 十七 四八 あゆの風

ふやあら神楽の夜うちも人のふの風ぞそげしき ㊀ 義法 ○ 万葉 十七 ○ 万 十七 四八 あゆの風

吉の神 ㊀ 義 あらざろ赤大吉の風ふるまでゝ ㊀ 通具 ○ 万葉 十七 ○ 万 十七 四八 あゆの風

代々の風さしみそろのうら波 ㊀ 為家 ○ 万葉 十七 ○ 万 十七 四八 あゆの風

㊀ 義法 ○ 万葉 十七 ○ 万 十七 四八 あゆの風

ふふかくてちぎうとゝ ㊀ 為家 ○ 万葉 十七 ○ 万 十七 四八 あゆの風

有の井のうへいうふんくふく吹そむる ○ 万葉 十七 ○ 万 十七 四八 あゆの風

吾ようちしぐれつく ㊀ 好忠 ○ 万葉 十七 ○ 万 十七 四八 あゆの風

冥のせきこそ ㊀ 為家 ○ 万葉 十七 ○ 万 十七 四八 あゆの風

きつしふかそらざろく 万 二八 ○ 万葉 十七 ○ 万 十七 四八 あゆの風

新六 五 家 ○ 万葉 十七 ○ 万 十七 四八 あゆの風

吹夏ふみうふ人の ○ 万葉 十七 ○ 万 十七 四八 あゆの風

あふぎ ㊀ 為家 ○ 万葉 十七 ○ 万 十七 四八 あゆの風

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用

ろう物の匂ひうるそのつゝ風吹おろし 口 後撰 沢風を ～かぜ

口 を内合 「沢風のうるはしやうびくる衣のおそ～うそまもやく袋小 風

妻やあそうのかふ匂ふらん 拾遺 モレハ加茂ヨメリ 義経 「人の

風や天の八重雲吹ひらまかつろふあとやそうろひちろうそ～そとめのそぐごちぶ

そぐめん 夫 九 おなじ 「あそう風ふやくもそ～き大とうの歌ごふうろひてなくそ

万 十 幸二 「そう世風かくふくそくそくのうとそころもかそ～き我ひとうれん

口 二十三 「そを手あの神吹うとあとう風就こそ

いそづくふく 口 六 世 「氷セごきそうる和うもそ～それ風ハいさく吹そ

きてそうと風さむくうくんつをのそたる 口 幸 「いろ風ふくはろうぬひ

口 七 「好つ風ふうまくあそこのあのさけのそ～時ろうそ

風のふるり

かぜのそち 風ノ心地

夫 九 寒 「そうみてもちりみ～袂を忘れそうそ

「そちそこ風のおろハそれそうろ口 五 ふをくよりてうそん 主馬首 「氷とく風の中ご

かぜのやどり

ろやこれろんふるりろくの池のうえま

かぜのえさ 風ノ枝 夫 九 幸 「吹きこうへ風の枝ろをそうもそこそぐそれいろうとそれ。 名・風前ノ枝ヲイフ

かぜのさた 風起。名ノ不祥 病ニイフハ已出ス

かぜねろる 風波 生 日記 傷ふー～うろれぞとくちりぬ

かぜろさ 神代紀下 廿二 毎有風雨

かぜろさそく 夫 十九 大祓詞 百番の人 西の 「万代を山田の系のあやきを

景行紀 白鹿 シロキカセキ 「赤深葉 「乾ぐ～け衣とみ

かぜさ。康ヲイフ 孫 ふなふ 雅三 夫 廿 雨 「ふろそろうやさのけぢろ

「秋六 立 「山深く行くそちのかそ名よものかそれもそてろれふろ

かぜさのその 「著等深 五甲八 弁の斎宮寮 補尚薗命記 性河 「つるの

ふてそこれ 〈ろくやそんと 既ニろノ起ヲ出ス

かぜひ ○ひミヲ ヲカクル具ニ 「時祭式 持 加世比 古倍物送 以持冬之 万 六 甲六 「ととあてごうそとかくろろ女のふそ

吉 「さろろ衣とくちりぬともおもわんぞ人のろそ風もろをあくぬ 「万 十 廿六 風も

ろをれぬのろ 古 「いろそえでうろふりの山の中の人のふの花ぶぞありろ

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79
ガラス使用

かを 貸 [夫]すはなち等内なる「天川まそそろく七夕つめ」[豆]たなそそろかさめおつけてめつく袖ゐ [古今]花上 [新拾]雅三 長くこころやりつろん [口]ゐス お客の杖豆とゐもかそろめ [万]ときそふうそのおふと風ぞがろ うへおこびれそをとだいとうひ〳〵おのゐとりとおろさ [新古]新古 さとゐ〳〵うもれかさうん旅おそ [万]雅三 「おその さひみそろく人のゐ〳〵 [葵]十七七 なろえをを人かかりくろろろ [万]雅三 一うけろ〳〵うろろとそそ

かぞ 數 [スマ]四 そろそ人のりのを伊の教ふもゐがさ〳〵 [夫]十六集あり「いそぞおきて年のゆそのあろうんやさ 数一り [古今]雅三 「ふへりくろそそくろろつれてこ〳〵ろぞれろこそ [万]雅三 うぐごろう 一ナトル 一く [一カギリナク] 一カク 一ヨツクス 一モナク 一多ク 一シラズ 一カク 一ナラヌ 一ヨリ外 是ゝ各別ニ出ス

かぞ 數 數多キ 數々心 [夫]廿 指俗名数「ワゴ屋の教のこわりの内ふ〳〵もおごれのゆそのふそ ほ 土表四「伊の江の日ふちかくぐ当ふふ者て活の教をも〳〵ちゆくさりのと

かぞこめ [和名]十六ハ 酷加須古女倍五糟交

かぞく [俠]四廿七 そろれもトまろろも夫のトふとこ一人今ろくふかぞ人ろくろくさその法所もそくそものれれ たちちぐひつく。カゾへ カズマヘ 誤リカ

かぞとり [夫]廿 永久四年百七首「家ぐ代のふごとふ〳〵ちろうちのおろされの河のふのふもうふ [風雅]賀 俊教 大後の後のすさごそ家ぐ代のかぞよとれとふ活もうろん

かぞとつくと [葵]十九いとぐ〳〵さ伝いのつのかぞとつくそせそそのそれど [ヲトメ]廿三 そのふの木教をつくそろ

かぞもろ 幽 [サカキ]四 ひさそふかそろふ出そて人げふくそめぐとそて [アカシ]廿八 協ふくろろっかをとふふるびて [拾遺]春 指木 廿四 かそろふ出へをえそふも [スマ]四 七八人ぞうれとろみていとかをとふて生ちちのふ [ミヨツシン]

九母そどもうそそかそろろ世ふへろろ [口]ろうとそそもそ

かぞく 數々。數多キヲイフ [葵]四十七 ひろちひかう教〳〵 かそぐふつくれて八名ふ男ひのくらろくおろ [夫]土 ふあ大政者「うもぐくふ

月のえそもうろろろ五位の春の和歌 [口]廿五 葵六 そ大 えそぶふその空人 [大]大将の陸奥「まそ元まのむろへのろうぎもうぐく

かぞく 。顕注毎事之。何事ニツケテモ何ニツケカニツケ 。毎事行届キテトイフニ深切ナル心ヲ含メリ

かぞふ 宣長遠鏡 [源]功 トイフニアタレリ [古今]春四 [万]十三 [新古]春四 [六帖]イセ五 百七首 教〳〵おふひやそぢふふがそ

為そろろ教ハうぞそそろろ [口]哀「かぞくふりそそろろ [万]十三 [新古]春四 [六帖]イセ五 百七首 教〳〵おふひやそぢふふがそ

くふふぶたうそひろ月ふ物の眉もふぞひろろ [万]十三 [新古]春四 [六帖]イセ五 百七首 教〳〵おふひやそぢふふがそ

えぬろも [今物]三五 大納言ハかぞく川人を拝せそ五ろり [口]四廿四 暁えまれがろぞくのひ契そそいでふろり [万]十三 [新古]春四 [六帖]イセ五 百七首 教〳〵おふひやそぢふふがそ

そそひ [世五]五ぞでやんどろ八人くろうろひろふぞくろ [万]十三 [新古]春四 [六帖]イセ五 百七首 教〳〵おふひやそぢふふがそ

ナルベシ。雅望按ズルニ一本 かぞろうより

かぞろく [万]一 め水ふかぞろくぎ教会と妹ふわそんとうけひつろも [古今]春一 [新古]春一 [六帖]イセ五 百七首 教〳〵おふひやそぢふふがそ

えろろきふやそ教人をありろろ [拾遺]春四 [秋]五 [春]三 かつえろ 教〳〵おふひやそぢふふがそ

ろろ教 [秋古]を「そろ〳〵やさてもいく教りめろ不教ろさ

かけてまつれりなのおほみかく數ならぬ身といひなせん【小大君集】そらにこそつらき數かけ河鴨のはねかきてはなやなれらん【和名抄十卷上】さゆる夜の霜かくことはわれならでいくあさきたるおきみるらん

かずかぎりなし 數限ナシ【拾遺雜】秋ほなみかぞ【】霜の毛の岩ねを蔭す白玉の數限なきさ千代のかま

かすとりめの ◦宮職ニイフ 具外之【アカシ】四十四 かずならぬくのたゆあるまゝりて數より外の椿大納言なりける

かぞへそへ 【源古雜中】着てしのえらはせとあり〳〵あまりのかどはあるねど

かずならぬ 【拾遺雜上】ひとりのこ年へなるあまあらじを數ならぬ身のあるはあらん【後撰雜二】數ならぬ身にかく身のなまがなに【千載】十二般若心経大輔 いくよの月のしのびいとでふ物はかぞなるぬ身のなるかさるとなり〳〵【後拾遺哀】かぞならぬ身は人にもたあ山里も月かくる露あまし【栄花】卅四 殿中宮出立 いろむなり哀あらん數ならぬ身なる〳〵とれし秋のもぬ【夫木】廿一 共忠度 身ならぬ身をのあるもならめて【新古今】十一 かぞならぬ身なるも【帚】十七 かくかぞなるぬ身をえもえさて【後拾】廿一 かぞならぬ身ならはまのこぎりせざくまぬそさへはなけりぞるまし〳〵【東屋】十七 んならかりけきさ人の心あくるとい事をも秋かぞならでいかひめ〳〵じ【万】五廿一 ちりひぢの數にもあらぬつれなさにもひつらんいもがかなしさ【堀川院】十四 後拾 數ならぬ

かすむ 掠 ◦カスメ ◦カスムル ト動ク カスメルトハイフベカラズ

かすみ 霞 【和名抄】一ノ二 霞 赤気雲也 和名加須美

かすむ ◦動ク詞 カスメ カスム ルゝ【狭衣】四下卅六 きえそてくらありは空にかすむとも雲のたなきをつれと思ふなあくるりはうらうさとかすむらむ空のなきそまもえん【门】下甲九 かすめよるものひきえるんなりりふも立ちおれてはくもなるまし〳〵【竹川】卅四 あなたのこゑくつるなげしさとかすむるも【松風】廿二 まとふ花のそふかをめちりしとそえ〳〵とまくて空ふく【ウスクモ】卅二 からじしてまさぐりかすめのつけそひいとあつもしげさつなふ【三為先】十二 くふさ〳〵えんかすめやまも空あやし〳〵かど【帚】廿五 さるさまりありてかすめいはせならずる世九 あらなふはいかるさでかすめられへゆへ【帚】十四 あんせべきうみそぞつへ〳〵まつさるまふのめうじうるかべうらん【あさ】

ふ〳〵そまふくからぞかすめるさと【松】三余 うとくおもひ〳〵うらうみたどまろふ【アカシ】卅三 さと近もあらなみ雲井ふなびめりこひうまめ しなの椿まそらふ【千載】十七上 陸国 山里のかれ鐘ふまやあいらんかまずねさえふきるのあく【風雅】十七上 先參井入道【五代】十七上 三品法親王覚 花ならぬ外山のまの松ならけかすめる外は又なきまし〳〵みらむこ〳〵まるの峰へきるなかまめて道えきさわけおのくその

かずおほく 數多 【ワカナ】下ノ五十三 家ふおひめらわらべのかずおほくなりふるを【さうらい】十五 中納言殿なりも人ゝ數多くきまこありり

かぞへまふ ◦大名音者ヨリ下ノ者ヲカステズ 數ヘ内ニヘレテアハレミカヘリミルコヲイフ【狭衣】四下卅 おきまくくあかきあのあるそ悔ふるかつけてくれあがく〳〵かぞまふむるりはあらん【竹川】十七 今はかく世ふあり數ふあらぬかへおほくかぞまへらんらり〳〵かぞまへてあるふるまよりまくにふくふといひ〳〵むらふ【東屋】十一 かぞまへらんありや【東屋】廿一 かはあざるふかぞまへふひ〳〵の人の【竹川】三番 ふかえらで數まへあるづらくあなふ【若菜】十 かくうきなくへつきにはありさまひかぞまへのひて人はありなんや【スマ】十二 かくかぞまへのひて人のこえなせめへするとまろうこび笑へのさま

かずさし 【若菜】廿二 かくゆりるさ〳〵そひすだけてかなしふをなまへさせるへ【花宴】負指トテアルヘ天徳ノ哥合ニ金銀ノ枝ノ枝ヲ削貫ニスエテ カズサシノ松ニオク花ノ枝ニテ數ヲトレル之【岷江】私 五子内親王歌合ノ日記云 數さし〳〵のかねのきえ王ふさ〳〵てのにそ松ふさうる狭山み松をおほく挿さうりかぞふはえまべふさ〳〵うつきぐなえ右數ほかれのまえはまかれのつあまくたてり〳〵とつきりとりふへく數ふはつるの浦つくひをべきなり【文徳実録】四ノ六ウ 幸豊楽院観諸衛府賭射公家以白布賜勝者其多籌者得布亦多先生旧式也【江次第】八ノ角力条十九ウ 籌刺府生著座【天徳歌合】かずさし〳〵のまえまはさうのきえふかく【狭衣】ぞ 毛生 ながく合モノ哥ニ 數さしくとてさくれなるすき〳〵ふとまませまぞと論ぜんど

かすみをとこ 霞男 【古事記】中六十三 春山之霞壯夫

かすゆ 【和名抄】十六ノ九 糟 和名加須 酒滓也【万】五廿九 さむく〳〵あれなかゝまわをとりつゝしろひて糟湯

酒うちまくろひて

かすみのいろ 霞色 [夫]廿 六百 春歌下 「春秋にとめるをねにハ白雲のか霞のこまよりくだてぞさる

かすみのころも 霞ノ衣 八雲御抄 とありともあり [古今]哀傷 康秀 「春ふかき霞の衣にけりして立ひのえ九

かすみのそで 霞ノ袖 [新撰]雑上 撰者ハ少女ふかけりし山姫の霞の袖のころ月かげ かふ花やかあらぬ

かすみのそこ 霞ノ底 [拾遺]春下 式子内親王 「見ててり春のさごりをながむれば霞の底にあり明の月

かすみのたく [新千]「たづねてぞ花とありかへろ廿山霞のたくにきえし白雲

かすみのころも 霞ノ衣 [古今]春上 行平 「春のきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

かすみしく [堀] 河百首 後拾 「立かへつ春のしるしハうすかすみしく小夜の山の雪のむらぎえ

かすみ 霞

[夫木]三 雅経 「すれ中ぬ雲ハあるげの春風に霞あすまぎろみよしのくそら [門] 光明峯寺 へ入道 ほのかまたきぞゐひく雲のちの入のはてに春ハきにけり [門] 従二位家隆 春のくる霞の衣の来りにおれぐとそうふつげやくま入のかく山 [門] 家隆 立そへ入かおりみの海の中へかすみつれどとても入ごとてそく行く

[門] 家隆 「あさみどり霜いろ入りぐろ海に春ある波の花ぞうつろふ [門] 為家 音のとの霞の笹あれまくふふ春てふけ山の夕風 [門] 雲のぼ 「ながれふるむくりたとづねて霞にむすぶ春の山ざと [門] 隆房 かつらき久めぢの谷のむらがたをとぶれハ梅ふりぎりぎりけり [門] 清 「あの救の冥のとお母もあらで霞くきぎる杉のむらぐち [門] 兼隆 「久のくや春すつ〜母のうへ霞きむしるこその冥ちふぞさる [門] 「ゐのぐと霞つの袖の花をとつるへ白きうろのうる波 [門] 家長 「みざてつうまへのをふもえく小霞ゐづうくうぢの白波 [門] 慈円 あらや岸の柳のふりみどりかすみのきれの来る〜ろうくり [門] 定家 「さわ姫ふ〜すきの生袖〜さむけ春よこぐ〜き嵐うちきさえを [門] 仲実 「あをハまくこたちやきへん書さえぬいぶきのさけの岸のをくすて [万]十七 「古への人のうゑけん松がえふかすみ〜ゐひく春ハきぬらし [門] 一 ひさうるの天のかく山この夕霞くまびき春くるらし〜

かずしらぬ 数不知 ○カゾヘモツクサレヌ 大方上ヘオキテイヘリ [拾遺]五 こゑきかるさんと合せてえしころあ[illegible]ぞもふ[illegible]かり ゐふふとてかずしらぬぞくろ〜ききのきつきれぞ [サカキ]十六 女房 [清撰]春上 後崔 数しらずかさうる[illegible]しとおの[illegible]の花芽ともが[illegible] [夫]廿 雅俊 [illegible] [ミのり]十 [illegible]

かげろふ [かげろふ]十二 [illegible] ○コレモ数カギリナキナリ [拾遺]十一 長盛 「[illegible] [古今]三 数も[illegible] [廿]一 [illegible]

かずもなく 夜の人よ数も[illegible]

かさも [和名抄]三ノ廿三 飼面 和名加須毛 面皮上有滓是也

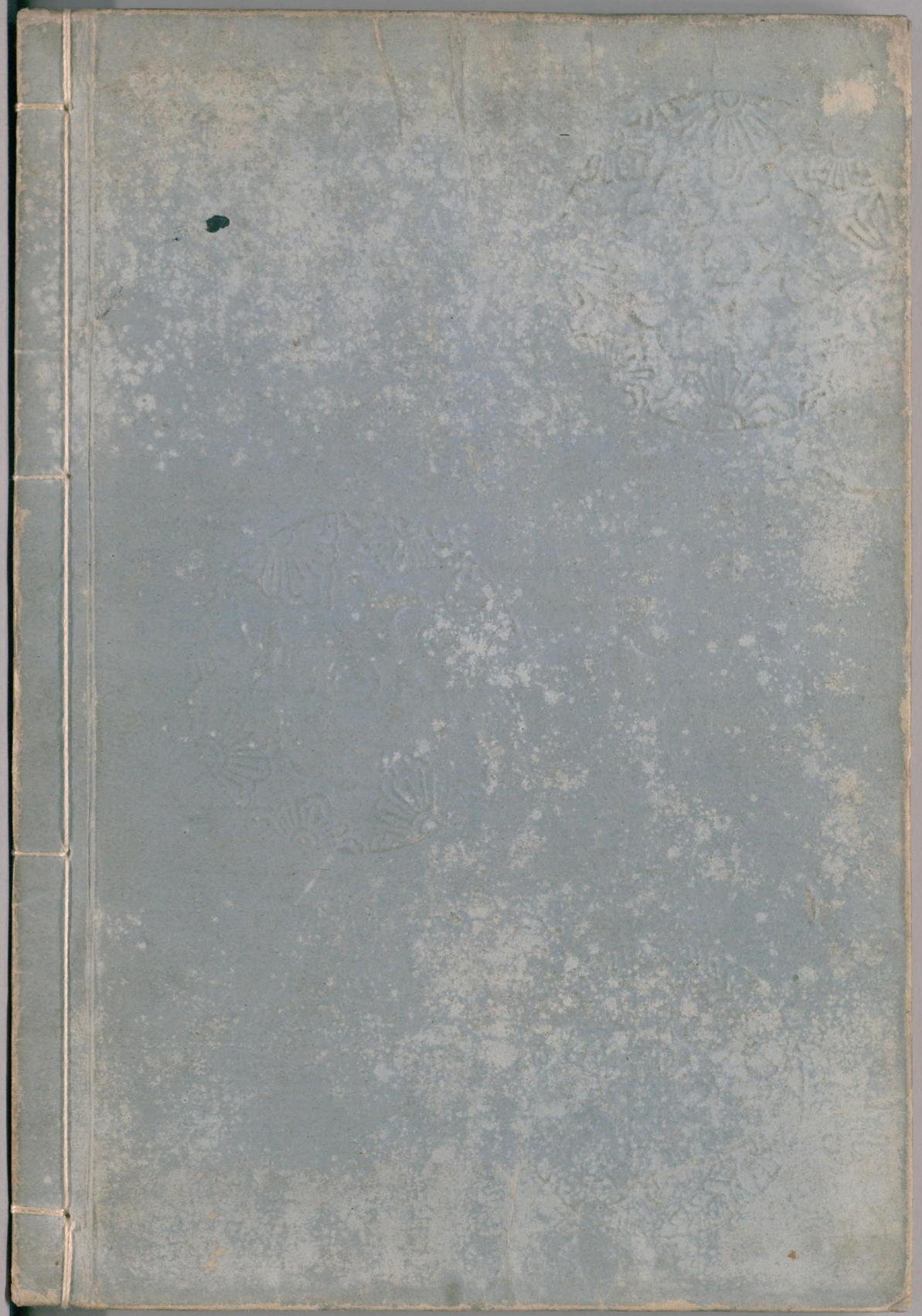
かさもこ 腴 [和名抄]十六ノ十六 四声字苑云 腴鳥到反 今按俗云加須毛美 ○ 糟 二[illegible]肉之

雅言集覧巻之五ノ下終

837
13
79

国立国会図書館　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『雅言集覧 13巻』 請求記号 837-79

ガラス使用